
魔王の壁越え

武藤緒実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の壁越え

【Nコード】

N6806V

【作者名】

武藤緒実

【あらすじ】

幽遊白書の浦飯幽助がHUNTER×HUNTERの世界にトリップします。

以下注意書きです。必ずお目を通してください。BLに関しては苦情等を受け付けません。

BL的な露骨表現はありません。ですが、自分の萌えに従って書きたいように書くことと思っていますので、BL部分はなくなりませ

ん。あくまで二次小説ですので、登場人物はBL化するものと思っ
てください。（幽助がBL化することはない予定です。）少しでも
BLが嫌だと感じる方は、お読みにならない方がいいかと思います。
携帯サイトで書いたものを順次こちらにアップしています。

幽遊白書連載終了後、幽助が魔界統一トーナメントで優勝したと
きで、HUNTER×HUNTERはハンター試験編からの原作沿
いになります。

いくつか幽遊白書にはない特殊設定を加えています。

蔵馬×幽助が好きだったこともあり、この作品内で蔵馬は幽助に
ぞつこんの変態設定になっています。ただし、蔵馬は作品には名前
ぐらいしか出てきません。

幽助がトリップしたことによりHUNTER×HUNTERのパ
ラレルワールドとなっています。つまり、原作沿いではありません、
セリフや行動が原作とは違います。

以上の点を踏まえ、それでも構わないという方のみお楽しみくださ
い。

試験前

魔界統一トーナメントの決勝戦は、黄泉との一騎打ちになった。連打、連撃の嵐が一週間続いている。俺にしても黄泉にしても、実力伯仲の中で一週間に及ぶ戦闘はきつい。ようやく見つけた一瞬の隙を見逃すわけがねえ！

刹那に莫大な妖気を指先へ凝縮し、俺の霊丸をぶっ放した。
「ぐうあッ」

黄泉は全身でガードし、押し返そうとする。負けつかよ！さらに妖気を込め、体中の妖気を搾り出し、この一発に賭ける。

「っらああああッ！！」

乱れた髪がボツと伸び、体に妙な模様が浮き出た。自分でも制御できないくらい妖気が溢れ出し。

最大級の霊丸は、黄泉をぶっ飛ばした。

黄泉選手ダウンッ

浦飯選手、優勝だアアアッ

大歓声が沸き起こった。観客席の飛影、蔵馬と目が合ったところまでは覚えてる。俺と黄泉の最後の攻防のせいか、空気が何やらバチバチと音を立てていた。覚えている周囲の様子はこれだけだ。

倒れている黄泉もだが、俺だってギリギリで闘ったんだ。もオ立てねー。立てねーけど笑いが止まらない。

「へ、へへへ……勝ったぞオオオッ！！」

全力で声を上げ、闘技場のど真ん中で大の字になって目を閉じた。

大満足の寝入りだ。

が。

おや、いつの間に来てたんだろう。

ちよつとあなた、プレート受けとってくださいよ。

まいったなあ、起きないや。

上半身裸だし、ズボンに付けておきますよ。

時間になったら起きるのかなあ。

まったく、図太い方だ。

一次試験開始

何か言ってやがる。るっせえなあ。もうちつとくらい眠らせるよ。せつかく俺ア優勝したんだからよオ。

俺は眠り続けた。周りに段々と人の気配が増えていく。きつと俺の優勝の祝いにでも来てくれたんだろう。悪いね。俺アまだ寝る。もうちつと待て。おいおい、悲鳴とか聞こえんだけど。何やってんだよ。ったく、どいつもこいつも血の気が多くていけねえよ。ま、だから魔界統一トーナメントとか開いちまうんだけどな。

周囲そっちのけで休眠していたそのとき。

ジリリリリリリリリッ

目覚まし時計のような大騒音に、ガバツと体を起こした。その途端、体からバラバラと何かが落ちた。何だ。カード？ お、トランプだ。なぜこんなところに？ ん？ 缶ジュースまである。お供えかよ。動きやすい戦闘衣でもある柔らかく、けれど頑丈な生地のスポンには、丸いプレートがつけられていた。そのプレートには、黒くデカい文字で1とかいてある。なんだこれ。

疑問を浮かべていると、周囲はさらに疑問だらけの状態だった。いかつい男がひしめき合う岩家の中。その男たちの視線の中心は、ダンディーなヒゲの男に注がれている。

誰だアレ。あんなヤツ、魔界にいたか？ つーか何だ。ここにいろヤツら、みんな人間じゃねーか？

周囲の男たちからは核じゃなく心臓の音が聞こえるし、どう見ても妖力じゃなく霊力を感じる。しかも、体は屈強でもそんなに霊力は強くない。魔界のC級妖怪にすら食われちまいそうだ。何だこの集まりは。

わけのわからない状況に目を瞬いていると、皆の注目を浴びてい

るヒゲダンディーが口を開いた。いや待て、アイツ口、なくね？

「ただいまより、第287回ハンター試験を始めます。私は第一次試験官のサトツと申します」

ヒゲダンディーはサトツさんというらしい。何の試験なのかよくわからないが、彼が一番霊力が強そうだ。体を上手く霊力で覆っているくらいだ。あれなら何とかB級と戦えるだろう。

「今から二次試験会場へご案内いたします。ただし、場合によっては命を落としかねない危険な試験です。覚悟のある方のみ、私についてきてください」

そう告げると、サトツさんは後ろを向いて歩きだした。

ワオ。そいつあ楽しそうな試験じゃねえか。よし、何かわかんねーが、ついて行ってみっか。

首で跳ね起きると、ふくらはぎまである長つたらしい黒髪がバサツと体にかかる。ゲロ。そっぴや黄泉と闘ったときにいきなり髪が伸びやがって、体にわけのわからん模様が浮き出たんだっけか。

黄泉との闘いで上半身の服はボロボロで、用を為さない。ぶっちゃけ残ってる部分のが少なかったから、破いてその場に放り捨てた。自分の体を見下ろせば、さっきまであった体の模様は消えていた。どういうときにアレ出んだろか。つか模様消えたのに、伸びた髪はそのまんまかよ、うざってえな。ハサミねえし、ま、このまま行くか。

俺は走り出した集団にのんびりついて行っただ。

出会い

ずいぶんゆつくりだなあ。大アクビが止まらん。

サトツさんの霊気は覚えたから、寝ててもついていける。走っちゃいるが、この速さなら散歩みてえなもんだ。

何十回目かのアクビをしたとき、髪の毛を立てた坊主が俺に声をかけてきた。

「ねえ、君、名前何て言うの？ オレはゴン！」

透き通った純粋な目をした坊主、ゴンが笑顔で名前を聞いてきた。見た目、12か13かかってところか。どうも俺が同じくらいの年だと思ってる口ぶりだが、怒る気にはなんなかった。たぶん、こういうヤツ、弟にいたら楽しそうだ、と思ったからだろう。

「俺は幽助だ。浦飯幽助」

「ウラメシくんっていうの？ オレはゴン・フリークスだよ。ゴンって呼んでね」

につこり無邪気に笑うゴン。うむ。まだ粗削りだが、こん中じゃピカイチの霊力じゃんか。

「あ？ ギンが名前か。それでいくと、俺は幽助・浦飯だな。幽助でいいぜ」

「ユースケだね！ よろしく、ユースケ！」

「おう！」

にはつと笑いを交わす。すると突然、ゴンが後ろに引つ張られていった。そこには酷く焦った様子のグラサン男と、金髪の少年がいた。どうやらゴンの知り合いらしい。グラサン男が声を潜めて、ゴンの耳に怒鳴り付けた。

「ブアツカヤローツ！ お前ってヤツア何を突然危ねえヤツに話し掛けてんだよツ！」

「そうだぞゴン！ 見るからに危険で、しかも寝ながらヒソカのトランプをいなすような輩なのだぞ！ 話し掛けた瞬間に殺される可

能性だつてあるというのに！」

はっはっはっ！

こちらら魔族だぜ。耳の良さ、ハンパねえんだぜ。声ひそめても丸聞こえだっつーの！

まあな。上半身裸だわ、髪の毛ブキミなくれえ長いわ、不審者と言われても反論はできねえ。いや、地味に腹立たしいが、ここで靈丸ぶちかますほど大人気なくはないつもりだ。堪える俺。ゴンが反論する。

「えー。でもユースケいい人だよ」

ゴン。いい子だ。

「サンキュ、ゴン」

ニツと笑つて言うつと、グラサン男と金髪少年が焦りだす。それにも流し目を送る。全部聞こえてんだよ、ターコ。

いい人っつーか人間じゃねえし、どっちかってーと悪人寄りだけどな。はっはっは。

グラサン男は焦りついでに話題を急転換させた。顔をきよるきよるさせ、目に入つたヤツに怒鳴り付けた。

「あ、お、おいガキ、それは反則だろツ！」

相手はゴンと同じくらいの年の、銀髪で猫目の少年だった。少年がスケボーに乗っていることを咎めたらしい。なんで反則？

猫目の少年も「なんで？」と口にした。

「これは持久力を見る試験なんだぜ！ それをお前」

ああ？ これじゃ持久力見れんだろ。ただの散歩だべ？

思わず眉間に皺を寄せる俺の気持ちを代弁したのは、ゴンだった。「違うよ。試験官はただついて来いって言ったただけだもんね」

いや、俺の疑問とは微妙に違うような。こんな持久力を試すほどのもんじゃ、と思つたんだが、ふと周りを見れば男たちがやたら息苦しそうに大汗流して走っているし、グラサン男も金髪少年も息切れしている。これ、そんな辛いのか？

「なんだよゴン！ お前どっちの味方だよ！？」

グラサン男がゴンに絡んだ。なんか情けねえなあ。そんなところがちつと桑原に似てて笑える。あいつ今頃大学生か。ちゃんとやつてんのかねえ。あいつ、あれで意外と真面目だよ。子猫を可愛がるリーゼントの老け顔を思い出して、顔が緩んだ。

グラサン男を止めたのは、金髪の少年だ。

「怒鳴るな。体力を消耗するだけだ。なによりうるさい。ハンター試験は、何を持ち込んでもよいことになっているのだよ」

明らかに年下の金髪の少年に窘められ、拗ねた様子のグラサン男。おもしれー。

密かに笑っていると、スケボーで猫目の少年が寄ってきた。

「ねえ、君年いくつ？」

こいつも俺を同じくらいだと思ったらしい。何でだ。ふと気付いた。そういや俺、魔族になったときから年とってねーんだっけ。つーことは見た目は15か。それ以前に不審者か。

「こないだ19になったとこだ」

そう答えたら、猫目少年は猫目を見開き、ゴンも見開き、金髪少年も見開き、グラサン男が叫んだ。

「お前、俺と同じ年かよッ！」

「ウソオッ!？」

ゴンと猫目少年と金髪少年までもがグラサン男の方を向いて叫んだ。

「おいコラ! どういうことだ!？ ギンまでひでエよ!」

そう嘆いてグラサンを取ると、幾分若く見えるもまだまだ老け顔。見えねーわ。19には見えねーわ!

「だあっはっはっはっ! 老け顔なところも桑原そっくりじゃねーか! よろしくな、桑原2号!」

ガシツと肩を組むと、桑原と同じく2号も背が高く、ぶら下がるような不格好になるが気にしない。

「そりゃ誰だよ!？ 俺アレオリオだ!」

「俺は幽助だ。よろしくな桑原2号」

「レオリオだっつーのッ！」

桑原2号もとい、レオリオと肩を組んで走っている間に、他のメ
ンツのことも知った。

金髪少年がクラピカで17歳。ゴンと同様粗削りだが、なかなか
いい霊力を感じる。

銀髪猫目少年がキルアで12歳。ゴンと同年。こいつもゴン、
クラピカと同様の粗削りな霊力だ。

レオリオもそうだが、こいつらみんな、鍛えたら強くなりそうだ。
いやまあ強くなりたいなんてこいつら言ってねーけどさ。

走り続けて数時間。俺にとっちゃ散歩なんだが、周囲にとっちゃ
死に物狂いの行軍らしい。

誰も彼もが大汗を流し、息も絶え絶え、なんとかついて行っている。
クラピカも、特にレオリオが辛そうだ。

そんな中、平気なのは俺とキルアとゴンだけだ。自然にサトツさ
んの真後ろまで来ていた。

「ねえ、二人はどうしてハンターになろうと思ったの？」

微かに汗をかいているゴンが聞いてきた。ハンター？

またも疑問符を浮かべていると、先にキルアが答える。

「べつにー。なりたいわけじゃねーよ。難関だつて聞いたからた
だの暇つぶし。だけど難関つて割にたいしたことねーのな。退屈だ
ぜ」

内心では同意する。が、それを受かきたいという奴がいる前で口
に出すほど、俺はガキじゃねえ。 gon はどんな反応をするか。

「ふーん。じゃあユースケは？」

gon は自然体であっさり流した。へえ。ガキのくせに器のデカイ
たいした奴だ。こりゃ将来化けるぜ。こついうヤツは好きだ。

「俺？俺はなあ」

gon に水を向けられ俺は言い淀む。つかさ。

「なあ。この試験に受かると何かもらえんのか？」

「え？」

「は、ああああ！？」

キルアは呆れた叫びを上げ、ゴンには不思議な生き物でも見るかのような視線を向けられた。

「ハンターだよ。ハンターライセンスもらって、ハンターになれるんだ」

「あー。つまり、それをもらうと散弾銃が使えるとか、禁猟区に入れるだとか、そんな感じか？」

「違う！」

二人から突っ込まれた。ゴンから熱心に説明を受けたことによると、ハンターとは賞金首を狩ったり、遺跡を発掘したり、珍獣を保護したりとその仕事は多岐に渡るらしい。ハンターになれば様々な特典があり、毎年受験者は数千人いても、受かるのは数人という狭き門だとか。そんなあったっけか？ 人間界も広がったんだなあ。

ゴンは親父がハンターで、親父みたいなハンターになりたいのだと言った。親父が何をしているのか知らないのに断言するあたりがイイ。

「どんな親父か、ゴンがどんなハンターになるのかわかんねーけど、お前は有名なハンターになるぜ」

「へへ！ ありがとう！」

「ふん。なんでユースケがそんなことわかんだよ」

嬉しそうに笑うゴンと、嫉妬して拗ねた様子のキルア。おーおー。ガキらしくていいねえ。

「なんでわかるかって？ そんなん勘に決まってるだろ」

へっ、と呆れたようにキルアは鼻で笑うが、大物ばっか見てきた俺の勘が言ってるんだぜ。舐めちゃいけないよ。

「でもユースケが言うならほんとになりそう。オレががんばってハンターになるよ！」

信じる、と真っすぐな目を俺に向けるゴン。この目と性質がこいつの最大の強味だろうなと思った。

奇術師

階段を上がり始めてから数時間。一度撃沈したかに見えたレオリオが、俺と同じく上半身裸になって再び走り出した。

絶対医者になってやる！

あいつ、イイな。実は真面目ってあたりまで桑原に似てるしよ。階段を上がると、先に光が見えてきた。終わりか。

汗もかかず、息も切らさず俺は階段を上りきった。ゴンは少し汗をかいていたがまだまだ元気で、隣にいたキルアも平然としている。出たところには、湿原が広がっていた。立ち止まったサトツさんが、後ろを振り返る。

「ここは又メーレ湿原、“詐欺師の埒”と呼ばれています。騙されると死にますよ」

騙されると知っていて騙されるかよ、と誰かが言った。そうだな。騙されねえよ。

「そいつはニセモノだ！ 騙されるな！」

脇で猿が騒いでいた。人間によく化けてる。なるほど、ああやって騙そうとするわけだ。だが、明らかに猿じゃそうそう騙されてくれる人間はいねえだろうな。

と思ったら、受験者は結構疑心暗鬼になっていた。サトツからじわじわと離れていく。おいおい。しゃべっておもしれーとは思うが、アレ、モロに猿じゃんかよ。

レオリオあたりも騙されている。なるほど、息も絶え絶えで思考力が低下してんだな。

腕を組んでどうすつか、と思っていると、猿にトランプが刺さってぶつ切りにされていた。

何やら妙な靈気のついたトランプだ、とわかったのは、俺にもそれが飛んできたからだ。

トランプを投げた奴は、目の下にそれぞれ星と涙の化粧をした、

ピエロみたいな男だった。なんか記憶の隅っこにひっかかるな。誰かいたなこういう奴。あ、昔の美しき魔闘家鈴木だ！

鈴木もどきがクククツクツと笑いながら前に出る。

「なるほどなるほど。あつちが二セモノ。試験官はハンターが無償で行う。ボクらが目指すハンターがこのくらいでやられてしまうわけがないだろ」

サトツさんもトランプをキャッチしていた。うん。猿とサトツさんにトランプが飛んでいった理由はわかった。だが、なぜ俺にも。

サトツさんから警告を受けた鈴木もどきに近寄り、トランプを突き出した。

「お前なあ、間違つて俺にまでこんなもん投げんなよ」

俺だからよかったようなものの、周りのD級妖怪にさえやられちまいそんな奴らに当たったらただじゃ済まないぜ。渡したときの鈴木もどきの顔はキモかった。ニタア、とヤバい笑いを浮かべ、俺からトランプを受け取る。

「君、ホントおいしそう。名前なんていうの？　ボクはヒソカ」

なんか変なこと言ったぞ。こいつ、ヤバい奴だ。

「いや。うん、名乗るほどのもんじゃないっつーか、そんな感じだ」
名乗ったら知り合いになっちまう。じゃ、とキルアとゴンを両脇に抱え、最速で逃げた。変な奴のいるところに、知り合ったばかりとはいえ、かわいい弟分たちを置いていけねえだろ。

最後列にまで移動し、キルアとゴンを下ろした。すぐにキルアが文句を口にする。

「お前、一番後ろとかふざけんなよ！　はぐれたらどうしてくれんだよ！」

「つつてもよー、お前、あんな変な奴のそばに置いて行かたくねえだろ。でえじょうぶ。サトツさんの霊気は覚えたから、どんだけ離れても辿り着けっからよ」

「レイキ？　って何？」

ゴンが首を傾げる。

「靈気つっーのは体から出るオーラだよ。一人一人みんな違うから、人間見分けるときにや便利だぜ」

「すごい！ ユースケそんな見えるんだ！　ねえ、オレはどんなレイキなの？」

無邪気な子犬みたいだな。ゴンの靈気は、燃えるような青。単純な戦闘馬鹿に多い色だ。俺もその傾向があるわけなんだが。

余計なことは付け加えず、色だけを伝えた。

「へえ、オレ青なんだー。見えないけど嬉しいなあ」

「騙されんなよ、そんな見えるかよ。ホントに見えるならヤベエ奴だ」

「ちなみにキルアは緑だぜ」

実は興味津々だったキルアには当然気付いていた。別に知りたかねーし、なんてどこか嬉しそうに強がりと言うキルアはかわいいガキだ。

緑の靈気は気分屋で嘘つき、捻くれ者に多い。まさにキルアだ。

「だいたい色は5色に分けられんだ。色以外には靈気の出方とか大きさとか、形だとかで人間を識別できんだよ」

へえ、と感心しきりのゴン。キルアもかなり気になっているらしく、耳が俺に向けてぴくぴくしている。

「人間を識別するって、ユースケまるで自分は人間じゃないみたいなの言い方だね」

純粹故か、ゴンは鋭い。

「わかっちゃったか。俺、実は魔族なんだよなー」

はっはっはっ、と笑って本当のことを告げると、ゴンは真顔で聞いてきた。

「魔族って何食べるの？」

嘘っぱく言っただにも関わらず、ゴンは真実と見抜きやがった。まったく、たいしたもんだ。

「人間と同じもん食ってるぜ。中には人間を食う奴もいるけどな。もう俺が食わせねえよ」

「そんなことして他の魔族は怒らないの？」

「おー。俺が魔王になったからな。破る奴はけちょんけちょんにしてやるぜ」

「そっか。がんばってね！」

本気で応援された。こんな話、俄かに信じる奴がいるとは思わなかった。器のデカさがハンパない。

「はん、バカバカしい。ガキだと思ってほら吹くなよな。いくら迷わない自信があつたって、先着順に切られるかもしれねえじゃん。さっさと行くぜ」

動き出した受験生に混じり、キルアは走って行ってしまった。ま、あれが普通の反応だろう。

「先着順だったら大変だ。ユースケ、前の方に行こうよ」
「おう」

ゴンと共に俺は集団の前に向かって走り出した。

集団の脇をすり抜け、俺とゴンとキルアは、再びサトツさんの真後ろまで来ていた。次第に霧が深くなる。

集団の後ろの方にいる鈴木もどき、もといヒソカっつー奴が殺気を撒き散らし始めた。こりや危ねーな。そのことに、キルアも気付いたらしい。

「前に来て正解だぜ。あのヒソカって奴、この霧に乗じて相当やる気だ」

キョトンとするゴンに、キルアは得意げに言う。

「なんでわかるかって？ それは俺があいつと同じ種類の人間だからだよ」

まあ確かにキルアとヒソカは同じ霊気の色をしちやいるが、きつとそういう意味じゃないんだろう。

「同じ種類？ におい全然違うよ」

「そういう意味じゃねーよ！」

かくな、犬かよ！ と突っ込むキルアに首を傾げるゴン。くく。
ゴンはおもしろーな。

「とにかく、前に来た方がいいんだね。レオリオー、クラピカー！
もっと前に来た方がいいってさー！」

後ろに向かってゴンが叫ぶ。

「行けるもんなら行つとるわ！」

後ろを走る人混みの中から、すぐにレオリオの怒鳴り声が返ってくる。そこをなんとかー、と応じるゴンに爆笑だ。

「つたく、緊張感のない奴らだな！」

「本当だな」

「お前もだよ！」

相槌打つたら、俺までキルアに呆れ混じりに突っ込まれた。まあ緊張感がないのは事実だが。

そうこうしている内に、奴が動いた。

ウワツ

あああッ

集団の後方で、悲鳴が上がる。十数人の靈氣が一瞬で消えた。殺つたのはヒソカだ。

「どうしたんだろう」

不安げなゴンに、キルアが鼻で笑って冷たく応える。

「ヒソカが殺し始めたんだろ。さっき一緒にいた奴らが心配かなら悲鳴が聞こえないことを祈つときな」

ゴンは背後を気にして、後ろ向きで走る。確かに心配だ。ヒソカの靈氣は、この集団の中じゃ一番洗練されていて強い。まだ未熟なレオリオやクラピカが無事に済むとは思えねえ。

不安は的中する。

再び上がった悲鳴の中に、レオリオの声があった。瞬間に後ろへ駆け出すゴン。その背中に向かってキルアが声を上げる。

「おい！ 放っておけよ！ ここではぐれたら終わりだぜ！」

「後で追いつくから、キルアたちは先に行つてて！」 たいした駿足で、ゴンはすぐに人混みに紛れた。

「は！ ばっかじゃねーの、アイツ！ 他人のために何考えてんだよ！ だいたいヒソカに敵うとも思ってたのか！？」

キルアが悪態をつく。心の奥にある気持ちは、そんなことを言いたいのではないだろう。不器用だよなあ。

「キルア、先に行ってるよ。ゴンは俺がちゃんと連れてってやるからよ」

「はあ！？ ユースケまで何言ってるんだよ！」

「サトツさんの霊気は覚えたつっただろ。地球の裏側だろうがなんだろうが、ちゃんとつれていってやるから心配すんな」 キルアがぐつと押し黙る。そのすぐ前を走るサトツさんの、何かを言いたそうな視線とぶつかった。

「あなたは……、いえ。お気になさらず」

さつと視線を前方に戻すサトツさん。気にするなと言われても、途中でやめられたら気になるっつーの。だが、今は問い詰めている時間がない。

「じゃ、後でな」

後ろへ向かう俺に、キルアは正面を見据えたまま、何も言わなかった。俺が着いたときには、転がる屍だらけの中、ゴンがヒソカと一対一で対峙していた。何があっただ。

傍にはレオリオが顔を腫らして気絶し、クラピカが見守っている。なぜか、ゴンがヒソカに「合格」とか言われていた。何に受かったんだ？

「なあ、何があっただ？」

立ちすくむクラピカに聞いてみる。ビクツと振り向くクラピカ。隣に来たのに気付いてなかったらしい。

「……ユースケか。気配なく隣に立たないでほしい」

悪い、と軽く応じる。嘆息しつつも、クラピカは状況を教えてくれた。

曰く、集団の後方にいたら、ヒソカが突然試験官のまね事を始めたという。トランプ一枚で周囲の受験生を屠り、トランプの第一

波を防いだクラピカたち数名は逃げることを考えた。だが、レオリオはそれをよしとせず、立ち戻りヒソカに挑む。で、あーなった、と。んでゴンは、レオリオに止めをさしそうなヒソカを止めるため、釣竿で攻撃、的中し、合格をもらって今に至る。

正直、ゴンを「青い果実」扱いし、股間を滾らせるヒソカは、直視したくないほど変態だと思う。マジやべー。

あんな変態の視線に、かわいい弟分を晒しておきたくはない。さつさとゴンを抱えて逃げよう。そうしよう。

そう思っていたら、あるうことがへんた、いやヒソカに声をかけられてしまった。なんであんなに嬉しそうなんだろう。

「やあ、ユースケ。来てくれたのかい？」

いや待てお前なんで名前知ってたんだよ。

「名乗ってねーぞ」

「クク。奇術師に不可能はないのさ」

奇術師っつか変態だろ。ストーカー的な知り方だったに違いない。変態は蔵馬だけで十分だったの。

「ねえ、ユースケ。ボクとやろうよ」

「嫌だ」

何だか腹黒、違った、蔵馬がよく俺に言う「やりましょう」と同じ感じがした。ぜってーろくなことじゃねえ。

「えー。やろうよ。うれしいよ」

「俺は楽しくない。やんねー」

そう言わず、断る、いいじゃない、よくねーよ、とやり取りが続き、痺れを切らしたのはヒソカの方だった。

「じゃ、イクよ」

めっちゃ笑顔で飛び掛かって来やがった。仕方ねー。振り返ちにしてくれるわ。足を開き、腰を落として身構えた。だが、かかってくる前にピタリとヒソカは動きを止め、どこからともなくケータイを出した。二つ折りのケータイを耳に当て、口を開く。

「もしもし」

「何してるの？ 二次試験会場着いたよ」

「試験官ごっこ。わかった、今からいくよ」

俺の耳はケータイの相手の声まで聞こえた。どうやらヒソカには仲間がいるらしい。

「持つべきものは仲間だね。ユースケとはまだ戦えるチャンスがありそうだから、ボクはもうイクよ」

ケータイをどこかへしまうと、にっこりと嘘臭い笑いをゴンにむけた。震えるゴンに、ヒソカは聞いた。

「会場まで行けるかい？」

「ゴンは無言で頷いた。」

「まあ、ユースケがいれば大丈夫だろうね。そこのはボクが運んであげるよ」

そのの、と示したのは、気絶しているレオリオ。ヒソカはレオリオを軽々と肩に担いだ。クラピカとゴンが慌てる。

「大丈夫。殺したりしないよ。彼も合格だから」

そうは言うが、こいつは霊気の色から見て、気まぐれで嘘つきだ。途中でレオリオを絶対に殺さないとは限らない。走り出そうとするヒソカの前に立った。現れた俺に、ヒソカが目を丸くする。

「……驚いた。いつの間に」

「レオリオは置いていけ。レオリオ一人、いや、それにゴンとクラピカを担いだところで俺のスピードはかわらねーよ」

瞬きを二つ。おぞましい笑みを浮かべたヒソカは、俺の肩にレオリオを落とした。レオリオ程度の体重じゃ、重さなんて感じねーわ。目に妖気を込めて睨むと、ヒソカは体を震わせ、あるうことが、股間を盛り上げている。うげ。

「じゃあボクは先に行くよ。また後で」

股間を膨らませたまま、変態は走り去った。

「ったく。やつべーヤツがいたもんだな」

振り返れば、クラピカが深く息を吐き、ゴンが地面に膝を着いた。「おい、大丈夫か？」

ゴンが震えているのに気付いて声をかける。うん、と力無くゴンは頷いた。

「でも、すぐドキドキした」

「そうか。わかるぞ。奴の殺気はただ者じゃない。恐れて当然だ」
落ち着いたクラピカが、ゴンの肩に手を置く。いや、違う。ゴンの様子は恐れた者のそれじゃない。ゴンは言った。

「怖いのかな。わからない。けど、すぐドキドキして、あいつと戦いたって思ったんだ」
ゴンの言葉にクラピカが絶句する。ゴンは自分の気持ちを持て余していてそれに気付かない。自分が普通じゃありえないことを言っただけと気付いていない。

こいつ、俺と似てんな。

くっ、と笑って、ずり落ちたレオリオを担ぎ直す。その動作でレオリオの存在を思い出したクラピカが我に返った。

「ヒソカのこととは後回しにしよう。今は、ここからどうやって二次試験会場に行くのかを考えねば」

焦りつつも、冷静に状況を分析していくクラピカ。こいつの頭のよさそうなどころって蔵馬に似てるな。冷静に変態なところまで似ないでくれよ。

辺りは濃い霧で、1メートル先もよく見えない。景色がないため、方向感覚も狂っていくんだろう。普通なら。

「大丈夫だよ！ さっきヒソカがレオリオを担いだでしょ。多分あのときにレオリオのつけてる香水がヒソカについたんだ。そのにおいを辿っていけばいいよ」

キョトンとする俺とクラピカ。確かにレオリオから香水のにおいはするが、いくら魔族の嗅覚でも移り香を辿るのは無理だ。まさか。同じ思いでクラピカが言う。

「……いや、しかしそんなにおいなどどこにも感じないぞ」

「わかるよ。あっち」

自信満々にゴンが指差す。マジか！

「だあっははは！ 犬かお前！」

「信じられない。人間の嗅ぎ取れる幅はそんなに広くはないはず」

「すげーな、ゴン！ よし任せた！」

「うん！ ユースケはレオリオを頼むね」

「おう」

gon は走り出した。迷いは一切ない。地面を嗅ぎながら進んだ。たいしたもんだ。ちゃんとサトツさんの霊気がする方へ行つてやる。

gon の後ろを、俺とクラピカが並んで走る。若干クラピカの方が身長が高い。こういうとき、成長しきる前に魔族になっちまった自分が悔しい。

「ユースケは、ゴンを信じるのだな」

クラピカがぼつりと呟いた。

「ん？ ああ、方向か？ まあな」

間違つてねーし。

俺の答えに、クラピカは口元を緩ませた。

「 gon は不思議だ。無鉄砲で考え無しに行動するくせ、信頼できる私はここに来るまで、ずいぶんと彼に助けられた。だから gon にはぜひハンターになつてもらいたいし、彼はその資質があると思う」ハンターつてのがどんなもんかよくわからねーけど、 gon がなりたいて思つてゐるならなれるだろ。 gon はそういう奴だ。「 gon はハンターにんだろ。例え今回駄目でもいつか必ず実現する。で、クラピカはハンターに向いてねーのか？」

クラピカの言い方じゃ、ハンター試験受けてるくせに、自分はハンターの資質つてのがないみたいだった。

「私は純粹にハンターになりたいわけではない。私は、私の部族であるクルタ族を滅ぼした蜘蛛に復讐したい。その手段としてハンターになりたいのだ」

「蜘蛛つてのはでけーのか？」

魔界でよく見かける小山程ある妖怪、土蜘蛛を思い浮かべた。よく骸あたりのタクシーがわりに使われてるアレだ。俺の言葉にクラ

ピカは憎々しい顔で首を横に振った

「蜘蛛とは虫ではなく、幻影旅団という盗賊のことだ。クルタ族は気が高ぶると目の色が赤く染まる。それは緋の目と呼ばれ、世界七大美色の一つとされている。奴らはある日、クルタ族を襲い、目を持ち去った。私だけが偶然にも生き残った。今でも仲間達の目を盗られた無惨な姿が目に焼き付いている。彼らに目を返してやりたいのだ」

話すクラピカの目は、元々の薄茶色濃くなっていた。どうやらコンタクトレンズで赤くなる目をごまかしているようだ。

「ひでーことする奴らがいるんだな。よし、俺も手伝うぜ」

目を見開いて俺を見た。その目はもう、もとの薄茶に戻っている。「いや、私的な復讐に誰かを付き合わせるつもりはない」

「つつてもよ、旅団っていうなら何人もいるんだろ。しかもその人数で一部族を滅ぼしちまうくらいだ。一人より二人の方がいいだろうが」

「だが」

「俺がやるつつたら勝手にやるんだよ。おめーはおめーで勝手に旅団見つけて好きに復讐しろよ。俺はそれに勝手についてくぜ」

ボカンとしてクラピカは視線を前に戻した。その顔は笑っている。「ねえクラピカ。手伝ってもらいなよ。ユースケは強いし、クラピカのために一緒にいた方がいいよ」

においを辿りながら、ゴンと話も聞いていたらしい。

「わかった。私は勝手に蜘蛛を探し復讐をする。ユースケも勝手に動いたらいい。私が何を言っても君たちは考えを変えないだろうからな」

嘆息しつつ言われた。ニシシ、と同じ笑いをする俺とゴン。確かにゴンはとこか俺と似てつかもな。

「もうすぐ着くよ！　においが近くなってきた」

サトツさんの靈気が間近に迫っていた。

二次試験

二次試験会場では、キルアが出迎えてくれた。俺達が来た手段を聞き、不機嫌そうだった顔が一変、大爆笑。犬かお前！ と叫んだ。木陰に転がしたレオリオは、しばらくして目覚めた。何も覚えてなかった。幸せな奴だ、とクラピカが呆れてたっけ。

キルアの話によると、二次試験がこれから始まるのだが、それまで目の前の建物の前で待機らしい。建物からは妙な轟音がしている。周囲は獣だなんだと騒いでいるが、俺はその音に聞き覚えがあった。

「腹の音だろ、これ」

魔族の方の親父が国中に響かせていた空腹の音によく似てる。

「こんな音腹から出るかよ。バツカじゃん」

キルアはそう馬鹿にしたが、事実、ブハラってやつは腹の音だった。俺は無言でキルアの頭に肘を置いてやった。キルアの舌打ちだけが聞こえた。

二次試験の試験官は、ブハラっつー妖怪並に巨体の男と、メンチっつー露出多めの姉ちゃんだった。二人は美食ハンターだと名乗る。へえ。そんなハンターもいんのか。

「二次試験はボクの出した課題に合格した人だけ」

「次のあたしの試験を受けることができるわ。あたしの試験に合格した人が二次試験合格よ！ 二次試験の課題は料理！」

受験生たちが一様に不安な顔になる。美食ハンターを満足させられる料理なんて作れる奴は、ハンターじゃなくシェフになった方がいいと思うぜ。

ブハラの出した課題は豚の丸焼き。

皆一斉に森に向かって走り出した。

ゴンたちも散り散りになって豚を捕まえているようだから、俺も適当に一匹捕まえることにした。見ているとどの豚もやたらと動き

が遅い。これならゴンたちも簡単に捕まえるだろ。

豚をデコピンで仕留め、妖気を高温にして焼き上げた。若干黒いが、ま、いいべ。ひょいと持ち上げてブハラのところ運んだ。

試験会場にはまだ誰も来ていなかった。

「1番がまた1番乗りね」

ブハラの前に豚の丸焼きを置くと、ブハラはペロツと豚を食べ、ペツと骨のみ吐き出した。すげ！マジで人間かよこいつ！

「んー、おいし！なんか味が違うのは火のせいかな。どんな火を使ったの？」

「それにどこにも致命傷が見られなかったわ。どうやって仕留めたのかしら」

こうやって、とデコピンを示したら、無言で目を剥かれた。火はどう説明すつか、と思っていたら豚の丸焼きを担いだ受験生がぞろぞろ会場に戻ってきたので、話途中でその場を離れた。ちよつと1番！とメンチから呼ばれたが面倒くせーから会場から出ておいた。豚の丸焼きはゴンたちも問題なく合格した。

その合格基準にメンチは文句があったらしい。

「ブハラと違ってあたしは厳しいわよ！次の課題はスシよ！そうそう、スシはスシでも、ニギリズシしか認めないわよ！」

メンチはそう言った。会場にセットされた道具からして、どうやら握り寿司に間違いなさそうだ。受験生の反応からすると、どうやら寿司の存在を知らないらしいとわかった。が。

「質問していいか？」

「何、1番」

「俺は寿司を知ってたんだが、あれは職人が10年修業してようやく店に出すモンのはずだ。素人が作った寿司でも、あんたは合格させてくれんのか？」

俺が質問した途端、メンチが答える前に別のところからツルツパゲが声を上げた。

「俺だって知ってるぜ！魚の身を一口大の長方形に切り、一口大

に握った酢飯に乗せたもんだろ！……あ」

しまった、とばかりにツルツパゲが固まる。へえそういう料理なんだ、と頷いている受験生たち。

「あ、じゃねーわクソツパゲ！ 試験内容バラしてんじゃねーよ！」
包丁をまな板に突き刺してメンチが激怒する。

「こうなったら味で審査するしかないじゃない！ 早く作って持てきな！ あたしがお腹いっぱいになったら試験終了だからね！」

メンチの迫力に、一斉に外へ駆け出す受験生たち。いや、だから味であんたが満足できる寿司を作る奴は、ハンターじゃなくて店を開いた方がいいだろうが。

腕組みをして立って見ていたら怒鳴られた。

「1番、あんたも早く行てきなさい！」

「おう！」 外に駆け出した。ねーちゃん、たいした迫力だ。 鮭みたいな魚を熊みたいに捕り、会場に持って帰る。会場にはまたしてもまだ誰も帰ってきていなかった。調理台が並ぶ会場の、遠くのソファーが置かれた試食場からメンチが声をかけてくる。

「1番、あんた最後に出てって一番最初ってどんだけよ」

知るか。

魚を捌きに入るも、硬すぎて包丁が入らない。なんだこの魚。包丁がいけねーのか。仕方ねー。

手刀の形を作り、刃の位置に妖気を集め、魚の頭を落とした。同様に腹を割り、内臓を取り出す。三枚に卸したところでメンチが来た。

「1番ッ！！ あんたそれ！ 念魚のケイサじゃない！？ どうやって捕った、っていうか、どうやって捌いたの！？」

両肩を捕まれ、首を絞める勢いで問い詰められた。やめい。

「鮭だかケイサだか知らねーが、フツーに捕ってフツーに捌いた」「んなわけあつかーッ！！ いい？ 念魚ってのは念を纏う数少ない魚の一種で、熟練の魔獣ハンターが三日三晩かけてようやく捕れるような川魚最速にして最強の魚なのよ！ 死んでもなお念で防御

していて、普通の包丁なんかじゃ捌けないの！　ここにあるような包丁じゃ無理なのよ！！　さあどうやったの？　きりきり答えない！！」

顔面に包丁を突き付けられた。恐ろしいねーちゃんだな。

「だからよ、フツーに捕れたし、手に力込めてフツーにぶち切った。フーかよ、ネンってなんだ？」

メンチがピタリと動きを止めた。目を合わせ、数回瞬きを繰り返す。

「あんた、念を知らないの？」

「だからネンってなんだよ」

俺の応えに、メンチの目が据わった。そして一言。「忘れなさい」

「あ？」

「あたしが今言った単語を忘れなさい。今すぐ！」

「無茶言っつなよ！」

「無茶じゃない！　忘れなさい！　忘れろ！」

首に包丁を突き付けられ、脅された。なんでこいつはすぐ包丁を使うんだ。

「わあっつたよ！　忘れた！」

「よし！　じゃ、あたしは行くわ！」

明らかに逃げた。あいつ、マジ調子いいな。

気を取り直し、寿司作りを続けることにした。

この鮭もどき、表面はめちやくちゃ硬かったが、赤身は普通の魚だった。包丁を使って身を切り分け、酢飯にワサビを挟んで握った。味見に醤油をつけて食べてみると、ヤベーくらい美味かった。こんな魚、あったのか！

握っては食べ、握っては食べていたら、メンチに怒られた。

「ちよつと1番！　早くあたしに食わせなさいよ！！　早く！！」

仕方ないから小皿に2貫乗せて持つて行く。

「信じられない！　あの幻の超高級魚がこんなところで食べられるなんて！　ああん、ケイサちゃん！」

箸で掴み、醤油につけて一口。メンチが悶えた。

「ああ、この口の中でとろける脂ののった食感、酢飯と醤油とケイサの絶妙なシンフォニーに、ワサビのセンサーシヨナルなアクセント！ 最高だわ！」

「じゃ合格か？」

「ん、シャリの握りが甘い。やり直し」

褒めちぎっておきながら、ぴしゃりと落とされた。てめえ、それはただケイサの握り寿司が食いたいただけじゃねえか？

調理台に戻ると、俺のところに人だかりができていた。何かあったのか。

「あつ、ユースケ！」

中にいたゴンが手を挙げた。手を軽く挙げて応じる。

「なんかあったのか？」

「なんかじゃねーよ！ ケイサだよ！ お前、これどうやって捕ったんだ？ 1匹で数億ジェニーの超高級魚だぜ！？」

「ぬぁにい！？ これ1匹でエ！？」

キルアが詰め寄り、レオリオが悲鳴を上げる。つか、ジェニーってなんだ。金の単位っぽいけど、聞いたこともねー。世界にはいろんな金の単位があるってことか。一人で納得していたら、俺の調理台を囲む受験生たちの中にいたクラピカが、さっき作って置いていた寿司をじつと見つめて言った。

「寿司とはこのようなものなのか」

「ねえ、ユースケ。一個食べたいな！」

冷静に寿司を分析するクラピカに、おねだり上手のゴン。性格が出るよな。

「おう、いいぜ。ちょっと待ってる」

「やったあ！」

「オレも食いたい！」

「オレにも食わせてくれ！」

「私も一つもらいたい」

幻らしい高級魚であること、寿司がどんなものかわかるということ、周囲からは俺も俺もと手が上がる。

「ちよつと待ちなあんたたち！！ そのケイサはあたしのモノよッ！！」

メンチまでもが参戦し、試験は大混乱に突入していく。欲しいという奴に俺は寿司を握り続け、結果。

「ああ、大満足！！ お腹いっぱい！！ つーわけで、試験終了！！」

合格者ゼロのまま、試験終了。

「ふざけんなッ！！」

受験生から上がったその不服はごもつともだ。

「だいたいお前、俺たちがいくらスシを持って行ってもケイサばかり食いやがって見向きもしなかったくせに、そんなの納得できるか！！」

「つたりまえでしょッ！ あんな毒ありの魚誰が食うか！ ていうか、ケイサの味を変な魚の味に消されたくないのよね！！ 恨むなら美味しい魚を捕ってこれない自分の力のなさを恨みなさい！！」

無茶苦茶だ。俺にしても、散々作らされたが、結局合格はもらえなかった。最後に「おいしい！」の評価は貰ったが。クイズかよ。試験官がそれでいいのか。

「二次試験は合格者ゼロ。運がなかったわねー。また来年頑張つて」
「ふざけやがって！ 俺はブラックリストハンターを目指してんだ！ 美食ハンターごときに合否を決められたくはねえ！」

筋骨隆々とした男がキレてメンチを罵倒した。途端、メンチの後ろに控えていたブラハに平手で弾き飛ばされる。スゲー威力。

「余計なことしないでよ、ブラハ」

「メンチがやったら殺しちゃうだろ」

「ふん。美食ハンターごときにやられてブラックリストハンターなんてちゃんちゃらおかしいわ！ ハンターやってれば賞金首と戦うことくらいあるわ。ブラックリストハンターだ、美食ハンターだっ

て区別するなんてくだらない。あたしが見たかったのは、未知のものに挑戦しようっていう気概……だった、の、よ？」メンチの声がだんだん小さくなり最後は疑問形。当初の目的を思い出したらしい。あのツルツパゲに寿司の作り方をバラされ、ケイサに舌鼓を打っている間に目的はあつさり彼方へ。受験生のジト目がメンチに注がれる。

「ほっほっほっ、困っているようじゃのオ、メンチくん」

空から声とともに、老人が降ってきた。頭上の空には飛行船が浮いている。あそこから飛び降りたのか。

砂煙があがる中、見事な着地を決めたその老人を見て、メンチがバツが悪そうに「会長」と呟いた。

老人はハンター協会の総括でネテロ会長というらしい。メンチとネテロ会長の話し合いにより、メンチの実演による再試験が行われることとなった。

再試験はネテロ会長が乗ってきた飛行船でマフタツ山に移動し、断崖絶壁の谷で行われた。

再試験の内容は、クモワシの卵でゆで卵を作ること。

谷の端にメンチが靴を脱いで立つ。そのまま谷底に跳んだ。谷間にはクモワシが糸で巣を作っていて、糸を伝い、卵を一つ取ると、崖をはい上がり、メンチは帰ってきた。

「糸に引つ掛からずに谷底まで落ちてても、川が流れてるから死にはしないわ。ただし、流れが速過ぎるから数キロ先までノンストップで流されるけどね。勇気がある奴だけいきなさい」

あまりの高さに怖じけづく者も少なくなかったが、ゴンたちは「こういうのを待ってたんだよね！」と嬉々として次々に谷に跳んだ。それを見ていたら、「1番、あんたは？」と聞かれ、まだ跳んでなかったと気付いた。

すぐに谷に跳んだ。クモワシの卵の側にピンポイントで着地し、卵を取り、糸が戻る反動で上まで帰る。ほれ、と卵をさっきと同じ場所にいたメンチに見せる。

「取ってきたぞ」

「あんたいつの間に……」

「あ？ 今行ってきたじゃねーか」

俺をまじまじと見つめ、溜め息をついた。

「あんたがいろいろ規格外だったのはよぉーっくわかったわ」

まあ人間じゃねーからな。

続々と戻ってきた受験生たちと一緒に、大鍋の中に卵を入れて茹でる。出来上がったクモワシのゆで卵は、鶏卵なんて目じゃないくらい美味かった。これで卵かけご飯が食べてーな。

発覚

三次試験会場までは飛行船で移動するらしい。

翌朝まで休んでいていいらしいので、俺はクラピカやレオリオと一緒に床に座った。ゴンとキルアは飛行船探検に行った。ガキらしくていいねえ。

「しかし、ハンターなんて仕事人間界にはあったんだな。知らなかったぜ」

「ごろんと床に寝転がって言うと、レオリオが素っ頓狂な声を出した。」

「はああ!？ お前、ハンター試験受けといて何言ってやがんだよ」
「るせえ。気付いたらあそこにおいて、なんかおもしろそうだから受けてみることにしたんだよ。ハンターを知ったのはついさっきだ」

レオリオとクラピカが妙な生き物を見る目で俺を見やがる。はあ、とため息をつき、レオリオが呆れたように言った。

「ハンター知らねえって、お前ただけ田舎に住んでんだよ」

「るっせえ、2号」

「愛人みたく呼ぶな!」

「だがユースケ、ハンターは有名な仕事なのだ。それこそ知らない者は辺境の者くらいだろう。出身はどこなのだ?」

「出身? 日本だよ。ジャパン。先進国だぜ」

「ジャポン?」

「なんだか発音ちげえけど、そういう風に呼ばれることもあったよな。このときはそれほど気にしなかった。違和感は少し感じた。」

「おかしいな。ジャポンならハンターくらい知っているはずだが。そういえば、あの294番のハンゾーという男もジャポン出身だと聞いたな」

「294番つーと、ああ、あのツルツパゲか」

俺の言葉に、レオリオが何かを思い出したように言う。

「なあ。お前らの国ってよ、ハゲかスーパーロン毛しかいねえのか？」

ひでえ偏見だ。

「んなわけねーだろ。お前らと似たようなもんだよ。そうだ、クラピカかレオリオか、俺の髪切ってくんねーか？」

体を起こして頼むと、二人は目を丸くした。

「でもお前、そんだけ長く伸ばすのは大変だっただろ。切っちゃうのか？」

「これがよー、伸ばそうと思えば一瞬で伸びんだわ。短くすんには切らなきゃならねーんだけどな。幼なじみとか仲間に毎回切つてもらうんだが、今近くにいなーし。なあ頼むよ」

はあ、と感嘆するレオリオ。

「ジャポン人はスゲーな。一瞬で髪が伸びんのか。つーとあのハンゾーもスーパーロン毛になんのか」

ちげーし！

「あのなあ、俺とハンゾーだけでジャポン人の全てだと思うのはやめれ。俺もハンゾーもジャポンじゃ特殊だ。特に俺は人間じゃねーしな」

「人間じゃねーって、じゃあてめえはなんなんだよ」

「魔族」

「はいはいはい。じゃあオレが切つてやるよ。こう見えて手先は器用だぜ」

レオリオめ、本当なのにあっさり流しやがった。

「そうか。レオリオは医者を目指しているのだったな。外科医か？」

「いや、小児科医だ。だが、できるだけ全部やりてえんだ」

「そうか」

クラピカの目が細まる。レオリオの夢は確かに応援したくなるよな。

レオリオは持っていたカバンの中からハサミを取りだし、俺の髪をザクザク切る。いつも通りの短さを指示すると、レオリオは自己

申告通り器用に仕上げてくれた。

「おー、軽い軽い。レオリオ、ワックス貸してくれよ」

リーゼントにすべく、振り返ってワックスを要求すると、レオリオはまじまじと俺を見て声を上げた。

「おめーマジでオレと同じ年かよ。髪切ったら余計に童顔じゃねーの」

「確かに19歳には見えないな。私より幼く見えるくらいだ」

「るっせえよ。ほれ、ワックスよこせ」

前髪があると余計幼く見えるのは自覚済みだ。レオリオからワックスを奪い、前髪を後ろに撫で付け、久しぶりのリーゼントになる。「やつぱこうじゃねえと落ち着かねーな。後は服か。どっかにTシャツ落ちてねーかな」

「そんな物乞いみたいな真似はやめてくれ。私のを貸してやるから」
きよるきよる辺りを見ていたら咎められた。クラピカに白い長袖のシャツを借り、久々に文明人に戻れた。しかしクラピカめ、華奢に見えて意外にしっかりした骨格だったんだな。借りたシャツはゆるいくらいで、成長しにくい自分の体が悔しいぜ。

「しかし、ここはどこなんだ？ 俺ア確か魔界にいたはずなんだけどなあ」

「また魔族ネタかよ。好きだねえ。ザバン市から相当走ったからどの辺りだ？」

「ヨルビアン大陸の南端あたりだな」

よるびあんたいりく？

知らん名前が出た。眉間に皺が寄る。

「ちよつと待て。ユーラシア大陸とかアメリカ大陸とかだろ。ヨルビアン大陸ってなんだよ」

「ユースケこそ何なのだ、そのユーラシア大陸やアメリカ大陸というのは」

頭が白くなった。

「いやいやいや、俺ら今日本語で話してるよな？」

「日本語？　なんだよそれ。オレらが使ってるのは共用語のハンター語だぜ」

それはなんだ。つまり。

どうやら俺は、違う世界にいるらしい。そう気付いた飛行船の夜。

「……俺、もう寝るわ」

「はあ！？　てめ、この不気味なまでに散らばった髪の毛の片付けくらいしやがれ！　てめえのдар！」

「るっせえ。俺は今傷心中なんだよ。それくらいお前がやっつけ」

「意味わかんねえよ！　おいこら、寝るな！　このワガママ野郎！」
「聞こえねー」

「レオリオ、休ませてやろう。私も手伝おう」

「あーもう！　仕方ねー奴だな！」

そう言っただけで俺を休ませ、片付けてくれる二人は優しい。わけがわかんねーけど、出会ったのがこいつらで良かった。

電波系

三次試験は高く四角い建物の屋上に下ろされた。屋根はなく、青空が広がっている。受験生たちは訳がわからずざわめいた。そこに放送が入る。

『私は三次試験の試験官、リッポー。72時間以内に下まで下りてこられたら合格だ。健闘を祈る』

ブツ、と放送が切れた。下までとは言うが、そこは何もない平らな場所で、階段なんてない。戸惑う声が聞こえるが、俺は魔族の感知能力で、この面の下にはいくつも道があるのがわかった。

さっき妖鳥に食われた奴みたく壁を伝ってもいいし、下までワンプンで床を貫いてもいいんだが、ちつと気になることがある。

「ユースケ！ 下に回転床があるみたいだってクラピカが」

ゴンが小声で声をかけてきた。少しずつ減っている人数にクラピカがそう分析したらしい。

「それでね、あそこに固まって5ヶ所入口があるみたいなんだ。ユースケも一緒に行こうよ」

ゴンが指差したところには、レオリオ、クラピカ、キルアがこちらを見て待っていた。一緒に行くわけにはいけないんだよね。

「わりいな。俺も今見つけたところでよ、今回はこれで行ってみようと思う」

「そつかあ。じゃあゴールで会おうね！」

「おう。じゃあな」

ゴンに見送られ、床の回転部の端に立ち、中に落ちた。音もなく着地すると、そこには頭に針を刺し、カタカタと音を出している長身の男がいた。不気味でグロいなあおい。

だが、こいつに用があったのだ。

「よお。おめーよ、キルアの身内だろ？ その頭はキルアにバレねーための変装ってところか」

告げると、男が頭に刺さる針を次々に抜いた。顔が変形する。小さな嘆息の後、黒い長髪の猫目をした美形がいた。

「イルミ・ゾルディック。キルアの兄だよ。なんでわかったの？」
無表情で聞いてきた。

「俺が魔族だから」

「そういう設定なんだ。残念な頭だね」
信じねーし。一言多いし。さすがキルアの兄だ。

最初は、キルアにちよくちよく視線を送ってる変な男がいるな、と思った。なんだよまた変態かよ、とよく見れば、霊気の波長がキルアとイルミで似ていたのだ。似てない双子の飛影と雪菜だって波長は似ている。波長の類似は身内を見分けるのにかなり有効だろう。で、おめーは何しにハンター試験を受けに来たんだ？」

イルミは首を傾げ、何かを考えていた。そんな悩むような理由なのかよ。

イルミは拳を手の平にポンとぶつけた。

「あ、君、ヒソカのお気に入りの1番か。毛玉みたいだったのにイメチェン？」

マイペースだな！

「好きであんなカツコしてたんじゃねーよ！」

「ふーん。かわいかったのに。珍獣みたいで」

「うれしくねーよこのヤロウ！」

「1番は名前何て言うの？」

会話が成り立たねー！ 何だこいつ。氣イ抜けんな。わざと話逸らしてやがんのか？

だが、すぐにそうじゃないとわかる。

「幽助だよ。幽助・浦飯。19歳」

「ユースケ。変な名前。次の仕事でハンターライセンスが必要だから。キルがいたのは偶然。でもキル家出したから、連れ戻して来いって。あれ。19歳？ キルと同じくらいだと思った」

俺の名前を馬鹿にしたかと思えば、ハンター試験を受けた理由を

説明し、脈絡もなく俺の見た目に言及する。何だこの不思議ちゃん。かつ飛ばし専門のキャッチボールは続く。

「じゃあ行こうか」

「いやいやいや、どこからじゃあつて出てくんだ」

「鎖つけるよ」

「あああ？ てめ、説明しろよ」

「オレは左側がいいな。ユースケは右側でいいよね」

「ちよつと待て！ 俺ア右利きだぜ！」

「オレも右利きだよ。気が合うね」

「合つてねーだろ！」

ひどい疲労を感じた。

もうどうにでもしてくれつてな気分でしたら、俺の右手とイルミの左手が手錠で繋がっていた。

俺たちがいた小部屋の扉には、俺には読めない字で何かが書かれていた。「何て書いてあんだ？」とイルミに聞いておいたから、その内気付いたら教えてくれるだろう。かつ飛ばし専門相手のキャッチャーに大分慣れてきたぞ。

イルミが扉を開け、小部屋から出る。そこには長い廊下があった。しかも至るところに罾がしこたま仕掛けられている。とりあえず、片っ端から作動させてみた。

コンクリートの床の一部を踏んでみたら矢が降ってきた。俺に当たるまでに、背の高いイルミが全部針で打ち落とした。

膝の高さで壁から壁に張られていた糸を足で切ってみたら、両脇から槍が出てきた。イルミは針で、俺は手刀で落とした。

明らかに落とし穴な床に乗ってみた。落ちたら剣山の上で、そこに刺さることなく二人で立ち、跳んで出た。

ベタすぎてマジ笑えるよ。金だらいとか。

「ねえユースケ。どうしてわざと一つ残らず罾にかかるの？ 趣味なの？」

「ちげーし。何もない道をヤロウ二人で手エつないでただ歩くとか

冗談じゃねーよ。そんならいならトラップにかかった方がおもしろ
ーじゃねーか」

「ふーん。オレもユースケと二人でいるのはおもしろいよ」

待て。ボク「も」って一体誰と同じつもりでいるんだこの不思議
ちゃん。こんな不思議ちゃんに不思議を追求したところで謎は深
まるばかりに決まってる。ここは流すのが一番だ。

だが、かつ飛ばし専門相手のキャッチボールにおいて、流すのも
危険だと知る。

「ユースケとオレって相性いいね」

「あ？ そうか？」

「うん。じゃあハンター試験終わったらうちだね」

「……あ？」

「父さんに紹介するよ。オレの生涯のパートナーだつて」

「しょうがいのばあとなあだあ！？ ……おいこら待て！」

呼び止めると、ちゃんと応えが返ってきた。見事に自分本意な答
えが。

「守らなくていいし、邪魔じゃないし、気が合うし。何より、ユ
ースケはオレと近いにおいがする。そろそろパートナーを決めるよう
言われていたんだけど、君以上に相応しい人はこの先見つけれな
さそうだ」

イルミと近いにおい？

ありえん。宇宙人と似たところなんか認めねー。それが人間じゃ
ないという項目なら認めないこともないが微妙だ。

パートナーよばわりの理由はわかったが、だからといって了承で
きるものじゃない。というか、なぜこいつは断られるという考えが
ないんだ。おめーみたいな宇宙人とパートナーなんざ断固拒否だね。
そう言っただけでやろうと思ったら、イルミが思い出したかのように振り

向いた。

「あ、そうだ。この道なんだけど、二人で協力して、手錠で繋がったままお互い死なずにゴールしたら合格だってさ。オレたちなら楽勝だよな」

ここでこの道の説明きたか！！ しかもここまで来れば、なんとなくそういう流れなんだろうなってわかってたっつーの！

「……なんつーイキモノだ」

言いたいことを半分も言わせてくれねーなんて。

俺が疲れたように呟くと、それを見たイルミが無表情で言った。

「ユースケって変わってるよね」

てめえにだきやあ言われたかねーよ。

引きずられるように、俺はイルミとその道を進んだ。

三次試験（前書き）

8月20日改稿

三次試験

すべての罫にかかり、罫を制覇し、進んでいく。イルミとの会話は、相変わらず宇宙との交信状態だ。奴の思考と俺の思考はどう考えても光年単位で掛け離れている。

あまりにも意思の疎通ができないのが、だんだんおもしろくなってきた。時間差の応答や、盲点からの反応は、慣れれば案外打ち返すのも楽しいもんだ。ただ、生涯のパートナー扱いだけは勘弁してほしいが。

進んでいたら、扉があつた。中から複数の人間の霊気を感じる。50くらいいるな。

利き腕が空いているイルミが扉開け係だ。無言でイルミが扉を押し開けると、中には人間にしちゃ凶悪なツラをしたヤロウどもが、円形の闘技場の反対側にいた。俺たちが中に入ると、扉が閉まり、鍵のかかる音がした。放送が入る。屋上での声と同じだから、えーと、ナッポーだったかの声だろう。

『三次試験官のリッポーだ』

違つてた。言わなくてよかった。

『今から君たちにはその囚人たちと戦ってもらふ。ただし、この部屋に入ってから時間と手錠を外していた時間の合計のじかを、奥の部屋で過ごしてもらふ。二人で同時に戦うなら、時間は二乗となる。一対一でも、一対複数でも構わないが、勝敗は、どちらかが死ぬか、まいったというまでだ。さあ、決めたまえ』

そういうルールか。よかった、口頭で。貼り紙式だったらまたしても時間差の説明を受けるはめになるところだった。

「ユースケ、どっちがやる？」

「俺が行く」

「手錠は？」

「外す」

手錠を外す鍵は、壁に掛かっていた。俺の側だけ手錠を外し、円形闘技場の上に上がる。

「試合形式は？」

反対側から、スキンヘッドの頭が傷だらけの男が聞いてきた。

「めんどくせーから全員上がれよ。俺は人差し指1本でやる。これ以外の指を使ったら、俺の負けでいいぜ」

反対側が笑い声が上がった。

「俺達全員相手に指1本だつてよ！」

「俺達をしらねーんじゃねえのか？」

「俺達アみんな前科100犯以上の凶悪殺人犯として、超長期の刑期持ちなんだぜ」

「ガキと優男か。切り刻みてエなあ」

男の癖にぎゃあぎゃあうるせー奴らだぜ。俺は無言で円形闘技場の上に立った。

「やるなら早くこいや。ちっとくらい楽しませろよな」

腕を組み、仁王立ちで言うと、頭に血管を浮き上がらせて囚人たちが上がって来る。ぐるりと俺の回りを取り囲み、ナイフやサック、縄や鉤爪など思い思いに武器を持っている。

「簡単にや殺さねえぜ」

「まいったとも言わせねえ」

「ここでお前らが費やした時間分だけ、俺達は刑期が短くなんだ」

ニヤリと笑い、囚人たちは一斉に俺へと武器を振り下ろした。

ゴキン

ナイフが折れ、サックをしていた指が碎け、縄はちぎれ、鉤爪は先が欠けた。

「なッ!？」

驚愕と恐怖が混じる声が囚人たちから上がった。

「お前ら、やるなら本気でやれよ。痛くも痒くもねーじゃんか」

その後、囚人たちは必死で、寄ってたかって俺に攻撃を加えるのだが、どれもこれも羽毛タッチかよってくらいダメージがない。つまんねー。

「もういいや。おめーらみんな倒れとけ」

囚人たちの間を駆け抜ける。人差し指の一突きで円形闘技場にいる囚人たちは全滅した。殺してねーよ。床に転がっちゃいるが、ちゃんとピクピクしてるし。

「……なんだ、今の」

「み、見え、ねえ」

「バ、バケモンだ」

バケモンじゃねえ。俺あ魔族だ。

「で、お前ら降参すつか？」

即座に降参する奴はいなかった。

「へ、へへ、粘れば粘るだけ刑期は短くなんだ」

「ギリギリまで、誰が降参なんて言うか」

「お前は一度で俺達を殺さなかった。殺しに抵抗があんだろ」

「殺されねえなら打たれ強さには自信あるぜ」

そんなわけで、囚人たちははいつくばっているくせに、ニヤニヤしながら誰も降参しねえ。へえ。

「まあ確かに簡単に人殺しするのは好かねえが、暴力をためらうタチでもねえんでな。次は人差し指1本で背骨を折る。長ーあい刑期を全身不随で過ごしたい奴は降参しなくていいぜ。降参するやつ、手え挙げな。はい、5、4、3、2、1」

ゼロ、とカウントしたときには、全員の手が拳がっていた。
「おい、試験官！ 俺の勝ちだろ？」

スピーカーに向かって叫ぶと、返事はすぐに来た。

『視認した。再び手錠で繋ぎ、隣の部屋で11分23秒過ごせ。時間になったら次の扉が開く』

「了解」

円形闘技場を下りると、すぐにイルミと手錠で繋がる。悠々歩いて円形闘技場の部屋を出た。

そこは、何もない部屋だった。二人で壁に寄り掛かり座る。手錠のせいでくっついて座らなくちゃいけないーのが暑苦しい。

「ねえ、ユースケ。なんですぐに殺さなかったの。そうしたら一瞬で終わったのに。人を殺せないの？」

イルミが不思議そうに聞いてきた。

「人なんか殺さねえ方がいいだろうが。ま、今回はそんな理由じゃねーよ。考えてみるよ。一瞬であの人数を殺したとする。で、本当に死んでるのかどうかたぶん試験官が確認するだろ。死亡確認でどんだけ時間かかると思っよ。それなら、降参が一目瞭然でわかる拳手が一番だろ」

明らかに死体とわかる場合も死亡確認をされそうだし、死体が残らないのも死亡と認めてもらえないことも考えられる。だからこれが一番だ。

イルミの感情のない大きな猫目が、さらに大きくなる。

「ユースケってずる賢いね」

まあこんくねえは頭つかわねーと、魔界の頂点は狙えねーしな。ここまではよかった。イルミが衝撃的なことを呟いた。

「さすがオレの嫁」

「よッ！？ おいこらちよつと待て！」

今、嫌なレベルアップしたぞ！？

「ユースケなら父さんたちも喜ぶよ。ゾルディックの嫁に相應しいって」

「男な上に、殺人肯定派な嫁連れて来られて嬉しい親ってどんなだよ！？」

「暗殺一家だけど。男とか気にしないよ。家継ぐのキルだし」

さっき言っていたイルミと近いにおいつてのは、もしか闇の存在とかそんなとこのことだったのか。それなら納得だ。俺の方が闇の気配は濃厚だろうが。

それにしても何だろう。会話はこれまでにないくらいスムーズにキャッチボールできているのに、内容に違和感バリバリだ。投げてた物が、ボールじゃなくてトマトだった、みたいな。

とりあえずこれだけは言わねーと。

「誰が嫁になんかなるかよ」

「じゃあオレが嫁でいいよ」

それで問題ないだろ、と言わんばかりの態度。ブチっとキレた。問題ありまくりだ！

「おめーの嫁にも婿にもなんねーよ！ だいたい俺アな、異世界から来たんだ。だからそのうち異世界に帰るんだよ」

「分かってるよ。ユースケが痛い人でも、宇宙人でも、オレはユースケを生涯の相手にするって誓うよ」

「変なもん誓うなッ！」

宇宙人に宇宙人扱いされるっつーのは地味に屈辱的だなあオイ。

噛み合わないトマトキャッチボールを続けていたら、小部屋の出口の扉が開いた。スピーカーから呆れたような声が聞こえる。

『お前ら、痴話喧嘩は帰ってからやれ。その扉の向こうがゴールだ』

「じゃ、行こうか」

マイペースな宇宙人は、激しい疲労を覚える俺を引きずって歩きだした。

「ユースケ疲れてるの？ あんまり体力ないの？」

不思議そうに聞くな。お前のせいだよ！

十八番

『1番ユースケ、301番ギタラクル、三次試験通過第二号、第三号！ 所要時間、3時間21分！』

ゴールの部屋に来たら、スピーカーから合格を告げられた。俺とイルミはヒソカに次ぐ二番目のゴールだった。

それにしてもマジかよ。たった3時間しかイルミといなかったのに、なんだこの疲労感と脱力感は。

「ユースケ、オレ、この試験中はギタラクルだから。イルミって呼ばないでくれる。本当はパートナーなんだからいくらでも呼んでほしいけど」

「はははは。ぜってー呼ばねーから安心しろよ。301番って呼んでやる」

「でもまだヒソカしかないから、今のうちにたくさんオレの名前を呼んでおきなよ」

さあ、と迫られても、誰が呼ぶかよ。そこに声が掛けられる。

「あれ。二人とも随分仲良くなったんだね。イルミが変装解いてるし」

ど真ん中に陣取り、トランプタワーを作っていたヒソカだ。何段タワーかわかんねくらい高くタワーを器用に作っただと思えば、それを一瞬で崩す。その際のキモい笑顔。さすが変態。

話し掛けられたイルミは、またしても宇宙発言をかました。

「ユースケにはばれたから。で、オレの嫁になった」

生涯一緒のパートナーっていったら嫁だよね。

なんつー論理だ。

「なつてねーよ！　なあヒソカ、おめーコイツの仲間なんだろ。イルミと意思の疎通、うまくできっか？」

「イルミはそこがいいんじゃないか」

できねーらしい。やだよ俺、トマトキャッチボールの仲間とかいらねーよ。

「ユースケ、髪を切ったんだね。短いのも似合ってるけど、ボクに切らせてくれればよかったのに。ボク、器用だよ」

「ぜってーヤダ」

コイツに背を向けるのも嫌だし、切られた髪をストーカー的活用しそつでぜってーヤダ。

「嫁の髪を切るのは旦那の仕事だよ」

そこにイルミが入ってくる。そんな決まりがどこにある云々より、おめーはその考えから離れろや。

あーそうかい、と壁に寄り掛かりながら座って宇宙人の言葉を流している、ヒソカがこちらに寄ってきて俺の前にあぐらをかく。ヒソカが首を傾げて聞いてきた。

「ユースケはイルミの嫁になっちゃうの？　ゾルディックって有名な暗殺一家だし、間違いなく玉の輿だけど、イルミ的な旦那だろ？　人生踏み外しちゃった感じじゃない？」

イルミ的な旦那！　思わず噴いた。それを見て、表情はあまり変わらないながら、わずかにムツとしてイルミが文句を言う。

「ヒソカ、もしかしてオレのこと馬鹿にしてる？　ゴンを見て勃起させてる変態に人生語られたくないんだけど」

「やだなあイルミ。ボクはちゃんとユースケ相手にも勃起してたよ。そのとこ、ちゃんと見てくれないと」

「オレの嫁にその薄汚いピー反応させたっていうの？　そんなピーは針でピーするよ」

「イルミったら過激だね。滾っちゃうじゃないか、ボクのピーが」

「ヒソカって本当に変態だよ。去勢しなよ」

クククと笑うヒソカに、瞬きせずに無表情でヒソカを見据えるイルミ。壁際に隣り合って座り、自主規制だらけの言い争いをする変態と宇宙人、その脇になぜか俺。なんで俺、ここにいなきゃいけないだろう。

こっそり立ち上がり離脱しようとしたら当然気付かれた。

「嫁、どこに行くの？」

その呼称はもはや返事をする気にもならんわ。

「ヒマならボクとトランプしようよ」

ヒソカがトランプをきりながら誘ってくる。

「やだよ。人間切っちゃまうようなトランプでババぬきとかしたくねーし」

「大丈夫。トランプに周^{しゅう}しないから切れたりしないよ」

「ふーん。シュウって何だ？」

ヒソカが目を瞬いた。逆にイルミは見開いたまま瞬きしねえ。そんな奴らに凝視されると居心地悪イ。

「ユースケは、念を知らないの？」

ヒソカが真顔で聞いてきた。

「なんか前にもそれ聞いたな」

記憶を辿って思い出した。二次試験官のメンチだ。忘れろって言われたから本当に忘れてたぜ。

「でもユースケ、普通に堅^{けん}使^{けん}ってたよ。針の上に落ちたときとか指一本で相手を再起不能にしたときとか」

イルミの言っているのはタワーの中でのことだよな。ケンって何

だ？

「でも凝^{じや凝}で見ると念が垂れ流しなんだよね。流れてる念も何か普通のと違うような？」

ヒソカが俺の全身を舐めるように見る。やめれ、キモいぞ。つか、ギョーって何だ？

わけのわからないことを代わる代わる言われた。一人腕を組んで疑問を浮かべる。

「そういえば、精孔^{しやうこう}の開き具合も微妙だね」

今度はショーコーきた。

「おめーら、わけのわからねえ話してんなよ。説明しろ。あ、イルミには期待しねえ。ヒソカ、説明しろ」

「何それ。ユースケ酷くない？ オレ説明うまいよ」

「おめーの説明は、途中で宇宙からの受信が入るからダメだ。かと言ってヒソカの説明は嘘が混じりそうだから、イルミの役目はヒソカの説明に嘘っこがあつたら違うって言ってくれ」

「それ、お願い？」

無表情なくせに、目が嬉しそうに輝いている。お願いが嬉しいのか？

「ああ？ まあできればそうしてほしいっつー感じだな」

「嫁にお願いされた。これで婚約成立だ」

「意味わかんねーよッ！！」

横で、ヒソカが腹を抱えて爆笑してやがる。それに蹴りを入れておく。

「取り消す。おめーにや何も頼まねえ」

「今更キャンセルできないよ。さ、ヒソカ。早く嘘っぽい説明始めなよ」

「よしきた。任せてよ」

親指をぐつと立てるヒソカ。

「嘘つく気満々で説明始めんじゃねーよ！ おいてめえ、ヒソカ。嘘っぽいと俺が感じたら、容赦なく殴る。嘘っぽいと、俺が、感じたらだからな」

つまり、俺の感覚で嘘じゃなくても殴られるという。それに気付いたヒソカが。嬉しそうに笑った。

「嘘っぽく言えばユースケに本気で殴ってもらえるんだね。痛いんだろうなあ」

股間を盛り上げるな！

「こんな変態、殺っちまった方が世のためな気がする」

「そうだけど、こんなでも時たま役に立つこともあったりするから、まだ生かしておいて。まあ嫁がどうしても殺るっていうなら、旦那としては応援するけど」

「イルミ、てめえはもう宇宙に帰っとけ」

笑い転げているヒソカを蹴り飛ばし、さっさと説明しろ、と脅す。散々蹴られた挙げ句、やっとヒソカが説明しだした。

「念っていうのは、生体エネルギー、オーラのことだよ。誰もが微量に放っているこのオーラを自在に操れる者を念能力者と呼ぶんだ」

それはつまり、霊気のことか？ 俺は魔族だから妖気だが。それなら普通に操ってる。何か違うのか？

「普通の人間は、このオーラ、念を垂れ流してるんだ。でも、念を溜めておくこともできるんだよ。それが纏てんという状態なんだ」

そっぴや、サトツさんやメンチ、ブハラもそうだったが、目の前のヒソカやイルミも霊気をうまく体に纏てんっている。こいつら常にその纏てんつてのをやってるのか。

「ユースケ、今のところ嘘じゃないよ」

「嘘だと思ってねーよ」

無表情なドヤ顔、そんなん初めて見たぜ。さすが宇宙人。

「ユースケ、ボクが今何をしてるかわかるかい？」

宇宙人から変態に視線を変えると、変態は存在感がなくなっていた。

「念つてのがまったく出てねーな」

先程は豊かに体を取り巻いていた靈氣が消え失せ、目で見ていなければそこに存在しているとは思えないくらい希薄だった。

「やっぱり見えてるね。これが絶だよ。精孔を全て閉じた状態。さらに」

精孔から一気に念が噴き出した。纏の状態より力強く体中を覆っている。

「これが練。熟練すればするほど強くなる。修行の成果を見せることを、練を見せろっていうくらい、念において練は重要なんだよ」

「これも嘘じゃないよ」

「わあってるよ」

イルミに確認するまでもなく、自分の体験で真実だとわかった。纏だとか絶だとか意識したことはなかったが、人間だったときは靈氣を、今は妖氣を操ってきているのだ。

「纏、絶、練まではわかった。だが、てめえのトランプやイルミの変装っつーか変形を見ると、念つてのはそれだけじゃねーんだろ」

「正解。纏を知り絶を覚え、練を経て発に至る。念の集大成が発だよ。必殺技とも言っね。」

その他に、無機物に念を宿らせて武器にしたりする周、
念を体の一部分に集める凝、
念を見えにくくする陰、
念を広げてその範囲内の事象を把握する円、
念で肉体を強化する堅、
集めた念のある部分から別の部分に移動させる流、
念を全て一カ所に集める硬、
これらが念の応用だね」

なんかいっぱい名前が出てきてよくわかんねーけど、なんとなく
念とその応用がどういうものかはわかった。幻海のばーさんにそんな
ことを調きよ……いや教えてもらったっけな。念を霊気や妖気に置
き換えるなら、多分俺にもできる。

「発はそれぞれ自分の特性に合わせて、念能力者が創意工夫して開
発するんだ。特性は生れつき決まっていて、放出・強化・変化・具
現化・特質・操作の6タイプのどれかだよ」

6つの分け方、ねえ。心当たりがあった。

「その6つのタイプつつーのは」

色でわかんذار、と聞こうとしたら途中で心得たというようにヒ
ソカに遮られた。

「水見式っていうやり方でわかるよ」

聞きたかったこととは違うが、興味深かった。

グラスに水を注ぎ、葉っぱなどを浮かべる。それに手をかざして

練を行うと、特性に応じて変化があるらしい。それが水見式判別法。

そんな面倒なことしねえでも、靈氣、いや念の色でわかるんじゃないのか？

「念って色分けできねーか？」

「念に色はないよ」

聞いたら即座に否定された。え。ねえの？

「そういう風に言っつてことは、ユースケには念が色で見えてるってこと？」

そうイルミに聞かれた。

「おう。見えるぜ」

ヒソカは目を丸くし、イルミからは。

「さすがオレの嫁」

宇宙発言出た。もう無視だ。シカトだ。

「そんなの聞いたことないよ。それがユースケの念能力なのかな。それが本当ならものすごい能力だね。ちなみにボクは何色してる？」

ヒソカが目を糸みたいに細め、ワクワクしながら聞いてきた。

「おめーは緑だな」

嘘つき、気まぐれ、捻くれ者に多い色だ。キルアと同じ色。言わねえけど。

「オレは？」

宇宙人の色だ、と言ってやりたいところだが。

「イルミは赤。マイペースな不思議野郎は大概この色だ」

ついでに言うと、若干タイプは違うが、蔵馬がこの色だったりする。

ヒソカが爆笑した。

「そうそう、念って結構性格わかるよね。へえ。本当なんだね。自分が何系なのか普通は隠すものだけど、ユースケの前じゃ隠しても無駄なんだ。恐ろしいね」

タイプ別に能力の方向性がわかってしまったため、そういうものは隠しておくものらしい。

「で、ヒソカとイルミは何系なんだ？」

「ユースケ相手に隠しても意味ないね。ボクは変化系だよ」

「オレは操作系」

緑が変化系で、赤が操作系か。

「他にどんな色があるの？」

「黄色、青、紫、それから何色とも分けられねーのがたまにあるな」

「ボクの性格判断からすると、強化系は単純一途」

「そりゃ青だな」

ゴンがそうだった。隠しておくものみてーだから言わないが。

「具現化系は神経質」

「ああ。そういう奴は黄色だ」

桑原がそうだ。ああ見えて、あいつ実は神経質なんだよな。

「放出系は短気で大ざっぱ」

「あるある。それは紫だな」

「特質系は個人主義者で、カリスマ性がある」

「まあ一概にや言えねえけど、そういう奴多いな。色はこれっつーのはねえの。何色とも言えねえすげえ色だったり、金色に光ってたりとかな」

飛影や仙水なんかがこれだ。言っても知らんだろうっから言わねーけど。

「ユースケはどんな色なの？」

ヒソカが興味津々に聞いてきた。イルミのデカい猫目も俺をじっと見ている。

「俺は紫っぽい青、んで金色かかってる」

紫が放出系で、青が強化系、金色が特質系だから。

「ということは、放出系寄りの強化系要素の強い特質系ってことかな？」

「そういうことになるのか」

ヒソカの言葉に頷く。

「それならその特性が色で見える念能力も納得だよ。そんなの普通ないし」

イルミが言った。

恐らく、俺が特質系になったのは仙水と戦って死に、魔族として生き返ってからだ。それまでは霊気の色なんて気にしてなかった。色が見えるようになってもあんまり気にしてなかったが、結構重要だったんだな。

「ふーん。ユースケは特質系なんだね」

「ねえ、ユースケはどうして纏ってないの？ 念が垂れ流しだよ。精孔もきっちり開いてるところと閉じ気味なところがあるし」

話の流れなんて気にしない。ゴーイングマイウェイ、イルミが瞬きせずに首を傾げる。

あー。ばーさんにもなんかいろいろ言われたよなー。霊気の流れがうんたらかんたらって。それでもやってないのは。

「面倒くせーからだな」

腕組みをして言い放つと、ヒソカの読めない笑みと、イルミの無表情が俺を見る。

「纏、しようよ」

「纏、した方がいいよ。タワーの中でのユースケを見ている限り、状況に応じて瞬時に必要な念を使っているみたいだけど、ユースケにもわからないように念を使う能力者だっているよ。常に纏はしてた方がいい。嫁に何かあるの、旦那としては困るし」

最後の発言はともかく、内容はごもつとも。そういや海藤たちがそんな不思議能力者で、ばーさんに同じこと言われたっけ。油断すんなくて。

「ま、未知の世界だしな。たとえ宇宙人とはいえ、その意見は聞いた方がよさそうだ」

うし、と気合いを入れ、全身の精孔から妖気を放った。その瞬間、俺を中心に妖気の圧力が噴き出し、部屋中をたたき付けた。床が蜘蛛の巣のように地割れし、壁が崩れる。ヒソカとイルミは念でガードしたようだが、圧された跡を足元に残していた。

全ての精孔から発した妖気を一瞬で纏ったが、その一瞬での被害は大きかった。おっかしーな。こんな破壊するはずじゃなかったんだが。

「……すごいね。纏でこれかい」

「練やったら部屋が飛ぶかもね」

見下ろした俺の体は、金色がかった青紫の妖気で豊かに被われていた。

「ま、こんな感じだな」

「たいしたものだね。なるほど、ユースケは念の総量が半端ないんだ」

そりやな、これでも魔王でS級妖怪だからな。妖気の量で人間にや負けねえよ。仙水みたいな人間もいつから絶対とは言えねえが。

「で、ユースケはその“真実を暴く鏡”ゴッドアイズの他にどんな念があるの？ 強化系の念が何かあるんじゃないの？ ね、教えてよ」

勝手に俺の念の色を見る力を名付け、ヒソカがワクワクしてねだる。変なカッコした大の大人で、しかも変態がやったところで、かわいさなんてかけらもない。だが、俺のとおっておきを知られていないっつーのは新鮮だな。対戦相手や見知らぬ雑魚妖怪まで、みんな知ってたもんなあ。

「俺の十八番は霊丸だぜ」

「レイガン？ どういうの？」

「ユースケ、普通自分の念能力は他人に教えないものだよ。旦那のオレくらいにはいいけど」

身を乗り出すヒソカと、まともなことを言っただけなのにイマイチ決まらねーイルミ。念能力を教えていいのかって。

「知られたところで困りやしねーよ。みんな知ってたしな。それに、念について教えてくれた礼だ」

へえ、とヒソカがおもしろそうに笑う。

「ユースケってやっぱりいいね。君みたいな義理に篤い奴、ボク好きだなあ」

「やめてくれる、ヒソカ。自分は義理なんて切って棄てるくせに。ユースケはオレの嫁だよ。間男する気？ なら真剣に排除するよ」

「イルミと殺りあうつもりはなかったんだけど、ユースケのためだし、それもあり」

語尾にハートマークが見えた。キモい。

イルミとヒソカが立ち上がり、イルミは無表情瞬きなしでヒソカを見据え、ヒソカはヒソカで目を糸みたいに細めた嘘臭い笑顔でイルミを見た。

戦いてーなら勝手にやりやあい。が、聞きてーつつつといて俺そっちのけってのはいただけねーなあ。

指先をイルミとヒソカの間に向け、威力を最小にした霊丸の引き金を引いた。

二人は霊丸の接近に気付いて飛びのいた。二人の間を貫いた霊丸は、部屋の壁をぶち抜き、ぶち抜き続け、外が見え、その先の森まで破壊しまくって止まった。

……おかしいな。軽く撃つたはずなんだが。

心当たりはないこともない。最後に戦ったのが黄泉だったってことだ。アレが基準じゃ軽く撃つても軽くねーか。

呆然と俺を見ている二人に説明をする。

「今のが霊丸だ。ん？ 妖丸か？ まあとにかく、指先に妖気……じゃない念を集めて、銃の引き金を引くように撃つ。そんだけだ」

呆然からおぞましい笑いに変え、先に口を開いたのはヒソカだった。股間をあえて見ねー。意地でも視界に入れねー。

「なるほど。教えてくれた理由がわかったよ。軽く撃つてもそれだもの。つまり、知ってても防ぎようがない能力ってわけだ」

ま、そーいうこつたな。

「レイガンね。単純な攻撃ゆえに、なかなか撃たせてもらえる状況はないはず。それでも使えるってあたりがユースケの凄みだね。あ、滾っちゃうよ」

こいつ。霊丸でぶっ飛ばしても感謝状出る気がするぜ。

変態を視界に入れないように逸らしたら、そこには宇宙人がいた。

宇宙人が変態か。なんだこれ。選択肢が究極すぎんだろ。

宇宙人は、無表情なのにグレイみたいなデカイ目をどこかキラキラと輝かせていた。耳を塞いでおかなかったことが痛恨のミスだ。

イルミは言った。

「ハンター試験終わったら結婚式だね」

「どこの星からそんなもん受信してんだてめえは！！」

「うん。さすがイルミ。でもその結婚式、花嫁が奪われちゃうよ。ボクによって」

「ゾルディックの名誉にかけて邪魔はさせないよ」

冗談みたいな内容を真剣に言い争う二人。中心のはずの俺の否定は、なぜか通らない。話を聞かぬ奴らだな！

「おめーら、部屋ごとぶっ飛ばされてえか？」

二人の動きがピタッと止まる。やっと話を聞いたかと思いきや。

「誰か来た。じゃオレはギタラクルだから」

宇宙人は針を頭に次々と刺し、グロテスクな宇宙人へと変わった。

「カタカタカタカタ」

完全な宇宙人になりやがった。力無く、俺は霊丸の形を作っていた手を下ろす。

「じゃ、ボクらはダウトでもしようか」

ヒソカがトランプを切りながら歩み寄る。その肩をイルミ、もと
いギタラクル、いや301番がガシツと掴む。

「カタカタカタカタ」

「ん？ ギタラクルもやりたいの？ いいけどちゃんとダウトって
言ってるね」

「カタカタカタカタ」

「じゃ、始めよう」

「カタカタカタカタ」

いや無理だろ。ぜってーダウト言えねえだろ。つーか何、何でヒ
ソカはなんとなく意思の疎通ができてんだ？ しかも俺、完璧メン
バーに入ってるか？

「はい、これユースケのね」

「カタカタカタカタ」

いくら宇宙人と変態とはいえ、期待の眼差しで見られてまで突っぱねるような大人気ない真似はできなかった。黙ってトランプを受け取り、その場にドスンと腰を下ろした。

「ボクから時計まわりね。はい、1」

ヒソカがトランプを裏にして真ん中に置く。続けて301番がトランプを置く。

「カタ」

数字言ってねーだろ！

「……3」

突っ込むのもはや疲れた。俺は大人しくトランプを出した。その調子でゲームは続き。

やって来たツルツパゲが、部屋に入った瞬間、俺達3人のダウトを見て、「マジヤベエツ」と叫んで部屋の扉の外に隠れたのは気付かなかったことにした。

試験官雑談

三次試験を終え、四次試験のゼビル島へ向かう船の中、一次試験から三次試験までの試験官であるサトツ、ブハラ、メンチ、リツポーがネテロ会長の部屋へ集められた。

ネテロ会長の趣味により、部屋は畳に座布団が敷かれ、ちゃぶ台の上にお茶が出されている。お茶請けには煎餅だ。ブハラとメンチは遠慮なく煎餅をかじり、サトツとリツポーはお茶をすすった。

「さて、諸君。今回は協力をありがとう。どうかね、今回の試験は注目の受験生はいるかね」

口火を切ったのはメンチだ。

「そりゃもう一番よ！ あれはもう、桁より格が違うわね！ まさに別格よ！」

「メンチはケイサのスシが食べられたからね」

ブハラが笑って突っ込む。

「否定はあんまりしないわ。じゃあブハラは誰がいいのよ」

メンチの言い分は、まるでどの子がタイプなの、と聞く女子高生のようにだった。この時点でもうすでに主旨がズレているわけだが、メンチだから仕方ない。ブハラは脂肪でなくなった首を傾げて答えた。

「僕は…… 44番かな」

「ああ、あのトランプ野郎ね。アイツ、試験中ずっとこっちに殺気向けてやがったのよね。だから余計にイライラしちゃったんだけど」

メンチが合格者ゼロで試験を早々に打ち切ろうとした背景には、そんな事情もあった。

「一次試験中もそうでしたね。試験中には受験生を相当数殺害していましたし」

ヒゲ紳士なサトツが思い出したように言う。

「注目というなら、301番のギタラクル改め、イルミ・ゾルディックだな」

パイナッブルのように頭頂部の毛を逆立てたリップーが言うのは、三次試験で変装を解いたのをカメラ越しに見たイルミだ。挙げられた名前に、皆がああと頷く。

「ゾルディック家の長男ね。アイツ、元は美形なのにあの変貌はないわ。超キモイ」

相変わらず女子高生のようなメンチの発言に、反論はない。まあ確かに、という感想すら抱く。

「ま、弟も立派な殺人鬼だぜ。タワーン中で、肉体を変形させて囚人を殺してたしな」

リップーは三次試験中に監視テレビに映った映像を思い浮かべて

言った。キルアは爪を長く鋭く変形させて、囚人の胸から心臓を抜き取った。

「あんなカワイイ顔して、あの子も肉体変形しちゃうわけ？ ゾルディック、キモ！」

身も蓋も無い。だが、殺人一家の努力をけなすメンチをたしなめる者はこの場にいなかった。

「今回の試験は新人が素晴らしいですね。294番のハンゾーも総合力は高いですし、404番のクラピカもバランスがいい。403番のレオリオは応援したくなります。何より、405番のゴンハンターとして重要な資質を感じました」

「ゴンってあの黒髪の少年？ マフタツ山で真っ先に谷に跳んだ子よね。できる感じだけど、癒し要員じゃないの？」

メンチの頭に浮かぶのは、二次試験の握り寿司の課題でのゴンだ。ユースケの握り寿司を見た後のくせに、魚を一匹丸ごと酢飯でくるむという暴挙に出ながら、キラキラした目で差し出してきた少年。

おい、とは思ったが、ヒソカの殺気に当てられてイライラした中、癒しを感じたのを覚えている。

もちろん、食えるかつ、と投げ飛ばしたけど。丸ごと一匹とか、だつてあたし、アシカじゃないからあんなの食えない。

「405番か。ありやたいしたもんだぜ。あの場であの選択ができ、尚且つ壁を壊して進むなんて力技を考える奴はいねえよ。あいつはいいハンターになるぜ」

リッポーが認めるのは、タワーの最後の選択をしたゴンのハンターとしての資質だ。

ゴンたちは、ゴンを含めレオリオ、クラピカ、キルア、トンパの5人で多数決の道を進んだ。道を曲がるのも、道を進むのも、戦う相手を選ぶのも、全て多数決で決める。

5人の中で4人は元々知り合いであり、協力して進んでいたものの、トンパだけが邪魔をしてことごとく反対の意見を選択した。苛立ちを募らせながら最終選択まで進み、最後に待っていたのは、短く簡単だけれども3人しか進めない道と、長く険しいけれど5人全員が進める道の選択だった。

たいていは仲間割れが起こる。だが、起こりかけたときにゴンが言ったのだ。全員で進もう、と。さらに、仲間割れをしたときに相手を害するための凶器としか思えないツルハシやハンマーを示し、長く険しい道の壁を破壊し、短く簡単な道に入ることを提案する。

どんなときでも活路を見出だす。その姿勢がリッポーの目に止まった。

「ホホ。そうかそうか。さすがジンの息子じゃな」

ネテロ会長が笑って言うと、4人はやはりと声を上げた。

「ゴンはあのルルカ遺跡の、ジン・フリークス氏の息子なのですね」

「へえ。ハンターの血なのかしら」

武道家の老人ボドロや、毒使いの少女ポンス、狙撃手のゲレタ、蛇使いのバーボンの話も出る。が、少し無言になると、皆同じことを口にする。

「でも、やっぱり1番よ」

「うん。そうだね」

「気になる存在なら彼が最も気になります」

「念も使えるしな。ありやとんでもねえバケモンだぜ。あんなのがなんで今更ハンター試験なんか受けてんだか」

4人ともそれぞれが課した試験において、ナンバープレート1番、ユースケの行動の異常さを見た。

「奴の最も異常なところは、あの念の総量だぜ。あのレイガンとかいう放出系の能力、軽く撃ってあの威力だ。全力で撃ったら？ 何発撃てる？」

リッポーはあの念の威力を思い出し、鳥肌をたてた。

「レイガンですか。あの威力なのに、恐らく制約は“指先を向けた方にしか飛ばない”程度でしょう。常人がああの威力を出すためには、命をかけた制約が必要でしょうね」

サトツは映像で見たユースケの念能力をそう分析した。

「アレ、マジ反則よね。あんなのどんな念能力か知ってたところで、全力で撃たれたらまず避けられないでしょ。でも、アイツのズルい

「そこはそれだけじゃないのよね」

「1番の動き、めちゃくちゃ速いんだよね。あの動きでレイガンなんて飛び道具は確かに反則だよ」

メンチの言葉に、ブハラが巨体を揺すって同意した。

「あんなバケモンなのに、今まで名前をかけらも聞いたことがない。どこの出身なんです？」

リッポーが問い掛けると、ネテロ会長がおかしそうに笑う。

「それがのう、奴はハンター試験に願書を出していないのじゃ」

ぎょつとする試験官たち。それが示すことはただ一つ。

「何よ、じゃアイツ、ハンター試験に偶然迷い込んだってこと!？」

「そういうことになるな」

ズズ、と茶をすすするネテロ会長。

過去に、そういう事例がないわけではなかった。天文学的な確率で、試験会場に迷い込む一般人が確かにいた。ただし、早い段階で死ぬか脱落する。

「アイツ、存在がめちゃくちゃだわ!」

メンチの叫びに、一同頷いた。

四次試験開始

ゴンたちは終了間際に飛び込み、合格をもぎ取った。3日間を有意義に使い切ったお前らがうらやましいぜ。早々にゴールしちまった俺の苦悩の3日間をどう語ろう。

四次試験は、ゼビル島という島で行われるらしい。船でゼビル島へ移動すると、三次試験のゴール順にクジを引くことになった。

クジはまずヒソカが引いた。中身は番号が書かれたカードだった。次に引いたのは俺。カードに書かれた数字を読み、何となく何をするのか予想がついた。

続いて301番が引き、ツルツパゲが引き、最後にゴンたちが引いた。

全員がクジを終えると、三次試験官のリッポーから説明が始まった。

「諸君にはこれから一週間、お互いに狩りをしてもらう。諸君が今引いたカードに書かれた数字が、その相手だ。」

自分のプレートが3点、相手のプレートが3点、合計6点を所持して最終日にゴールまで来れたら合格とする。ただし、ターゲットではないプレートは1点とし、ターゲットではなくとも6点を集められればよいこととする」

リッポーの説明が終わる頃には、皆が自分のプレートを隠していた。いや、まあ俺は今更だから隠さなかったが。1番なんて覚えやすい数字な上に、相当連呼されたしな。どう考えてもみんな知って

んだろ。

「それでは、2分置きに一人ずつ出発する。順番は、三次試験の合格順になる」

リップーの説明が終わり、まずはヒソカが出発した。次は俺か。

「ユースケ！」

背後から声をかけてきたのはゴンとキルアだった。

「次はユースケ出発だね」

「相手は誰だったんだ？」

問い掛けて来る二人の胸には、やはりプレートはない。どこか不安げに聞いてくるのは、敵対関係になることを恐れているからだろう。カワイイ奴らだ。

「まさかヒソカだとか、あの見るからにキモヤベー301番とかだったかしねーよな？」

キルアがコソツと言う。あー。そのキモヤベーの、おめーの兄貴だわ。

「俺の相手はアイツだ」

指先にはキモヤベー301番がいる。キルアがマジかよ、と呻き、ゴンが大丈夫？、と聞いてくる。

「問題ねーよ。おい、301番！俺の相手、おめーだわ！」

三次試験の疲労を全部ぶつけてやるわ。覚悟しとけ。ニヤリと笑いかけると、301番は懷から自分のプレートを出し、俺に投げってきた。俺の手に収まる301番のプレート。

「カタカタカタカタ」

頭に針ぶっさしたニワトリみてえな髪型の宇宙人が何か言ったら、見つめられてもテレパシーとかできねーから。つかアイツとは言葉が話せても意味通じねえんだった。

なんにしろ。

「プレート、手に入っちゃったわ」

出発前に6点が。

周囲も皆、呆気にとられて見ていた。

「なっ、あんなのいいのかよ!？」

見ていた受験生たちが騒ぐ。騒がれてもくれちゃったんだから仕方ねーべ。

「問題ない。その2枚のプレートを一週間所持できるのならな」

リップーが不敵に笑って応じる。

「おい。つまり、俺を襲えば、もれなくプレートが2枚手に入るっ

「つーわけだ。楽しみに待ってるぜ」

にんまり笑うと、他の受験生たちは挙動不審にさっと目を反らした。どうも三次試験が終わるまでヒソカや301番と一緒にいたのを見られているせいで、俺までヤバイ奴だと思われるらしい。何だよ。我こそはやってやらあつて意気込んだ奴はいねえのかよ。つまんねー。

「ユースケ、挑発するなよ」

年下のキルアに窘められる。コイツって、あの宇宙人の弟なんだよな。弟はちゃんと同じ星の住人なのに、なんだってアイツだけ異星人なんだろうか。つーか、あんな兄貴とキルアは意思の疎通はできてんのか？ できてモヒクが。

宇宙人の兄を持つ哀れなイキモノを、思わず無言で眺めていた。

「……何だよ、その可哀相なモノを見る慈愛の眼差しは」

「いや。おめーは偉いぜ、キルア。俺がおめーだったら、その星ぶつつぶして家おんでてるわ」

「星？」

ゴンとキルアが不思議そうに首を傾げる。癒される。変態と宇宙人と三日間も共にいたせいで荒んだ気持ち癒されるぜ。

「何のこと言ってるのかわかんねーけど、オレ今、家出中。母親と兄貴さして出て来てやったぜ」

得意げに言うキルア。何！？ あの宇宙人をさしたって！？ 宇宙人は明らかに無事で何ともなかったが、その行為は素晴らしい。

「正解だ。おめーは英雄だ」

「そ、そう？ どうも」

「ゆ、ユースケ？」

心底から褒めたたえたのになんてかキルアもゴンも引き気味だ。

「で、お前らは何番のカード引いたんだ？」

もう少して俺の出発時間になる。さつさと聞いておかねえとな。

俺の問い掛けに、二人は戸惑いがちに目を合わせる。お互いに狩りのターゲットが自分だったら、と心配しているらしい。初々しくてカワイイねえ。

「ターゲットがおめーら同士だったらいいな！」

え、と呟き、キョトンと二人が俺を見る。

「だってお前ら、ダチと一週間真剣に全力で戦えるんだぜ。こんな楽しい遊び、なかなかねーぞ」

気晴らしのガチバトルつーのを飛影と何度かやったことがあるが、何度やってもめちゃくちゃ楽しい。蔵馬は。あの野郎は腹黒すぎっから相当なことがない限りは誘わねー。

俺の言葉に二人が顔を上げる。

「うん！ それ、楽しそう！」

「こんなエグイ試験を遊びと言い切るあたり、ユースケっておかしいな」

たちまち笑顔になるゴンと、呆れたそぶりを見せながら満更じゃないキルア。

「オレのターゲットはユースケでもキルアでもないよ」

「オレも違うぜ」

「あちゃ。オレたち同士じゃなかったね」

「だな」

残念そうに顔を合わせるゴンとキルア。そうだ、と声を上げたのはゴンの方だった。

「ね、キルア。せーの、で見せっこしようよ」

そうゴンが提案し、キルアも同意する。その場で、誰に見えるかもわからないのに見せようとするゴンをキルアが止め、俺とゴンの肩を掴んで円陣を組む。実際、周囲の受験生はこちらを注目し、ゴンたちのカードを見ようとしていたから、キルアの判断は正しい。マジでなぜコレがアレの弟なのか。

「ユースケは知ってるから出さなくていいからね」

「おう」

「せーの！」

俺たちの胸の前に出されたのは、キルアの手にある199番のカードと、ゴンの手にある44番のカードだった。

199番はわかんねーけど、44番はあの変態、もといヒソカだな。

無言になる。

「……ゴン、お前、クジ運ないな」

「やっぱり？ オレもそう思った」

キルアが嘆息混じりに言うと、ゴンも頷く。

「キルアのそれはどいつなんだ？」

「わからないね」

「ユースケもゴンも知らないか。いいよもう、適当に3人狩るから諦めたらしい。ま、キルアならその方が早そうだな。受験生の中じゃ、キルアの実力はかなり上位だろうから。」

そこでリッポーに俺の出発を告げられる。

「うし。じゃ、俺行くわ」

円陣を解いて二人から離れると、口々に激励をくれた。礼を告げると、ゴンに視線を向ける。

「ゴン、頑張れよ」

頷くゴン。その体は小刻みに揺れていた。ゴンのターゲットは変態で殺人快楽者のヒソカだ。普通ならその震えを恐怖故と思う。

だが、俺は一次試験で、ヒソカの殺気にあてられ、歓喜に震えるゴンの意外な一面を見ている。勝てない。けど戦いたい。つまり、ゴンのその震えは武者震い。

頑張れ。

二人に見送られ、俺は出発した。

念の応用

さて、どこ行くか。

今後のことを考えながら森に入ると、そこにヒソカが立っていた。
「やあ、と片手が上がる。」

「まさかとは思うが、俺を待ってたりしねーよな？」

「さすがユースケ。その通り、待ってたんだよ」

にっこり笑うヒソカにげんなりする。

「さ、早く行こう。イルミが来ちゃう」

だからっておめーと行くのも嫌なんだが。

何をするかも決めてねーし、そっぴやこいつに聞きたいこともあったしで、ついていくことにする。

「向こうには川があるんだけど、水辺はたいてい人が集まるからね。反対に行こう」

ヒソカの後ろからついていく。ヒソカの左肩は服が切れ、血がついている。三次試験のゴール時点で既にそうなっていたから、タワの中でケガをしたのだらう。イルミも俺も気付かないように何も言わなかったが。

なぜ今になってそれが気になるかというと、その血のついた肩に

蝶が集まってきたいるからだ。好血蝶なのだろうが、まるで蝶とたわむれているようなヒソカが似合わなすぎて笑えた。

イルミがすぐに出発してくるってことで、ヒソカがダッシュした。それを追いかけると、小一時間ほどでヒソカは止まった。

相変わらずの森の中、腰掛けやすい大きさに、つるりとした石がごろごろしていて、それなりに平らな空間がある場所だからだろう。

ヒソカが石に腰を下ろし、その隣をポンと叩いて座るよう提案される。座るさ。隣じゃないところにな。

向かいの石に座ると、ヒソカが話し掛けてきた。

「そういえば、ユースケのターゲットは誰だったんだい？ おとなしくついて来たあたり、もしかしてボク？」

ワクワクしながら己を指差すピエロ。お前がターゲットなのはゴンだ。かわいい弟分が不利になるようなこと言わんが。

「うんにゃ、イルミだった。したらあの野郎、出発前にプレート投げて寄越しやがった」

つまらんと301番のプレートを見せ、ついでに1番のプレートがついているズボンのポケットの横に301番のプレートをつけた。それを見て、ヒソカが目を細めて笑う。

「イルミ、何か言っていなかったかい？」

「そついや、カタカタ言っていやがったな」

中身がアレで外見もアレじゃ、もはや人間の要素を見出だす方が難しいぜ。

「それ、婚約指輪の代わりだったりしてね」

ヒソカが目を糸みたいに細め、恐ろしい疑惑を浮上させやがった。

「んなバカな」

「だってイルミだし」

なんつー説得力だ。そうだ。奴はイルミだった。

やべえ。プレート、受け取っちまったよ。あのカタカタカタカタにそんな恐ろしい意味が隠されてやがったつーのかよ。冗談じゃねえ！

「……へっ こんなもんを婚約指輪にするなんざ片腹痛いわ。婚約指輪つーのは、給料の3ヶ月分じゃねーと認めねえ」

「ククク。ユースケ、給料の3ヶ月分だったら婚約指輪受け取っちゃうんだ」

「おう。考えてやるぜ」

考えるだけだ。検討の末ごめんなさいに決まってる。

政治家みたいなことを考えていたら、ヒソカがとんでもない事実を口にする。

「しかもゾルディックの稼ぎ手の3ヶ月分って、ユースケは美術館の宝石にでも興味あるのかい？」

「つまりなんだ。奴の給料の3ヶ月分は、美術館の宝石の値段に匹敵するっつーのか？」

「……ありえねえ。俺が探偵と屋台を何十年こなしたところでそんな金額に届くかってのに、あの宇宙人は宇宙人のくせにそんなに稼ぐってのかよ」

頭にワーキングプアだとか貧富の差だとか蟹工船だとかの単語が浮かんで消えた。

「暗殺ってそんなに儲かんのか」

「そうだねえ。これくらい」

指が3本立っていた。

「桁は？ 万か？」

人差し指で上を示される。百万？ 聞けば更にアップ。これくらいか？ まだアップ。アップを繰り返す。マジかよ！

衝撃的な結果にめまいがした。

「これはもしか、嫁になった方がいいのか？」

「えー。そこで悩んじゃうの？ ならボクもイルミくらい稼ぐから、ボクの嫁にしなよ。イルミよりは人間寄りだよ」

「比較対象がイルミな辺り、比較する価値を感じねーわ。っつか何

で稼ぐ気だよ。おめーも暗殺か？」

「いいや。盗賊」

聞くんじゃなかった。そういえば、蔵馬や飛影も昔は盗賊だったんだよなあ。やべえ。現実逃避したくなってきた。

「まあイルミの婚約指輪は置いていて」

置いてくのかよ。結構深刻な問題だぞ。

俺の不安を掻き立てるだけ掻き立てておきながら、奴は話題を変えてきた。

「ねえ、ユースケ。時間もあることだし、ちょっと念についてキミに提案があるんだ」

これが俺を待伏せまでした本題だな。視線で促すと、ヒソカが話し出す。

「念の量にたいして、念を消費しすぎる能力を持つことを、ボクはメモリーオーバー容量不足と呼んでる。でも、キミの場合は全く逆。メモリーに対して消費が少な過ぎる。それってもったいないと思わないかい？」

「それは、何か別の念能力を開発しろっつーことか？」

「うん」

軽く、語尾にハートマークすら付けて言いやがった。

だが、俺がこいつについてきた理由もこれにある。

「おめーらの念能力を見てたら、俺もそう思った」

何か、念能力が作れんじゃねーかって。

「で、だ。これまで適当に妖気使って適当にドンパチしてたんだが、おめーがこの間言ってた念の応用ってのはあんま意識してやったことねーんだ」

幻海のばーさんに教えられたっちゃあ教えられたんだが、自己流にしちまったからなあ。

「だから、念の応用ってのを教えてくれ」

「いいよ」

あっさり了解してくれた。と思いきや、そこはやはりヒソカだ。

「教えたら、お礼に何をしてくれるのかな？」

そう言うと思ったぜ。ヒソカみたいな奴が無償で何かをするとは思えねー。対策は考えてある。

「俺の新しい念能力を、お前だけに教える」

「イルミには？」

「教えねー」

「つーか何であいつに教えにやなんねーんだ。旦那云々言うならぶっ飛ばす。」

「教えたらどうするの？」

「お前以外に教えたら、その念能力は使えなくなる。」

そう告げたら、ヒソカが感情の読めない笑みを浮かべた。

「それが制約だね」

「制約？」

「念能力は制約を作ることと威力が増すんだ。キミのこれから作る念能力は、ボク以外に能力を教えない、と心に誓う、誓約することと威力は増す。誓約の条件としては低いけど、教えた場合、数時間使えなくなるのでなく、全く使えなくなるという高いリスクがあるから、かなり強くなるだろうね」

へえ。子供の口約束とか自分ルールみたいなモンが、そんなに効力があるのか。誓約（誓い）と制約^{ルール}ね。

「その制約だけど、気をつけた方がいいよ。例えば、見えないところで誰かが聞いていたらその念能力は即使えなくなる。あるいは、口を割らせる念能力者なんてのもいるからね」

確かにそりや要注意だな。せつかく新しく念能力を作ってもパーになっちまう。

「わかったぜ。じゃ、まずは応用を教えてください」

「オッケー。始めようか」

ヒソカが石から腰を上げた。

「まずは練をしてみてくださいよ」

練つてのは確か体中の精孔から念を出す奴だよな。俺の場合は妖気だが。

体中の念の流れを感じながら、俺は精孔から一気に念を吹き出した。

ドン、という爆音と共に、俺を中心に半径20メートル程度のクレーターができた。周囲の木々や石は吹き飛び、俺自身、足裏の精孔から出ている念のせいで宙に浮いている。ヒソカも妖気圧で飛ばされ、遠くで膝を付いていた。

「練、やったぜ」

「……予想はしていたけど、本当キミは期待以上だね」

吹っ飛ばされながら喜ぶヒソカ。マジキモいな。

「次は絶をやってみて」

絶、か。あんまやったことねーんだよなあ。気配消す感じでいいのかな。とにかくこの念を引っ込めてみつか。

精孔を塞ぐイメージで気配を消してみた。足が地面につく。よし、

念が消え……てねーな。金色がかった青紫の念が薄く漏れ出てやがる。頑張つて精孔を消そうと踏ん張るが、完璧には塞がらない。

「んー。75点。念が多過ぎる弊害かな。ユースケの絶は、練習あるのみだね」

平均よりちょっと上。不合格ね。そう採点された。ちつ。今に見てる。バッチシ100点取ってやつからよ。

「次は応用編。このトランプに念を宿らせてみて。周だよ」

離れたところから念で、おそらく周でコーティングされたトランプが投げられた。それを親指と人差し指でつまみとる。

なんちゃってな絶をしていたのに、取るときは指先だけ念を込めていた。意識してみると、俺は自然に念を使ってたんだとわかる。

次は周だっけか。こういうの、蔵馬あたりが得意だよな。薔薇を武器にするとか。まあ要はアレだろ、金属バットを妖気で覆うイメージ。

親指と人差し指の先から念を放ち、トランプに念を流す。瞬時にトランプは念で覆われた。

「これでいいのか？」

「いいね。それでどこかを切ってみて」

えぐれた地面に便所ポーズでしゃがみ、えい、と土を刺してみた。ドゴォ、と地面が爆発してもう一つクレーターができた。もうもう

と砂煙が上がる。顔が砂埃まみれだ。

「……だあッ！ 周、危ねーな！」

「いやいや。普通、周じゃそんなに地面掘れないからね。さすがユースケ。周だけでも凄い武器だ」

驚いてトランプを投げ捨てたら、ヒソカに感嘆された。俺の周は威力がありすぎるようだ。ヒソカみたいに人間に向けたら、切れるんじゃないくて、木っ端みじんになるに違いない。

「じゃあ次は凝」

ヒソカの人差し指が一本、上に向けられた。何も持っていない。だが、目に念を集めて見てみたら、指先に念でできたトランプが見えた。

「スピードのキングだな」

「正解。クク。今の、凝をしないとトランプが見えないようにすることを隠というんだ。でも凝をしても見えない隠もあるから要注意だ。ちなみに、隠は絶の応用だから、ユースケには難しいかもね。絶苦手だから」

そう言われたら挑戦したくなんじゃねーか。念を見えにくくすんだろ。やったるぜ。見えねえ霊丸撃ってやらあ。

内心鼻息を荒くしていると、ヒソカがにそれにしても、と話を進める。

「凄いね。目が自然に凝をするようになるって、相当な戦闘経験だ。

コースケ19歳だっけ。一体どうやったらその年でキミみたいなことができるんだい？」

年齢教えた覚えはねーが、なんで知ってんだとかヒソカだからもう突っ込まねー。そりゃなあ。年がら年中自分より上の実力の奴と命懸けでバトってたらこうなんじゃね？

「ひたすら闘ってただけだ。で、次は何があるんだ？」

簡単に流すと、そのうち教えてもらおう、と含み笑いをされた。鳥肌立つからやめれ。

「念を必要に応じて分散して移動させる流というのがあったけど、キミ、これはまさに流れる速さでできてるからいいよ。肉体を強化する堅と、念を全て一カ所に集める硬もできてる。後は円やってみようか」

トランプ取るときになんちゃって絶の最中だったのに、自然と指先に念を集めたもんな。これが流か。堅ってのは殴るときとかガードするときにやる奴だろ。霊丸で指先に念を全部集めるのが硬か。

「自分を中心に、シャボン玉を大きくするイメージだよ」

俺が真ん中で、そこから丸く念の膜を広げる感じが。

ズズ、と念を広げて行く。地面を這わせ、ゆっくりと進ませる。その感覚に衝撃を受けた。

すげエ。

目を閉じると、円ってやつの中にいる生き物を感じた。鳥とかうさぎみたいな動物、植物。お、ヒソカがいる。その近くに絶をしている念能力者が2人こちらを見てるな。へえ。絶していたせいで気付かなかったな。

更に離れた川の辺りには受験生が点在し、もっと円を広げたら森中の受験生の場所がわかった。ゴンは川のそば、キルア、クラピカ、レオリオはバラバラに森にいた。……げ。イルミ、こっちの方向に来てやがる。偶然か確信かわからんが、まだ距離はあるな。

それを感じたら、さっと円をやめて目を開けた。

「どうだった？」

巨大クレーターの向こうからこちらに跳びはねながらやってきていたヒソカが尋ねてくる。

「めちゃくちゃ便利だな、円。今、イルミがこっちに向かってくんのがわかったぜ」

見えるのではなく、念を感じることですわわかる。まあはつきり見えたら、飛影の邪眼いらなくなっちまうよな。

「どのあたりにいたの？」

「ここから10キロくれえ先だな」

10キロ。呟くとヒソカが例の感情を感じない笑顔を見せた。

「それは全力の円？」

「いや、イルミが見えたからやめた」

婚約指輪云々の話がマジだったらと思うと、今はイルミに会う気にならねーわ。

すると、さすがユースケだね、と頷かれた。

「円の範囲は達人のレベルでも50メートルだよ。キミ、やっぱり人間の基準を軽く超越しちゃってるよね」

「俺ア、魔王だからな」

にしし、と冗談っぽく笑って言ったのにも関わらず、ヒソカは不気味な笑みで応じた。

「初めは馬鹿馬鹿しいと思ってたんだけどさ。どうやらそれ、本当みたいだね」

「お。信じんのか？」

「うん。能力的に人間じゃないっていうのもあるけど、だってキミ、そういう無意味な嘘をつくタイプじゃないだろ」

俺は無言で口許を緩めた。こいつの突出したところは念能力だけじゃない。むしろ、人の心理を見抜く力にあるんだろう。まあ変態なところもず抜けてやがるが。

「俺のいたトコはよ、めちゃくちゃ広くて、やたら強エ奴がうじゃうじゃいるんだわ。強いくせに日に日に強くなりやがるし。俺アこ

こでレベルアップして、そしたらあつちに帰るわ」

「どうやって帰るの？」

その問い掛けは、俺のいた所が飛行船やら電車やらで帰れる場所じゃないとわかっていようだった。

「なんとなく、方法はわかってんだ。今、おめーに教えてもらった念の応用でできそうなんだよ」

うまくいくかはわからねえ。けど、試す価値はあると思うんだ。

「ふーん。どういう能力を作りたいの？」

ここでは教えられねー。近くに絶をした念能力者が2人いるのはわかっている。迂闊に口に出したら、さっそく誓約に抵触しちまう。

ヒソカの耳を引っ張り、頭を下げさせる。ち。デケー野郎は嫌いだ。

何やら嬉しそうなヒソカの耳に、こそりと囁いた。

「念能力者が2人、俺たちを見てる。どんな念能力者かわからねえから言えねえ」

小さい音を聞く念能力があるかも知れねーし、唇の動きで読み取るかも知れねー。

キョトンとするヒソカ。同じように小声で返してきた。

「たぶんそれ、試験官だよ。全然気付かなかった」

「だな。絶してやがるから、俺も円をやるまで気付かなかったぜ」

「んー？ ちょっと待って」

「あんだよ」

「絶してる人間はさ、円じゃわからないはずなんだけど」

んなこと言われても、わかつちまったんだからしかたねーべ。

「試験官の絶のレベルというより、ユースケの感知能力が高性能すぎるだけだろうね」

呆れがちにそう褒められた。

「そんなわけだから、俺はあいつら撒いて、念の開発するわ」

「うん。わかった。完成したら教えてね。ボクは狩りでもしてるよ」

「そっぴゃ、おめーのターゲットは何番なんだ？」

「384番。誰かわかるかい？」

「わからねーな。見つけたら念を覚えてくれた礼代わりにとつてやるよ」

「そっかい。よろしく」

じゃあ、とヒソカから一歩離れると、俺は最速でその場を走り去った。

かなり離れた山の麓あたりで止まり、円を試みる。近くには誰もいないな。

俺の思い描く念能力を完成させるまでは油断しねえ。常に円で警戒しよう。

半径10キロに円を広げたまま、俺は念の開発を始めた。

念能力（前書き）

サイト掲載文より加筆修正

念能力

結果としては、思い描いた通りの念能力ができた。元々作りたかったのは一つなんだが、その過程で二つの念能力を手に入れた。

ただ、一人でやっているため、この念能力がどこまで他人に通用するのかわからない。よし、ヒソカに協力させるか。というレベルになったのが、四次試験が始まって三日目の夕刻のことだった。

さっそく円で探る。10キロの範囲にはいない。さらに円を伸ばしてみる。受験生が7人。その近くに念能力者が同数。これはきつと試験官だな。

受験生と試験官の見分け方は、纏をしているかないかだ。ただし、受験生が念能力者だった場合は、気取られないように試験官は纏ではなく絶を行っているようだ。

円で探ると12キロくらいにキルアがいた。一人で行動している。プレートは奪えたんだろうか。まあキルアなら大丈夫だろう。

15キロすぎ。クラピカとレオリオと一緒に行動してる。あいつら仲いいなあ。

18キロあたり。イルミ発見。スルーだ。

20キロ、ヒソカがいた。だが、何やら不思議な状況だった。

ヒソカについている試験官が一人、近くに絶をして隠れている。

その離れたところに気配を押し隠した誰かはわからんが受験生が一人と、それについてる纏中の試験官が一人。

さらに、その中間あたりに纏中の試験官が一人いる。

受験生が二人なのに、なぜか試験官が三人だ。受験生は二人だけ、だよな。

おかしい。違和感を探ろうとそこに意識を集中させると、やっとなんかがあるのはわかった。まるで植物のように自然に溶け込んでいるのだが、ごくわずかな人間の気配でようやくそこにいるとわかるほど。状況からして、おそらくは受験生の誰かだ。

誰か知らんが、コイツすげーな。試験官の人数一つー違和感がなければわからなかったぜ。たぶん、ここに潜んでる奴がやってるのが完璧な絶だ。なるほど、円じゃわからんってのはマジだったんだな。

この完全な絶をしている受験生は何者か。距離関係から見ても、ヒソカに関わりがあることは間違いなさそうだ。ヒソカから隠れているのか、はたまたヒソカを狙っているのか。

ふと、そっぴやゴンのターゲットがヒソカだったな、思い出した。状況からすると、この絶の達人はゴンなのだろうか。

だが、念能力者じゃないゴンに絶はできるのか？ いや、こんな完璧に絶をしているのに、ついている試験官は纏だ。てことはこの受験生は念能力者じゃないのか。

この完璧な絶をしてるのはゴンだ。俺の勘はそう確信した。

ややこしい状況みてえだが、行ってみつか。ヒソカと試験官が3人で、念能力者が4人いるようだし、新しい念能力を試すいい機会だ。

円を保ったまま、俺はそこに向かって駆け出した。

状況が変わる前に、と全速力で急いで行く。途中でなぜか落ちていた197番のプレートを見つけた。誰もいねえし、ヒソカへの手土産にすつか。

着いたとき、ヒソカは木にもたれて座っていた。隙だらけに見えて、実のところ隙はない。俺は草むらから出て、ヒソカに声をかけた。

「よオ、ヒソカ」

「やあ。その様子ならできたみたいだね」

「まあな。見せた方が早い。トランプで俺を攻撃してみろよ」

木の下に座っていたヒソカが立ち上がり、トランプに周をする。それから口を開いた。

「さて、ユースケの念能力を見せてもらおうか」

コイツ。

楽しみにそう告げたヒソカの口の動きと声は、見事にバラバラだった。おめーは腹話術師かよ。なんつー器用な奴だ。

「お前いつから、奇術師から腹話術師に変わったんだ」

「変わってないよ。ボクは奇術師さ。だってこれからユースケは念能力を説明してくれるんだろ。きつと声は届かずとも姿は見えるあたりに試験官がいるだろうから、ボクの口の動きからユースケの能力がばれないように気を使っているんじゃないか。せつかくの念能力が消えてしまわないように」

そのセリフも、言葉と口の動きが全く違っていた。思わぬ理由に目が丸くなる。

ヒソカ以外に俺の新しい念能力を教えたら、その念能力は使えなくなる。その誓約が守られるよう、協力しているらしい。

「おめー、宇宙人と違ってなんて空気が読める奴なんだ」

「惚れてしまうだろ」

「おう。おめーが男じゃなくて、俺より背が高くて、奇術師じゃなくて、変態じゃなくて、ヒソカじゃなかったら惚れてつかもな」

「ボクはそんな鬼畜なキミにゾクゾクしちゃうよ」

俺は絶対ソコを見ねー。見ねーが、ヒソカおめー股間を自重しろ！

「それより、キミの方こそ何か策を講じた方がいいんじゃないかい」
変態だが、ヒソカの言ってることは正しい。俺は口を手の平で隠した。

「ターゲット、俺とヒソカ」

ボソツと呟き、念を発動した。これでいいだろう。

ヒソカが俺を見ていた。

「今、何かしたね」

「おう。後でちゃんと教えてやるよ。とりあえず、これで口さえ隠せば問題ねエ。ほれ、トランプ投げろよ」

「姿は見えても声は聞こえなくなる能力ってことかな。了解」

腹話術状態で話すヒソカ。口を手の平で隠す俺。妙な状況だよな。

ヒソカは目を細めて笑い、俺に向かってトランプを数枚投げてきた。トランプがヒソカの手から離れた瞬間に、俺は一番目の念能力を発動する。

トランプは俺とヒソカの間で静止し、パラパラと落ちた。

お。うまくいったな。にやりとする俺とは逆に、真顔になるヒソカ。

ヒソカは、落ちたトランプを眺め、トランプがまだ周を保っているのを確認する。

「ボクの周はまだ生きている。念能力を無効にする能力、ではなさそうだ。壁に当たったみたいな感じ」

壁。いいところをついている。

「へっへっへ。こんなもあるぜ。ヒソカ」

落ちたトランプを見て冷静に分析するヒソカはマジで頭がいい。

そんなヒソカの名前を呼び、俺はドヤ顔で二番目の念能力を発動した。

とくに何も起こっていないように見えたが、なんらかの異変を感じたのだろう。すぐに、ヒソカは凝を使った。

凝で見たモノに目を丸くすると、ヒソカは自分の周囲をぐるりと見回した。ヒソカの口が少し開く。聞こえねーが、おそらく感嘆したのだろう。

ヒソカを囲むように四面と天地に念の壁あり、ヒソカを閉じ込めていた。ヒソカはトランプに周をかけると、内側から念の壁を切り付ける。念の壁は切れなかった。

ヒソカは次に、拳や足を念で強化し、念の壁を殴りつけ、蹴りつけるが、やはり何の変化もない。壁は依然、そこにある。

自分の置かれた状況に気付いたヒソカは、お手上げのポーズをとると、面白そうに何かを呟いた。それも聞こえず、これじゃ会話になんねーか、と二番目の念を解除した。

壁がなくなると、ヒソカはすぐに分析を始めた。もちろん腹話術師状態で。

「今の念の壁、中にいても念は使えるから強制的に絶にするようなものじゃない。だけど、内側からはどうやっても出られなくなるのか。外側からはどうなるんだい？ 内側からは攻撃できず、外側からはやり放題、だったら恐ろしいね」

外側からやり放題ねエ。そんな卑怯くさい技はいらないね。

「へへ。焦んなよ。説明は後だ。まずは俺の開発の成果を全部見る。三番目、次が最後だ。俺にトランプで攻撃してみ」

「次は何が出てくるんだい。楽しみだなあ」

笑いながら、再びヒソカがトランプに周をかけ、投げてきた。トランプで、と攻撃方法を指定し、ヒソカがトランプに周をかける前には既に念能力を発動していた。

俺の目の前まで来たトランプは、俺に当たることなく跳ね返る。そして、攻撃主であるヒソカを襲撃した。自分の攻撃を難なく受け止め、ヒソカはまたも分析を始めた。

「最初と同じで、キミの前に壁があつたね。でも止めるだけだった最初の壁と違って、今は攻撃が跳ね返る。その壁はボクが攻撃する前に出現した。さらにその前にユースケはボクにトランプで攻撃するように言ったね。そのあたりが制約に関係するのかな」

大当り。

それでは説明タイムといきましょう。

「まずはさっきの、おめーを閉じ込めたヤツ。あれは二番目にできた念能力だ。内側での声は外側に聞こえない。外側からの声も聞こえない。内側から外側に攻撃できねーように、外側からも内側には攻撃はできねーようになってる」

「そっついえば音が聞こえなかったっけ。ボクの声も聞こえなかっただね。これはまたいろいろと応用できそうな念能力だね。ボクを閉じ込めたみたいには敵を閉じ込めてもいいし、今みたいに自分たちを閉じ込めて密談にも使ってもいい」

お。気付いてたか。

ヒソカと会って、一番初めに発動させたのが、俺が「箱」と呼んでいるこの二番目の念能力だ。それは今もお継続している。

「箱」の能力はそれだけじゃない。この状態だと、存在感も絶並に希薄になるようなのだ。

ちなみにどうやってそれがわかったのかというと、この状態でじっとしていたら、気配に敏感なはずの鳥やウサギが普通に寄ってきたからだ。中からうらあツと脅かしても、小動物はピクリとも反応せず、何事もなかったかのようにそこに居続けた。「箱」を解除した途端、声を出してもいないのに小動物は逃げた。

もしか、姿が「箱」ン中にいたら見えなくなんのか、と思った。

だが、存在感は希薄になっても、見えなくなるわけではないらしい。「箱」の中にいたとき、ゴリラみてえな生き物がじーっと俺をみていたからな。

「箱」の状態では、声は聞こえずとも外からは見えるので、唇を読まれないよう、掌で口を隠すのを継続して、俺はヒソカに開発した念能力について話した。

「俺は「箱」って呼んでるんだが、これの制約は、円の範囲内だつてこと。閉じ込める者の名前を呼ぶこと。この二つだ」

広めに「箱」を設定しても、名前を呼んだ者以外は入れない。逆に言えば、名前のわからねーヤツには使えない。偽名の場合、それが己の名前だと認識していれば使える。

「そんで誓約が、ヒソカ以外にこの念能力を俺の口から話さないこと。話したら使えなくなる。これは今回作った3つの念能力に共通の誓約だ」

「円の範囲内、ねえ。キミの円って軽く10キロいくのに。範囲指定の意味ないよね」

ヒソカはやはり口は隠さず、内容と口の動きを変えて言った。

「ねえ。この念能力は箱って名前なの？ そのままじゃないか。センスないね。ボクがつけていい？」

センスをこき下ろされ、命名権をねだられた。

「好きにしるよ」

「じゃあ、過保護な檻“モンスターゲージ”っていうのはどうだい」

ふーん。モンスターが何を差すのか、なかなかおもしれえじゃん。

「いいぜ。今から箱改め過保護な檻“モンスターゲージ”だ」

俺は自分の念で作り上げた過保護な檻“モンスターゲージ”を見渡しながら言う。

「どうやら聞かれちゃいなかったようだ。“モンスターゲージ”が消えてねえ」

ヒソカ以外に話したら、この念能力は消えるという誓約がある。近くの念能力者たちは諜報系の念能力者ではないっつーことが。

「ねえ、キミの新しい念能力は後二つあったよね。他のはなんだい？」

目を細め、ワクワクしながらヒソカが聞いてくる。その口は相変わらず内容と口の動きが違う。

「一番目にできたのがトランプとめたやつ。俺は「ぬり壁」って呼んでる」

「ぬり壁。名前から泥臭さが漂ってるよ。キミ、ネーミングセンス本当に酷いね」

「るせえよ！とにかく！これが一番簡単だ。制約は円の範囲内ってだけ。どこでも念能力を防ぐ念の壁を作れる」

「それはまた、円の範囲が広すぎるキミにとってはかなり使い勝手のいい能力だね。じゃあそれは神出鬼没な壁“ファントムプロテク

ト”にしよう”

了解もなく勝手に名前つけやがった。好きにしゃがれ。

「最後のトランプを弾き返したのが、俺が一番欲しかった念能力だ。俺は「仕返し」って呼んでる」

「キミのネーミングセンスにはもう何も言わないよ。どうせ最後はボクが命名するし」

このヤロウ。顔は笑いながら、額に青筋が浮いたぜ。

「「仕返し」の制約は三つ。攻撃の内容がわかってること。相手の念能力の発動より前に発動すること。俺の念より弱いこと」

「なるほど。だからボクにトランプで、って攻撃方法を指定したんだね。衝撃反射“インパクトバッター”は使い勝手悪いけど、発動できれば無敵だね。キミの念より強い奴は人間にはいないもの」

「仕返し」は衝撃反射“インパクトバッター”になったらいい。

相手が念の発動動作をするよりも前にこちらがインパクトバッターを発動していなければいけない。もし発動させても、それが俺の思っていた念能力と違っていたら、攻撃をもろに食らうことになる。

自分の念能力をわざわざ教え、今からこのように攻撃しますと宣言して攻撃してくる奴はいねえ。つまり実践じゃほとんど使えねー能力ってわけだ。

それでいい。なにせこの念能力は一つのことをなすためだけに作

ったものだ。それ以外の用途は、まあ使えりやいいかな、程度のもんだ。

「今のところはこんなもんだ」

「ふーん。防御系の能力ばかりっていうのは予想外だったよ。幽助にしてはかなり地味だけどまあいいんじゃないかい。レイガンみたいな超攻撃的な念能力と、三種の神器“トライアングルトリック”みたいな無敵の防御があれば攻守そろってバランスいいかも」

ファントムプロテクト、モンスターゲージ、インパクトバッターの3つを合わせて三種の神器“トライアングルトリック”か。本当、名前つけんの好きだよな、コイツ。

「でも、まだキミの念総量にしてみたいした使用量じゃなさそうだ。キミは彼から婚約指輪がわりのプレートをもって揃ってるから、まだ時間あるだろ。また考えたら？」

「婚約指輪言っな。萎えるわ」

ククク、とヒソカが笑う。

「ところでおめー、プレートはどうした？」

「まだ物色中。そろそろ狩ろうかな」

「ならコレやるよ」

来る途中で拾った197番のプレートをヒソカに渡した。ヒソカのターゲットではないので、1点分にしかならなかったが。

「じゃあボクは後2点分狩ってくるね」

モンスターゲージを解くよう言われ、解除する。途端、ヒソカに抱き着かれた。

「プレートありがとう。愛してるよ、ユースケ」

「へいへい。プレートの礼にしちゃ熱すぎるぜ。はよ退け」

ククク、と笑いながらヒソカは離れる。

「じゃあまた新しいのができたら教えてね」

バイバイ、と手を振ってヒソカが去って行く。

俺が新しい念能力を教えている途中からだ。

あの野郎、興奮して殺気をまき始めていた。さすがに俺にかかってくるほど節操なしじゃなかったようだ。アイツに次会う奴は悲惨だな。

さて、と円を広げる。

ヒソカが離れていくと、絶中の試験官も離れて行くのがわかった。ヒソカについて去っていく気配は、試験官が3人と、気配を殺した受験生が1人。そして、おそらくゴンと思わしき完璧な絶の達人の受験生が1人。

「言っの忘れちまったな。ま、いいか」

不思議な状況だぜ、と教えてやればよかったかと思ったがやめた。だってヒソカだし、潜んでいるのはたぶんゴンだ。

そっぴゃ、俺のプレートがターゲットの奴って誰なんだろう。試験官すらも撒いちゃってるから、俺のこと見つけらんねーだろうな。ま、頑張って3点分見つけろ。その方が早いぜ。誰かわからん俺がターゲットの奴。

俺は再び、誰もいない場所を円で探しながら駆け出した。

試験終了までの間、俺は新しい念能力を見つけるよか、絶を練習し、最終日を迎えた。

絶のレベルは、まあビミョーだ。しまいにや、モンスターゲージあれば絶できなくてもいいんじゃないやね、と諦めた。

四次試験終了（前書き）

イルミがB L風味。苦手な方は1、2ページを見ないでください。
苦情等は受け付けません。

3ページ目（最後のページ）だけはB Lがありませんので跳んでください。

文字数は1200字（標準）、1倍に設定した場合です。

四次試験終了

最終日は終了の合図が聞こえないとまずいので、ゴールの近くに
来た。

円を使っていたからわかつちやいたのだ。コイツがいるってこと
は。

いずれは会わなきゃならねーんだよ。無視しちゃ通れない道なん
だから、早いとこ会っておこうじゃねーか、と思ったのだ。ここに
いるとわかつちやいたんだが、さすがにビビった。

土中から手が伸び、足首を捕まれる。

「酷いよユースケ」

「おめーはホラーかよ！」

土中からズルズル這い出て現れたのは、長い黒髪に大きな猫みた
いな目をしたイルミだった。

「なんちゅーとっから出てくんた」

「ユースケ、オレのこと避けただろ。探してたのに」
かつ飛ばし専門キャッチボール再び。しかもボールはトマトだ。

「避けてたつつーか、まあそうなんだが、おめー、何ではじめつか
らプレートくれたんだよ」

「ヒソカに聞いたんだけど、ユースケ、ヒソカに愛を囁いて抱かれたんだって？ それ、旦那としては許せないんだけど」

「だッ！？ んなわけあつかッ！！」

「まあヒソカの嘘だろうと思ってたけど」

「……わかってたんならよオ」

「プレートは贈り物。妻が欲しい物は何でもあげないと」

出たよ、時間差アタック。しかも、返事がまともであるとは限らないっつー。どうすべえ、嫁から妻に嫌なレベルアップしちゃったぞ。連れ添ってウン年みてーな。

「それに、ユースケが相手じゃとられないようにする方が面倒だしね。だったらあげた方がいいだろ」

それが本当の理由だろう。っーかそれならはじめから妻なんておぞましい単語使わずにそう言えっつーんだよ。そもそもあの「カタカタカタ」のときにそう説明しやがれ。いらん恐怖を覚えちまったじゃねーか。婚約指輪とか。

「おめーからどうやってプレートを奪うか、いろんなパターン考えてたのに逃げやがって」

精神的疲労の代償と八つ当たりを兼ねた嫌がらせをしてやろうと思ってたのに。

というのをどう変換したらそうなのか。イルミがストレートに

トマトを投げてきた。

「オレといちゃつきたかったんだ。ユースケかわいいね」

全身、鳥肌立った。

なぜそうなる！？

イルミが一步近寄る。俺は一步引く。

「ヒソカの話だと随分仲良くなったみたいだったから、ちょっと嫉妬してしまったよ。でも相変わらずユースケかわいいし、オレのこ
と好きみたいだからいいや」

鳥肌から鳥肌が出た。なんだ。今のは幻聴か？ もう一度聞き返してえが、宇宙人相手じゃ何だか聞きたくねー異星からのメッセー
ジを聞かされそうだ。

スルーしようとしたら一步近寄られ、一步引くを繰り返していたら、イルミが首を傾げた。

「何で後ろ下がってるの？」

さぁおいで、とばかりに両手を広げられた。誰か！ この宇宙人
なんとかしてくれ！

「俺はおめーみてエな宇宙人は好きじゃねーんだよ！」

他を当たれ！

必死で本音を吐いてるっつーのに宇宙人は聞きやしねー。

「あ。それ、ツンデレってヤツだろ。ミルクがモエって言ってた。でもそれはオムライスにケチャップで「スキ」って書きながらやらないと駄目らしいよ」

誰か知らんが、宇宙人に最もいらねー知識くれやがったミルク。全力で死ね。

見知らぬ相手に殺意を漲らせていると、宇宙人が促した。

「じゃあトマトとりに行こうか」

「あ？　なんでトマト？」

「だってケチャップがなくちゃ駄目だろ」

なんでコイツはケチャップをトマトから作ろうとしてるんだ。つか、何のためのケチャップだ！？

駄目だ。コイツといると何かが減っていく。再起不能になる前にそうだ逃げよう。戦っちゃいけねエ。そうしよう。

追い詰められた俺を助けるかのようにサイレンが鳴り響き、放送が流れた。

『受験生に告ぐ。ただ今から1時間を帰還時間とする。ゴールまでプレートを持って戻って来られたら四次試験合格となる。1秒でも遅れると失格になるので、速やかに戻るように』

あのパイナップルみたいな頭のリッポーの声がした。ナイス！

「ほれ、イルミ。ゴール戻るぜ。早く変装しろよ」

助かった、とイルミに声をかけると、宇宙人が小さく呟いた。

「オレたちのイチヤイチヤを邪魔するなんて。あの試験官、殺そうか」

いや待てや。俺「たち」って誰と誰を指してんだ。まさか間違ってもストーカーとその被害者みたいなこの状況の俺とイルミじゃないよな。

イルミは、俺を瞬きしないデカイ猫目で見つめながらブツブツ言い、頭に針を刺していく。美形面がゾンビみたいに変形し、終わる頃には原形はどこにもなかった。頭のとっぺんにトサカのある、角ばった面長のオッサンになった。それで、カタカタカタカとしか話せなくなった。と思いきや。

「じゃあ行こう」

普通に話しやがった。

「ちょ待て。おめー、カタカタしか言えなかったんじゃないの」

「手、つなごうか」

出たよトマト！ 俺の質問どこいった？

「つながねーよ！」

「ユースケは照れ屋なんだね」

何だこれ。異星の言葉だからこんな妙な単語が聞こえるのか。誰かこの星の言葉に翻訳してくれよ。

「もうお前カタカタだけ言ってるよ」

「この格好で話すの結構痛いんだよ」

これがカタカタしか話さなかった理由か。時間差の返答にため息が出る。

「じゃ、もう話すな」

「心配してくれるんだ。ユースケ優しいね」

どうしてそうなる！？

噛み合わない、会話のかつ飛ばしトマトキャッチボールをしながら俺たちはゴールに戻った。

ゴールと同時に、イルミもといギタラクルがすーっと離れて行った。まるで同じ方向から偶然来ただけのような自然さだった。

離れて行った理由は、キルアが片手を挙げて俺に近づいて来たからだろう。同じように俺も片手を挙げてキルアに応えながら思う。

イルミよ。弟だからって避けんでも問題ねーぞ。異様な風体のオッサンがまさか兄貴だとは思わんから。

ゴールには、ゴンもキルアもクラピカもレオリオもいた。当然のようにヒソカも。ゴールにいた受験生は、俺を含めて10人だった。随分減ったな。

キルアが来る前に、ゴールの入り口で試験官に集めたプレートを出すように指示された。そこに置かれた台に並べられるプレート。見れば、44番と405番が一緒に並んでいた。

2枚で6点ってこたあ、両方に3点の価値があるってこったな。それはつまり、自分のプレートとターゲットのプレートってことだ。ヒソカのターゲットはゴンのプレート、405番じゃない。だから、これはゴンの戦果ってわけだ。

へえ。やったなゴン。やっぱあの隠れてた絶の達人はゴンだったのかと確信を強める。

プレートを試験官に渡し終えたら、傍まで来たキルアと会話する前に、キルアの向こう側にいたゴンに近寄った。やったな、とあの変態からプレートをもぎとったという成功を喜ばうと思ったのだ。

「よ、ゴン!」

「あ、ユースケ。……ゴメン!」

突然謝られて、突然走って逃げられた。どういこうった?

俺は呆然と立ち尽くした。

その肩を、ゴンの傍にいたレオリオにポンと叩かれる。

「ゴンがあんなに避けるとは。お前何やったんだ？」

「あいつ、オレン치가暗殺一家だって知ってたって平然としてるような奴だぜ」

何やったらああなんの、と横からキルアも面白そうに言う。

「何かするもなにも、俺がゴンと顔を合わせるのは一週間ぶりだぜ。何をするっつーんだ」

その間、ゴンに会ったことは一度もねーってのに、とんだ濡れ衣だ。

「ゴンの態度から察するに、ユースケが何かをしたというより、ユースケに後ろめたいという感じがした。つまり、ユースケではなく、ゴンがユースケに何かをしたのだろう」

ゴンの背後にいたクラピカが、冷静にそう分析した。

ゴンが俺に対し、後ろめたく思う。全く心当たりねーや。

「ま、その内また戻るだろ」

ゴンのことは時が解決してくれるとした。

この時に追いかけて吐かせておけばよかったんだ。後日、ゴンがとんでもねー誤解をしていたことに悶絶することになる。

最終試験開始（前書き）

うつすらB.L臭あり。

苦手な方は見ないでください。

最終試験開始

最終試験会場へは、飛行船で移動するらしい。その間にネテロ会長と面談が行われることになった。

プレートの番号順に、一人ずつ第一応接室に呼ばれる。

「まあ座りなされ」

ツルツパゲのくせにポニーテールつつ矛盾した髪型に、眉毛、鼻下のヒゲ、顎ヒゲが異常に長い老人がネテロ会長だ。テーブルを挟んだ向こう側でちょこんとあぐらをかいて座り、こちら側の座布団を勧められた。ドスンと腰を下ろす。

「茶は出ねーの？」

「ほう。ユースケはジャポン出身なのかの？」

「ま、そんなとこ。畳に座布団があんなら、茶と茶菓子は欲しいね」

「ほっほ。なに、そんなに時間がかからないというだけじゃよ。茶はまた今度飲みにおいで」

さて、とネテロ会長が質問を始めた。

「まず、なぜハンターになりたいのかな？」

ハンターになりたい動機ねえ。

「正直なりたいわけじゃねー。なぜか試験会場にいて、成り行きでここにいるだけだからな」

「まあそうじゃろうな。願書出してないしの」

願書？ そんなもん出す必要あったのか？

キョトンと目を瞬かせる。ネテロ会長は気にした様子もなく、筆で光る額をかいた。

「ならば質問を変えよう。もしハンターになつたらどうする？」

「ハンターになってやることはわかんねーが、試験が終わってやることは決まってる。クモっつー盗賊を潰す」

クラピカについて行くと決めたからな。ホントはあの念能力を手にしたわけだから、魔界に帰ろうと思えば帰れそうなんだが、クラピカについて行くから帰るのは後回しだ。

「ふむ。クモ、幻影旅団か。何故じゃ？」

「俺にや理由はねー。ダチが潰すっつーから勝手についてくだけだ。相手は人数が多いみてえだからな」

せっかく出会ったダチなんだ。放つとけねーだろ。

ネテロ会長は、そうか、と相槌を打つと次の質問をした。

「受験生の中で注目している者と、戦いたくない者は誰じゃ？」

注目しているのと、戦いたくないの、ねえ。考えるまでもなく、頭にパツと浮かんだ注目している奴を答えた。

「ゴンだ。405番。ありや大物になるぜ!」

これまでのゴンの言動を思うと、実に先が楽しみになる。……今は避けられてるけどな。

「ほう。では戦いたくない者は?」

「いねー。誰と戦ってもいいぜ」

ヒソカ(変態)やイルミ(宇宙人)と戦うときゃ、これまでにおめーらから受けた精神疲労を全部ぶつけてやるぜ。

ネテロ会長は筆でサラサラと何かを書き込んでいた。

「よし。もう帰っていいぞ」

目を細めると追い出された。

部屋の外に出て、笑ってしまった。

食えねーじじいだぜ。隙だらけだ。なのに、戦意そのものが起きないようにされている。そういう念なのかなんのかわからねーが。

ネテロのじーさんと、幻海のばーさんを対面させたら面白かったろうな。ニヤニヤしながら俺は戻った。

面白い結果だったのう。

1番、ユースケはゴンを注目し、戦いたくない者はいない。

44番、ヒソカはユースケ、キルアを注目し、ゴンと戦いたくない。

53番、ポックルはクラピカに注目し、ヒソカと戦いたくない。

99番、キルアはゴンを注目し、ポックルと戦いたくない。

191番、ボドロはヒソカを注目し、キルア、ゴンと戦いたくない。
298番、ハンゾーはヒソカとユースケを注目し、同時に戦いたくない。

301番、ギタラクルはキルアに注目し、ユースケとヒソカとは戦いたくない。

403番、レオリオはゴンに注目し、同時にゴンと戦いたくない。

404番、クラピカはゴンとヒソカに注目し、戦いたくない者はいない。

405番、 gon はヒソカ、ユースケを注目し、キルア、クラピカ、レオリオ、ユースケとは戦いたくない。

けっこう固まったものじゃ。

面談を参考に名前を書き入れた。

「よし」

筆を置く。そこにはトーナメント表ができていた。

「さて、どうなるかのう」

最終試験は、委員会が運営しているホテルで行われる。

バレーボールコートが4面くらいとれそうな広くて天井の高い部屋に呼ばれた。一見体育館風だが、部屋の床は30センチ四方の板が敷き詰められている。小学校の教室がこんなだったな。

緊張した面持ちの者、平然とした者、それぞれが、試験内容が発表されるのを待った。

ネテロ会長がやって来た。発表された試験内容は、逆トーナメントという一風変わったものだった。一度勝ったら合格、負けたら上に上がる。一勝もできなかった奴が不合格だ。武器オツケー、反則なし。勝敗は、どちらかがまいったと言うまで。殺しちゃいけねー。瞬殺はねーけど、それって、実力が違いすぎる奴と戦ったら拷問

みたくならねーか？ 単純に見えて、実はエグイ。蔵馬が得意だな、こういうの。

「トーナメント表は、これまでの成績を参考に作成した」

そう断りを入れ、ネテロ会長の指示により、模造紙サイズのトーナメント表が広げられた。

第一試合、ユースケVSゴン。

俺とゴンが一番試合数が多い。へえ。俺、成績よかったんか。

続いて試合数が多いのがツルツパゲもといハンゾー、ヒソカ、クラピカとなる。

だが、単純な成績だけじゃないようだ。それならゴンより、問題ありすぎだがヒソカやイルミのが上にくるだろう。

変態と宇宙人はその結果を気にしないが、キルアはそうじゃないかった。

「これ、どういう採点基準なのか教えてよ」

ゴンより下なんて馬鹿な、という負けず嫌いのジェラシービンビンにキルアがネテロ会長へ食いかかった。

ネテロ会長の説明によると、審査は身体能力値、精神能力値、印象値の3つで行われたようだ。その中で最も重要なのが印象値で、これはハンターとしての資質評価になる。

それを聞き、キルアは黙った。

成績はそこまで高くないだろうゴンがトップにいる。つまり、ゴンのハンターとしての資質はこの中で一番だと判断されたのだろう。

まあゴンはハンターになりたいって言っていたし、ゴンがハンターに向いていると判断されるのは嬉しいんだが。俺も？ ハンターってのは、俺みたいな魔族でもいいのか？ ということっちゃ。

「では、第一試合を始める。ユースケ、ゴン、前へ」

審判は、黒服サングラスのオッサン試験官がやるらしい。俺とゴンが部屋の真ん中に向かう。

ゴンは相変わらず目を合わせない。なんなんだよ。そろそろキレっぞコラ。部屋の真ん中につき、向かい合ったゴンに俺は話しかけた。

「ゴン、顔上げろよ」

おずおずとゴンの顔が上がる。

「おめー、ずっと俺んこと避けてっけど、いい加減にしろや。言いたいことがあんらはつきり言え。タマあんだろが」

ゴンは気まずそうに俺を見て、次いでヒソカを見た。あ？ ヒソカ？

ゴンは言った。

「オレ、見ちゃったんだ」

何を、と聞こうとして、ふと聞いたら後悔しそうな不安を覚えた。

「ちょ」

待て。

「ごめん、オレ、ユースケとヒソカが恋人同士って知らなくて、ヒソカからプレートとっちゃった。ごめんなさい！」

ゴンは一気にそう言い、ガバツと頭を下げた。間に合わなかったか……。

一瞬の間。叫び声が響いた。

「ぎよええええッ！ ユースケ、お前そついう趣味だったのか！？」

レオリオが目を剥いた。

「うわぁ。同性愛なのはまあいいけど、相手がヒソカってのはどうかと思うよ」

キルアが面白そうに口元を緩め、可哀相なイキモノを見る眼差しを俺に向ける。隣の家の奥さんの噂話をするオバハンの眼だぜコノヤロー。

「二人ともやめないか。例えユースケが薄気味悪い変態が好みで猟奇的な性嗜好であろうと、それとユースケの人格にはなんら関係ないだろう」

いや待て。そんな趣味嗜好の奴アぜってー人格にも影響あんべ。たとえ関係なくてもそれ知ったらマジ引くだろ。つーかクラピカ、お前が一番エグイよ。ひでーよ。

そこでニヤニヤと変態がいらんことを言い放つ。

「いやいや、ばれちゃったネ」

「肯定すんな！ 嘘だ嘘！ ありえねーから！」

見渡した周囲は、誰ひとり信じちゃいなかった。

「カタ……カタカタカタ」

必死で否定してんのに、宇宙人はヒソカと俺に殺気を向けてくる。妻に浮気された夫みたいな態度はやめれ。何だよこの状況。ひでー疲労のまま、ゴンに問い掛けた。

「なあ、ゴン。何だっておめーはそんな身の毛がよだつ勘違いしちまったんだ？」

俺が否定しているのに、ゴンはまだ信じていないらしい。もじもじと言葉を返してきた。

「四次試験中、オレ、気配を消してヒソカをずっと追ってたんだ。そしたら三日目にユースケ来たでしょ。そのとき、ユースケは後ろ向いてたからわからなかったんだけど、ヒソカの口だけ見えたんだ。唇を読んだら」

先が見えた。ああ、やっぱりあの完璧な絶はお前だったのか。しかも唇読むなんて芸当までできたのね。それってアレだろ。モンスターケージの中で、ヒソカが腹話術やってたアレ。口の動きと内容が違うアレ。声が、遅れて、聞こえてくるよ、なアレだろ。

「ユースケ愛してるよ、キミもかい、相思相愛だね、って。その後ハグしてたし」

血管キレた。

「ヒソカアツ！ おめーぶっ殺ス！！」

「本当かい？ 痛いんだろうなあ。ああ滾っちゃうよ」

変態の膨張した股間を見て我に返った。やべえ。これじゃそういうプレイだと思われる。へへ……、皆の視線が冷てえや。

ヒソカを無視し、ゴンに視線を戻した。

「とにかく。俺とヒソカはそういう関係じゃねーよ。あえて言うなら利害の一致した関係だ。そんなことよか、ヒソカからプレート取ったんだろ。やったじゃねーか」

なんとか話を戻すと、ゴンはちらりと俺の顔をうかがい、やっと俺が本心で言っていると納得したようだ。

「うん。その後はすっごくオレ情けなかったんだけど、プレートを取ったときは会心の一撃だったんだ」

「そっか。さすがゴン」

ニツと笑うと、ゴンも同じ笑いを返した。

会場の気配はとんでもねー疑惑のせいで未だギスギスしてやがるが、気にしねー。ハンター試験が終わったらここにいるだいたいの奴らとは無関係だから気にしねー。

「よし、戦うか！」

「うん！」

ゴンの明るい声だけが癒した。

幽助VSゴッソ(前書き)

BL臭あり。

苦手な方は見ないでください。

幽助VSゴン

さて、いざ戦うとなると、戦い方に困る。ゴンは俺と格闘する気満々みてえだが、下手に組み合わせると殺しちまうもんなあ。

うむ、と考え、思い浮かんだ。

俺達の間立ち、審判役をする黒服の試験官に話しかける。

「なあ、試合形式は何でもいいのか？」

「はい。対戦者に一任いたします」

サングラスで表情のわからない試験官がそう答えた。そうか。ならアレでいこう。

「ゴン、試合方法は俺が決めるぜ」

キョトンとした後、ゴンが頷く。

体格や腕力に差があってもある程度は戦える方法。

「試合方法は、手押し相撲だ」

「手押しズモウ？ それって何なの？」

ゴンは知らないらしく、不思議そうに首を傾げた。他の受験生や試験官たちも知らないらしい。唯一、ハンゾーだけは知識があったのか、ほう、と反応した。

百聞は一見に如かず。俺はゴンにその場に立って動かないよう指示を出した。

「足は肩幅に開く。んで俺もおめーも腕が互いの体に届く位置で立つ。相手を腕で押して、その場から足が少しでも動いた方が負け。そんだけ」

「わかった！ おもしろそう！」

簡単なルールに、ゴンが眼をキラキラさせる。でもな、ゴン。簡単なんだが、単純じゃねーんだぜ。

「試しにやってみようぜ」

ゴンと向かい合い、足を開いて立つ。周囲は興味深そうに俺たちを見て、試験官はルールを見極めようと真剣な眼差しを向けていた。

「はじめ、の合図で腕や体を押す」

手を伸ばしたら、ゴンも俺に手を伸ばし、手の平がぶつかり、指が組み合う。

「このまま押してもいいし」

「わわっ」

ゴンが後ろに倒れそうになるが、絶妙なバランス感覚で元に戻る。ふう、とゴンは息を吐くが、間を開けず次の攻撃を示した。

「押すだけじゃねーぞ。次、押してみ」

ゴンに両手を向け、押すよう告げると、頷いたゴンが俺の手を思い切り押してきた。

にやりと笑い、俺は手を後ろに引いた。

「えええええッ!？」

勢いが良すぎて止まれなかったゴンが、俺に倒れてくる。その足は大きく一歩前進だ。

「こんな風にスカシもありだ。ルールわかったか？」

尋ねると、ゴンは真剣な顔で頷いた。単純に押すだけのゲームじゃないと気付いたようだ。

「よし。じゃあ審判頼むぜ」

見ていた黒服の試験官に要求すると、彼は一つ頷いて俺とゴンの横に立ち、質問してきた。

「試合は1回勝負でよろしいですか？」

「いや、ゴンは初めてだし、3回勝負で、1回でもゴンが勝ったらゴンの勝ち。でどうだ？」

ゴンに向けて問い掛けると、でも、と口を濁す。

「それじゃオレずるくない？」

はは。こいつめ、俺から2本も取れる気でいんのかよ。にやっと笑って言ってやった。

「ずるくねーよ。言つとくが、10回やっても1本も取れない可能性が高えべ」

「う。そんなに？」

「おうよ」

がくつと落ち込みながら頷くゴン。ま、おめーは5年後の逸材だからな。今ならそんなもんだ。

本当は何回勝負でもいいんだが、ここはあえて3回勝負だ。たった3回だが、ゴンならその中で何らかの可能性を見せる。そう期待させるものがある。

「では手押しズモウ3本勝負、ゴン選手は1勝で勝ち、ということよろしいでしょうか」

審判の確認に二人で頷いた。

「それでは、レディ」

審判の合図で向かい合う。自然な構えをとる。数瞬の間。合図が出る。

「ファイツ」

すぐに組み合わず、お互いに手を出したり、出された手を弾いたり、牽制が続く。一丁ここで仕掛けるか。

スウツと息を吸う。ゴンが身構えた。直後。

「ウラアアアッ」

気合いの叫びとともに、ゴンを押す。

という仕種をした。

押す仕種のみで実際には押していない。押す直前で止まった。だが。

にやっと笑う。

「まずは俺の一勝」

はっとするゴン。

気合いで圧されたゴンの足は、自然と一步後ろに下がっていたのだ。ゴンの額を、冷や汗らしきものが流れた。

「……さわられてもいないのに……っ」

悔しそくに拳を握るゴン。まあここは修羅場の差つつーもんだな。

場外からはゴンに向けて声援が送られる。

「気にすんなゴン！ 今のは俺もちびった！」

レオリオ。おめー、そりやかなりの問題発言だ。おめーのパンツ濡れてんのかい。声援のつもりかもしれないが、言われたゴンが落ち込んでるし。レオリオと一緒にあ。てめ、そりやどういこうった！？　なんてやり取りがおかしい。

「うわあ大人げないなー、ユースケ。やっぱ見た目と中身って連動してんのかな」

にやにやと笑いながらキルアがコメントする。その無神経な失礼発言。あのガキヤ、やっぱあの宇宙人の弟だわ。こりやあとで一発身の程つつーものを思い知らせてやらんとな。

「1対0、ユースケ選手！」

審判が判定を叫んだ。

「くっそー」

ゴンは悔しそうに呻くと、何かを思い浮かんだのか、よしっ、と気合いを入れて構えた。俺も同様に構える。

「さて、どんな作戦だ？」

「教えない！」

「ケチ」

と言いつつ、ま、そら教えるわきゃないよなと思う。

再び緊張感が高まり、審判がコールを始めた。

「それでは、2戦目」

ゴンから感じる緊張感が最高に高まる。そして。

「レディ、ファイツ」

合図と同時にゴンが突っ込んできた。へえ。全力戦法か。

「そーいうの、大好きだぜ」

ドン、とゴンが俺の胸を押した。腕で防いだりなんかしねー。ノ
ーガードだ。

ゴンの力は、普通の人間ならどんな野郎でも、それこそ関取でも
動くような押しの一手法だった。ガキのくせになんつー力してやがん
だ。が、相手は俺だ。

「……………ぐっ……………うつ」

ゴンの額に、腕に、脚に、青筋がくつきり浮き出る。全身全霊の
力を込めているのがわかる呻き。

でも、その程度じゃ俺は動かねーぞ。いっちゃん最初に死んだ頃
の俺だったら吹っ飛んでるだろうが。ま、力じゃ勝てねーってのを
教えてやっか。

ゴンに押されるまま、ググっと体をスローモーションで後ろに反
らして行く。押されて曲がっているのではない、妙な俺の動きを疑

問に感じたのだろうゴンが、ちらりと俺を見た。視線が合い、にやりと笑いかける。ぎよっと目を見張るゴン。

だが、ゴンは勢いを緩めることなく俺を押した。俺の体は後ろに反れ続け、もはやブリッジの頭がついていないような体勢だ。その上にゴンが覆いかぶさっている状態になっている。

ゴンは変わらず俺を上から押している。だが、俺はブリッジの状態になっているのに、先程までは少しずつ後ろに反れていたものが、その体勢のままぴたりとも動かなくなつた。

ゴンの額から、ぼたりと汗が俺の胸に落ちた。

「……ヤロー、膝の力だけでゴンの力を受けてやがる」

「柔軟、バランス、足腰の強さ、どれをとってもゴンより上だ。力ではゴンに勝ち目はない。……そう体で示しているのだろう」

レオリオの呟きにクラピカがそう分析した。ま、そーいうこつた。ちなみに俺の柔軟性は、魔族の親父の部下、北神に鍛えられた。柔軟の壁を軽く越えた、あの餅みてえなヤローだ。さすがに餅にやなれなかったが、かなり柔らかくなるよう鍛えられた。

「……あんな体勢になつても堪えられるとかありえねえよ。ユースケ、マジ人間じゃないよな。ていうかマジ大人気ないよな」

呆れたように呟くキルア。しっかり俺の耳に届いている。

キルア、てめーあとでかます。数々の不良どもを葬り去った必殺技、デコピンかましたる。

さて。俺の上で汗みずくになつて奮闘しているゴン。その胸に片手をやると、ひょいと放り投げた。柔道の巴投げの感じだ。

「ぐびゃ」

途中で体勢を変えることなく、そのままゴンは床に落ちた。おー。痛そうだな。

「2戦目、ユースケ選手！」

審判が俺の勝利を告げた。

1回戦の相手は、ユースケだった。勝負の方法は手押しズモウつてやつ。ユースケからルールを聞くとおもしろそうだったから賛成した。

でも、おもしろいけど結構複雑だ。相手のタイミングをずらして、っていうのが難しい。何せ相手がユースケなんだもん。

1戦目はユースケの気迫に負けた。やっぱりユースケはすごい。一瞬だけだったけど、ヒソカの殺気より怖かった。気づいたら後ずさりしてた。超くやしい！

2戦目は力で真っ向勝負を仕掛けてみた。力には結構自信あるか

ら。ていつか全力で押さないとユースケには勝てない。でも全力で押したときにすかされたら確実にアウトだよな。

なら、すかされない部分、胸を押したらいい。

胸を狙って押したら、ユースケはノーガードだった。くそ、舐められてるな。

でも舐めるだけのことはある。どんなに全力で押してもユースケはびくともしない。それどころか、脚だけの力でオレの全力をいなされた。あっさり投げ飛ばされておしまい。

しかも片手だったし。綿でも投げるかのような感じだった。魔王つてすごい。

次が最後だ。真っ向から力の勝負は勝ち目がない。

どうしたらいい？

どうしたら勝てる？

どうしたらタイミングをずらせる？

どうしたら足をずらせる？

頭を必死で回転させていたら、ユースケが言った。

「このままじゃあっさり終わっちまうな。よし。んじゃ俺は次、片足だけでやる。しかも爪先立ちだ」

それは、受けちゃいけない。そう思った。

「やだ」

片足、爪先立ちの勝負を投げ掛けたら、ゴンが拒否った。てめー。

「んなこと言っただけよ、このままじゃおめーどうやったってまともな勝負にならねーぞ」

「でもやだ」

仕方ねえガキだな。ま、こんな場面じゃ俺もそう言うか。

「おい、ゴン！ 意地張ってる場合じゃねえぞ！ せっかくハンデくれるつつてんだからもらっとけ！」

レオリオがゴンにアドバイスする。でもゴンは首を縦に振らなかった。

ゴンはまっすぐに俺を見て、静かに告げた。

「親父に会いに行くんだ。自分の力で何もできずに、ここでユース

ケにもらうがままにハンデもらって勝って、それじゃハンターになれても、オレは親父に一生会えない気がする。うつん、会いに行けない」

ふん。いい目じゃねーか。心に切り込む目だ。濁った心でも、この目に入り込まれたら清浄化されちまう。こんな目をもっている奴はそうそういねー。こいつの目は武器だな。

「ふーん。片足、爪先立ちの俺に簡単に勝てると思ってる当たり自信家だよな、おめー」

ガン、とショックを受けるゴン。

「え。まだそんなに力の差あるの？」

「おうよ。俺ア爪の先だけでもおめーに軽く勝てるぜ」

「う」

「ハンデ受け取っとけよ」

「やだ！　いらない。自分でなんとかする！」

頑として拒否するゴン。それならそれでいいぜ。

「ま、いつか。そんじゃ、3戦目いくぜ」

「うつん！」

再び、切れた緊張感が高まり出した。

「それでは3戦目、レディ」

ゴンの目に、力強い光が宿る。何やら作戦を見つけたか。

「ファイツ！」

合図と同時に、もしかしてもゴンは突っ込んできた。おいおいおい、さっきと一緒じゃねーか。

先程と同じようにノーガードの俺の胸に手をつく。思ったたら、ゴンが視界から消えた。

すぐにしゃがんだのだと気づいたが、そのときには、ゴンは次の行動に出ていた。

ゴッ

硬い音がした。何があったかは全て見ていたのでわかっている。防ごうと思えば防げたがしなかった。これは、ゴンの作戦勝ちだ。

「……足、ずれたよね」

ゴンが沸き上がる喜色のままに言う。

俺の片足の下にあった30センチ四方の床板が、粉々に割れていた。

あの一瞬に、ゴンは瓦割りの要領で、俺の足の下にあった床板を一枚割ったのだ。

足は動いちゃいないが、床自体が移動した。

「おう。ずれたな。俺の負けだ」

まずは2戦目のときと同じように全力で押すと見せかけ、タイミングをずらした。

さらに、足をずらせねーなら、床をずらしちまえっつーとんでもねー発想の一発だ。

はは。こりゃ一本取られたわ。

「第一回戦勝者、ゴン選手！」

判定に、オオオオオツ、と歓声が上がった。

「勝った！ ギンが勝ちやがった！」

「うむ。めちゃくちゃといえはそうだが、常人にはできない発想だ。実にギンらしい」

レオリオが万歳三唱とかいうウザい真似をしゃがり、クラピカが口許を緩める。何はともあれ。

「ギン、ハンターおめつとさん」

にっと笑いかけると、ギンは満面になる。

「ありがとう！」

さらにゴンは続けた。俺の耳元に口を寄せ、小さく、それはそれは申し訳なさそうに囁いた。

「……オレ、ヒソカに謝った方がいいかな？」

それは何か。俺とヒソカの仲がアレだから勝っちゃまって申し訳ねーとかなんだとかつーありえねー妄想か。

無言で肘鉄を脳天に落とした。

「へぶっ」

床に転がりピクピクしているゴン。よし、完全に沈黙させた。もうおめーはしゃべんなや。

「ゴ、ゴン！？」

「しっかりしろ、ゴン！」

「ひでえ！ 負けたからってユースケ、マジで大人気ないよ！」

レオリオたちが気を失ったゴンに駆け寄り、口々にゴンを心配する。それでキルア。

「な、何だよ、ユースケ」

ずんずん近寄る俺に、キルアが怯えた様子で後ずさる。

「おめーはさっきからよ、大人気ねーだのなんだのと。つーわけで

泣かす。泣け」

「え、あ、え？」

額に一撃。

「イ……ッッッ」

デコピンの一撃で後ろに倒れ、床にゴロゴロと転がって涙ぐみながら悶絶するキルア。ふん、頭がもげねー程度に手加減はしてやっただぜ。

「ヒイ！ 大丈夫かキルア！」

「しつかりしろ、傷は浅いはずだ！」

「もげるッ、頭もげるッ！ オレ頭ある？」

「おう！ ある！ ちゃんとあるぜ！ しつかりしろオ！」

はん。こんなもんでるっせー奴らだぜ。

それにしても。

キルアにデコピンしたときに気づいた。キルアの頭にあるアレは何だ？

キルアは自分のことなのに気付いちゃいねーみてえだが、アレの形状から犯人はわかる。何のためなのかはわからねーが。

俺にや関係ねーか、と向きを変えて壁側に向かうと、ふとイルミ、
もといギタラクルから強い視線を感じた。何か言いたいらしい。何
だよ、弟やっちまったから文句でもあるってか。

ギタラクルが指先を上げる。普通の奴が行きなりあんな仕草した
ら電波を疑われるが、奴は見た目が既に電波だからなんの問題もな
い。

ギタラクルの指先から、念による文字が書かれていく。読めねっ
つの。本人には話し掛けるなど言われているので、ヒソカに近寄り
聞いてみる。アレ、なんて書いてあんだ、と。

ヒソカはニツコリ笑って答えた。

「奥さんと弟の触れ合いっていいね、だつてさ」

奥さん……！？

また、進化した。頭痛エ。聞くんじゃなかった。

「相変わらず彼つてば電波だよね。だいたいキミはボクのお」

「黙つとけ」

ヒソカの顔を掴んで後頭部を壁に打ち付けた。殺気が飛んで来
るのはギタラクルか。いちゃついてねーよ。つか悦ぶなヒソカ。周
囲がドン引きすつた。

気絶したゴンと悶絶のキルアは医務室に、様々な感情を会場に残
し、1回戦は終わった。

幽助VSハンゾー（前書き）

BL臭がかります。苦手な方は見ないでください。

幽助VSハンゾー

ハンターになるための最終試験で、オレの初戦の相手はゴンという少年に手押し相撲で負けたユースケという、こちらも少年だ。おそらく、自分より3つか4つ年下だろう。

先程の第一試合、ゴンは見事という他ない戦いを見せた。諦めない強靱な精神と、窮地を脱する発想。もう少し年月を重ねたら、身体能力も伸びて間違いなく大化けするだろう。

それより。ゴンと戦ったこのユースケという少年は一体何なんだ。

初めの、ゴンを気圧したあの気迫。任務で数々の忍者や侍と死闘をしてきたが、あんな強烈で戦慄すら覚える気迫を受けたことは一度もない。

いや、かつて里長が敵対する実力伯仲の忍と戦った際、命を賭した最期に一度だけ見たことがあったか。それほどのものを、たかだか10数年生きただけの子供にできるなど信じ難かった。

ゴンの全力の体当たりを完全に防ぎきった体の柔軟さ、強靱さも信じ難かった。ゴンのあの体当たりは、かなりの強さだったと離れていてもわかった。まともに食らったら、オレのような上忍でさえ足を動かされるだろうに。

気迫もすごいし体の強靱さと柔軟性もすごいんだが、そんなことより何より絶叫したいことがある。

あのヒソカの恋人だと!?

これが一番異常だろう!

あの変態快樂殺人狂とどうやらヤバイプレイで愉しんでるらしく、しかもユースケの方が女お…、いやサディス…ゴホン、虐めちゃってる方らしい。

あのヒソカを!

そういえば三次試験じゃ見るからにヤバイギタラクルってオッサンとも仲よくしてやがった。どんだけヤバイんだあのガキ!

向かい合うと態度はでけエがあどけない顔した少年なのに、なんて恐ろしい奴だ。コイツに危害加えたら背後が怖すぎるじゃねエか。

試合自体の勝算はある。体幹の強さや尋常じゃない気迫の持ち主ではあれど、ユースケは無手だ。武器を使った戦いならオレの方が強い。ここは怪我をさせずになんとか降伏してもらおう。

このとき、オレは奴の強さを見誤っていた。まだ、奴は実力のかけらも出しちゃいなかったのに。

オレは口を開いた。

2回戦は、負け上がった俺とツルツパゲ忍者ハンゾーとの試合になった。名前を呼ばれ、俺とハンゾーが向き合う。

審判が開始をコールする前、試合方法を決する前に、ハンゾーは俺に言った。

「オレは忍者だ」

瞬きをした。あ？ 見たまんまじゃねーか。その格好でサラリーマンって言われる方が驚きだぜ。

「忍法という特殊技術を身につけるため、生まれたときから様々な厳しい訓練を課されてきた。以来18年、休むことなく肉体を鍛え、技を磨いてきた。人を殺した数も相当になる」

ハンゾーは片手のみの逆立ちから、人差し指一本の逆立ちに変えて見せた。

厳しい訓練、ねえ。そういやその指先一本で逆立ちするのは昔、ばーさんの修行でやったな。

針の先に指一本で逆立ちして何日もそのままだよー。最終的にはあのまんま眠れるようになったな。

「んで。どうしてーんだ？」

まさか逆立ちを自慢したいだけじゃねーよな。そう思って問う。

「降参してくれ」

「やだ」

即答した。いや、その思考の流れがわからねーよ。

ハンゾーはため息をついて起き上がると、腕に沿って服の中に隠していた刀をスツと引き出した。

「わかりやすく言おう。オレはこのように全身に武器を隠し持っている。」

お前は見たところ体術に自信があるようだが、この試合は武器有りだ。

多種の武器の扱いに長けたオレと無手のお前とでは、オレに分がある。

脚を切り落とそうか。

それとも腕を切り落とそうか。

そうなればお前はもう戦えない。

そうなる前にまいったと言ってくれ。

お前がまいったと言ってくればそうせずに済む」

キョトンとなる。

あ？　なんだつまりコイツはアレか。俺より自分の強いから降参しろって言ってるのか。

いやまあ確かにばーさんに会う前の俺だったら脚だの手だの切られてるだろう。が。俺、そんなに弱く見えるのか？

さあ言え、と迫るハンゾー。まあ待てと宥め、ある試合形式を提案する。

「よし、わかった。試合形式はこうしよう。忍者つてのは巻物だとかを敵から奪ってくるスパイ集団だろ」

「間違いではない」

ハンゾーが頷く。俺が考える試合形式を聞くだけ聞いてくれるらしい。

「ある物を誰かに持っていてもらう。お前はそれをもらい、ネテロ会長に渡せたらお前の勝ち。途中で俺が妨害し、ある物をお前から奪えたら俺の勝ち」

「ふむ。何を使ってもいいんだな？」

「おう。殺すつもりでやれよ」

「よし、いいだろう」

ハンゾーが乗った。自分の得意分野なんだ、当たり前か。それだとハンゾーが聞いてくる。

「ある物と持ち主は誰にする？」

それは決めてある。俺はくるつと振り返ると、ヒソカに声をかけ

た。

「おーい、ヒソカ。おめーのトランプ貸してくれよ」

「いいよ」

にっこり了承。

「んでヒソカ、おめーが持ってたハンゾーに手渡しな」

「まかせて」

グツと親指を立てるヒソカ。そんな会話を済ませてハンゾーを振り返ると、ハンゾーは目と鼻と口、穴という穴を開けて固まっていた。

「どうしたよお前」

「……ひ、ひひひひひ」

いきなり笑い出した。大丈夫かコイツ。

ハンゾーは瞬時に俺の首をホールドし、耳元でこっそり叫んだ。つか叫んだらこっそりの意味ねーべ。

「おおお前なッ！　いくら恋人だからってあんな変態快樂殺人狂をマネキン代わりに使って、しかも凶器を借りてくるとかねーだろッ！　別の意味で18禁借り物競争になっちまうだろッ！」

とりあえず、認めらんねーところがあつたから一発殴って沈めて

おいた。

「誰が誰の恋人だ？ ああ？」

「す、すまん女王さ…じゃないユースケ」

「何か言ったか？」

「いや、何も」

尻をついた状態で首をブンブン横に振るハンゾー。

「ふん。なら始めつぞ。おめーがヒソカからトランプを受け取ったら試合開始だ。それでいいか審判」

サングラスの審判がはい、と頷いた。

「ほら、とつととヒソカんとこ行けよ」

腕を組んで顎先で促すと、カチンコチンのハンゾーが一步一步ヒソカに近寄る。おお。手と脚が一緒だ。ツルツパゲの頭から、滝のような汗が流れる。

もう少しでヒソカからトランプを受け取れる位置までハンゾーが行ったとき。

「ねえ」

ヒソカに声をかけられ、ピタリを越えて、カチンと固まるハンゾー。あいつおもしろいな。

ヒソカは三枚のトランプを片手で広げ、それはそれは愉しそうに言った。

「よく切り落とせるのと、よく削れるのと、よく切り刻めるの、どれがいいかい？」

そら、目的語は人間を、か。

ハンゾーが風のように俺の前に戻り、血走った目で叫んだ。

「もつ、モノがトランプなのは妥協しよう！　だが！　公平をきすために、ヒソカではなく審判にトランプを持ってもらうことを要求する！　切実に！」

「あー。好きにしろ」

というわけで仕切り直しになった。

部屋の端で審判からハンゾーがトランプを受け取る。

ハンゾーは顔だけ俺に向け、身体でトランプを受け取ることを隠した。

こうやって死角を作ること、俺にどこへトランプをしまったのが見せないようにしたようだ。

俺に向き直ったときにはもうトランプはなかった。

おそらくは懷に隠したのだろうが、懷の左右どちらに入れたのかわからないし、もしかしたら別の場所に入れたのかもしれない。

場所がわからないなら掠め取るのは難しい、というわけだ。

「一つ確認だ」

ハンゾーが問う。なんだ、と促した。

「この試合は、トランプを会長に渡せばオレの勝ちなんだな」

ああ、と頷いて応えた。

「殺してはいけないというルールに準じると、それはつまり、オレが会長にトランプを渡した時点でお前に息さえあればいい。そういうことでいいのだな？」

「もちろん。脚でも腕でも切り落としたきゃ落とせよ。虫の息でもおめーがトランプ渡すまで俺が生きてりゃ、ちゃんとまいったって言ってやるからおめーの勝ちだ」

ハンゾーが会長にトランプを渡し、俺がまいったと言った後に死んでも勝ちハハンゾー。

ネテロ会長に確認を取ったら「ま、よからう」と許可が出た。

向き合ったハンゾーがもう一度、と口を開く。

「最後に確認する。降参しないか？」

「しないね。早くこいよツルツパゲ」

「…いいだろう。どんな結果になっても後悔するなよ！」

「しねーよ。早く来な」

「……いざ」

スツと腰を落とし、構えるハンゾー。

この試合で、ハンゾーは体育館並に広いこの部屋の端から、反対側の端にいるネテロ会長にトランプを届ける。

さて、どう仕掛けてくるんだ。忍者の攻撃なんて受けるのは初めてだ。どんなものが出てくるのか、なかなか楽しみなんだな。

ハンゾーが俺に向かって駆けてきた。人間にしちゃ、なかなかの速さだ。だが、魔族の俺にとっちゃそう速くはない。

ハンゾーが服の袖から何か丸いものを瞬時に取り出し、手の中に入れたのはつきり見えた。

反対の手にも、何やら仕掛をしているらしい。指に極細の糸が巻かれている。

投げるといふ予備動作なしに、指の力だけでハンゾーが丸い玉を投げつけた。

結構な距離があつたのに、それは逸れることなく俺の足元に落ち、直後、ブワッと白い粉が広がる。

煙幕か。

蔵馬との戦いで白い粉が広がったら、それはちょっとした恐怖を味わう。

あいつが妖狐になるだけならいいが、あの野郎、白煙に紛れてどぎつい植物の種を蒔いたりするからな。肉体操作やらあまり大きな声じゃ言えねーやべエ薬やら、腹黒いことこの上ねー。

そんなときや勝負なんざ投げ出して全力で逃げる。俺の逃亡は、本気の蔵馬とやり合えるってんでたいてい飛影が助けてくれたりするわけだ。

白煙でも、その点ハンゾーは安心だ。どうやら視界をただ塞ぐだけらしい。

だが、おめーの靈気っつーかこっちじゃ念っつーのか、それが丸わかりなんだよな。

だから、俺に向かつて突っ込んできたハンゾーが、寸前で俺から離れ、もう片方の手で何かをばらまいて通り抜けたのが見えなくてもわかった。

ばらまかれたのはトゲトゲの玉。どうやら足止めの撒き菱らしい。なるほど、あの指に巻かれていた糸を引っ張ると撒き菱がばらまけるのか。

しかし撒き菱ねえ。本来は追跡されるときに痛くて走ってついて来られねーようにっつー時間稼ぎの道具のはずなんだが、俺ア踏んでも痛くねーんだよなあ。

白煙の中気配を絶ち、撒き菱を普通に踏みながら通り抜ける。自然に足の裏に妖気を集めているから痛くない。

そして、ハンゾーが部屋の真ん中に行く前に先回りし、正面に立って道を塞いだ。

霞のように現れた俺に、ハンゾーは目を見開いた。相当驚いている。

「なっ！ お前、どうやってオレの前に！？」

「走った」

それ以外ねーべ。にやっとなつて言うと、ハンゾーもニヤリと引き攣った笑みを返す。

立ち止まらずにハンゾーは仕込み刀で俺に切り掛かってきた。

刀を軽々避けるが、さらなる攻撃が襲って来る。仕込み刀と反対側の手から、手裏剣がいくつも飛んできたのだ。

左右の手から手品みてエに攻撃が繰り出される。おもしれー。

手裏剣を避けると同時に回し蹴りを放つと、ハンゾーの腹に直撃した。

奴の身体が後ろに吹き飛ぶ。

飛びながらも、ハンゾーはまたもや何やら丸い玉を投げてきた。
また煙幕か。

だが違った。丸い玉には導火線があり、点火されている。

爆弾か！

丸い玉は、俺に当たって爆発した。

もうもつと黒煙が巻き上がる。木製の床はえぐれ、天井は黒焦げ
になっていた。

「……グッハア、直撃したな」

俺の蹴りを食らい、飛ばされたハンゾーが咳込みながら立ち上がる。
軽く蹴ったが、肋の数本はいかれただろう。

「おい…おいおいおい、嘘だろ。ユースケが爆発しちまったぞ!？」

「見ればわかる!」

「いくらユースケでもあれはまずいぜ! 手当てしねえと!」

レオリオとクラピカの焦った声が聞こえる。駆けて来ようとする

二人を、審判が止めた。

「まだ試合中です。手出しは許されません」

「ざっけんなよッ！ 友人が死にかけてなのに、助けねえ奴がどこにいんだ！？ どけやゴルアッ！」

形相を変えたレオリオがカバンを持って詰め寄る。それにハンゾーが答えた。

「拷問用だから手足がもげない程度に殺傷力は抑えてある。すぐに手当てすれば一命は取り留める」

腹を押さえながら、ハンゾーは既にネテロ会長の前に来ていた。

「オレがトランプを渡したらずぐ手当てしてやるといい」

ハンゾーはそう言って懷に手を入れ。

懷を散々漁りまくり、上半身裸になってトランプを探す。

「ハンゾーよ。トランプはどこにあるんじゃない？」

ネテロ会長が手を差し出し、問い掛ける。

「……どこにもねえ……」

呆然とハンゾーが呟いたとき。

「探しモンはこれか？」

黒煙がなくなり、えぐれた床の上、服も髪も肌も何もかもが元のままな俺の指先に、一枚のランプがあった。

絵柄はジョーカー。

「な、ななな、な、何で、何がどうなって……ッ!？」

目を白黒させるハンゾーに、にやつと笑いかけてやった。

「俺さあ、昔っから手癖が悪くってよー。さっきおめーを蹴り飛ばしたときにこーして」

懷に手を入れ、抜き取る仕種をする。

あの接触した瞬間に、ハンゾーの懷をまさぐって取った。

裏をかいて懷じゃねーとこに隠したってこともあるかと思えたが、ちゃんと懷にあった。とまあそんだけの話だ。

ポカンとするハンゾー。視界の端に、顔の原型すら留めずに驚愕しているレオリオがいた。マジであいついい奴だな。

友人か。悪くない。

「ちょ、待て! 爆弾は!?! 確かに直撃したはずだぜ!?!」

有り得ない、とハンゾーが混乱のまま叫んだ。

爆弾ねえ。

「おめーはマツチぶつけられてケガすつか？」

飛影の邪王炎殺黒龍波とか黄泉の煉破凝集球・斥とかまともに食らったらそらヤベーが、あの程度の爆弾は俺にとつちやマツチと一緒だ。ケガする方が難しいぜ。

俺の問い掛けに、ハンゾーはがっくりと膝をついた。

「……お前何なんだ。本当に人間なのかよ」

その答えは決まってる。

「俺ア魔王だ」

にしし、と笑って言った。それにハンゾーがため息を吐く。

「女王じゃなくて魔王か。信じちまいそうだ」

ゆっくり立ち上がるハンゾー。肋いかれてるだろうに、こいつもタフな野郎だな。

「オレの負けだ。お前にゃ勝てる気が全くしねエ」

そう吐き捨ててハンゾーは壁に下がって行った。

「第二回戦、勝者ユースケ！」

審判のコールに、レオリオの喜びの声が上がった。

「イヤったぜ！ ユースケの勝ちだ！ ハンターになりやがった！」

「ああ。さすがユースケだな」

自分のことのように喜ぶレオリオと、それに笑顔で同意するクラピカ。

二人に近づき、にんまり笑って俺はクラピカを見て、次いでレオリオを見上げた。レオリオの表情が途端に訝しげに変わる。こいつマジ桑原と同じで表情豊かだよな。

「な、なんだよ」

「心配してくれてありがとうな、友人どもよ」

クラピカは微笑み、レオリオは照れて頬を掻きつつ答えた。

「友人だからな」

「心配すんのは当たり前えだっつの」

レオリオとクラピカの間に入り、肩を組む。

そこにねっとりとした視線を感じた。こんな視線を放つ奴はアイツくらいしか覚えがない。

「ねえ。トランプを貸したボクにお礼はないのかい？」

振り返れば、目を細め、胡散臭い笑いを浮かべているピエロ、もといヒソカがいた。肩を組んだクラピカ、レオリオがビク、と跳ね

る。

そうだよな。こいつとは関わりたくねーよな。なら用件はさっさと済まして追い払おう。

「おう。サンキューな。トランプ返すぜ」

二人の肩から腕を外し、ヒソカにジョーカーのトランプを差し出した。だが、奴は手を出さない。なんだ。

「ユースケは魔王かもしれないけどさ、ボクにとってキミは」

パチンと指を鳴らすヒソカ。嫌な予感がした。

手に持つトランプに念を感じ、見遣れば図柄が変わっている。

ハートのクイーン。

「女王様だからね」

パチンとウイंकを向けられた。ブワツと鳥肌きた。周囲からは、女王様、やっぱり、そういう関係か、なんてざわめきが聞こえる。ハラワタが沸騰した。

トランプに周をかけてお返ししてやろうか、と思っていたとき、トランプのど真ん中を針が貫いた。

「カタ……カタカタカタカタ」

宇宙人が針を構え、殺意剥き出しにこちらを睨んでいた。あらゆ

る意味で怖エ。つかおめー、俺にまで殺気向けんなよ。

目で文句をつけていると、傍らでコソコソとレオリオたちが話した。

「こりゃ一体どういう関係なんだ」

「ヒソカのアプローチ、ギタラクルの明らかな嫉妬と思われる様子から察するに、ユースケを間に挟んだ三角関係と推測できる」

「どっしえーッ！ ガチでホモか！」

「違エ！！」

裏拳でズビシッと突っ込む。ヒソカは愉快犯だし、ギタラクルは電波だ。つまり、奴らの俺に対する好意のようなものは、一般に男女間で言われるようなものとは違っってこった。

「カタカタカタカタ、カタカタカタカタ」

「早い者勝ちなんてナンセンスだね。そんな時代錯誤で電波なキミよりボクを選ぶに決まってるだろ」

なぜか会話が成立しているらしい。マジなんなんだコイツら。

ギタラクルからさらなる殺気上がる。笑みを深めるヒソカ。二人の意味不明な会話は白熱していく。

「カタカタカタカタカタカタカタカタ」

「キミといたってユースケが幸せなはずないだろ。だいたいキミ、
どうやって悦ばせるか知らないんじゃないかい。ピーをピーしてピ
ーしたときの快感！ あれをユースケに味わわせ」

「シネ」

ワンパンでヒソカを吹っ飛ばす。ギタラクル、お前を選んだわけ
じゃねーから喜ぶな。殴られて悦ぶなヒソカ！！

周囲はドン引きだ。友人のはずのクラピカたちでさえなんだか壁
を感じるぜ。ひでエ。なぜ俺がこんな目に。

「さっさと次の試合やってくれ」

疲れたように促すと、ネテロ会長が頷いた。

「そうじゃな。第三試合はクラピカ対ヒソカじゃ。……変態と電波
と女王の三角関係はちと気になるのう」

クソジジイ、ぼそつと呟きやがった。聞こえてんだよ。その長い
眉毛引っこ抜いたろうか。

イライラしながら、俺は壁に下がった。

イルミVSキラア（前書き）

B L^がにおう表現あり。 苦手な方は見ないでください。

イルミVSキルア

クラピカ対ヒソカの試合はあっけなく終わった。

試合開始直後、ヒソカはクラピカに耳打ちをした。硬直するクラピカを横目に、ヒソカは棄権した。

俺の特別聞こえのいい耳が聞き取ったその声は、「クモについていいことを教えてあげよう」。どうやらあの野郎、何か知っているらしい。

何はともあれ、クラピカもハンターになった。

第四試合はハンゾー対ポックル。この辺りでキルアが医務室から戻ってきた。でかい湿布が額に貼られている。おおげさな。マジ痛いんだよ、と喚かれても知らねーな。

キルアは俺がデコピンの仕種をすると額を押さえて黙るようになった。いい感じに調教完了だぜ。

ハンゾーとポックルの試合もすぐに終わった。肋が折れていてもハンゾーの戦闘力はポックルを圧倒した。

「悪いがお前には負ける気がしない。お前も爆弾を試すか？」

関節をキめられ、ハンゾーにそう脅されたポックルは、躊躇うことなく降参した。

第五試合はヒソカ対ボドロってオッサン。ヒソカがボドロを瞬時

に戦闘不能なまでに傷つけ、ボドロは降参した。

第六試合はキルア対ポツクル。あのガキ、余裕こいて「あんたじゃ戦つてもつまないから」と棄権しやがった。嫌味なガキだ。

第七試合はボドロ対レオリオ。人生観により怪我人を放っておけないレオリオは、ボドロの手当てを優先させ試合を後回しにすることを提案した。

それにより、先にキルア対ギタラクルの試合を行うことになった。

おもしろいじゃねーか。

俺はキルアとギタラクル、もとい、針を抜けば長い黒髪の美形っつー嫌味野郎、イルミが兄弟だと知っていたから、この試合はなかなか興味深かった。

針を抜いて徐々に顔が変形していくのを見て、キルアは冷や汗をかき出した。どうやらキルアにとってイルミは怖い兄貴らしい。

「……なんで兄貴が」

「次の仕事の関係上資格が必要だったから。キルは母さんとミルキを刺して家出てきたんだよね。母さん泣いてたよ」

衝撃だ。何がって、イルミの野郎、なんだって弟とは普通に会話できてるんだよ。トマトはどうした。かつ飛ばし専門じゃねーのかよ。

さらに言つなら、おめーの母ちゃんが息子に刺されて泣くような

普通の母ちゃんだったことに驚きだ。

と思ったら。

「立派に成長してくれて嬉しいって感激してた」

レオリオがずっこけた。いや。それでこそおめーの母ちゃんだ。

「まさかキルがハンターになりたいと思ってたなんて知らなかったよ」

「別になりたかった訳じゃないよ。ただなんとなく受けてみただけさ」

「そう。安心したよ。心置きなく忠告できる」

宇宙人め、一体どこの星から受信した忠告をかます気だ。宇宙人なだけに見当もつかねー。

イルミはキルアをまっすぐ見て告げた。

「お前はハンターには向かないよ」

お。電波系の忠告だと思ったら、意外に普通だな。で、その理由はなんなんだ。

「お前の天職は殺し屋なんだから」

あー。そういやこいつらの家って暗殺一家なんだっけか。確か後継ぎはイルミじゃなくキルアなんだよな。

兄貴なのに後継ぎじゃないってのにイルミは大して気にしちゃいない。それほどイルミはキルアの素質をかつているらしい。

「お前は熱をもたない闇人形だ。自身は何も欲しがらず、何も望まない。陰を糧に動く。お前が唯一歡びを抱くのは、人の死に触れたとき。お前は親父とオレにそうつくられた。そんなお前が、何を求めてハンターになる？」

つくった、ねえ。初対面で「てめエはオレの手の上で遊ばれてんだ」と吐きやがったくそオヤジを思い出して、ちっとだけイラッとした。

だが、かかってこい、強くなれ、と無言の挑発をしてくるくそオヤジと違い、イルミは頭からキルアを押さえ込んでいる。

キルアはそんなイルミに逆らいきれないようだ。キルアは懸命に言葉を紡いだ。

「……確かに、ハンターになりたい訳じゃない。けど、オレにだって欲しいものくらいある。望んでることだってある！」

イルミみたいに決め付けて上からオヤジに言われたら、俺なら靈丸ぶっ放してオヤジぶっ殺すな。

必死に反論するだけのキルアはまだイルミの支配下だろうが、今に猛反発するぜ。

他人の家庭の事情だから口は出さねーが、イルミめ、逆襲されたときにや死ぬほど後悔しやがれ。そんなときや全力で「ざまあみろ」

って笑ってやらア。

今はまだ完全優位のイルミが、無表情でキルアに尋ねた。

「何が望みの？」

「オレの望みは……ゴンと、友達になりたい」

キルアは搾り出すように言った。

「もう人殺しなんてうんざりだ。普通にゴンと友達になって、普通に遊びたい。それから」

ちらりと横目で俺を見た。

「ユースケとも、友達になりたい」

俺と友達に？

瞬きする俺。目を見開くイルミ。

「ユースケはダメだよ。オレのだから」

「……は？」

「ま、なんにしろ無理だね。お前に友達なんてできっこないよ。お前は人を殺せるか殺せないかでしか判断できない。そう教え込まれたからね。今のお前にはゴンがまぶしすぎて測りきれないでいるだけ。友達になりたいわけじゃない」

「……違う」

イルミの乱暴な理論に、キルアが弱々しい反論をする。

「彼のそばにいれば、いつかお前は彼を殺したくなるよ。殺せるか殺せないか試したくなる。なぜならお前は根っからの人殺しだから」

「……っ」

おーおー。大混乱だ。仕方がない。これはもう既に氣迫負けしてる。というか。

キルアの頭に刺さってる念の針のせいかな。

その存在に気付いたのはキルアの額にデコピンしたときだ。針という形状のあたり、仕掛人はイルミだろう。

キルアがいつそれを刺されたのかは知らねーが、刺されている場所が頭で、「つくった」なんて口にしてるあたり、ソレで思考を操作してんだろうなと思われる。洗脳っつーのか。イルミに逆らわない、闇人形とやらになるように。

キルア自身でいつかその存在に気付き、自らそれを外したときが分かれ道だ。

望まれた闇人形になるか、はたまた兄貴ぶちのめして自由になるか。

キルアがどの道を選ぶか知らねーが、今俺が言えることは一つだ。

口を開きかけたとき、レオリオに先を越された。

レオリオはズンズンと前に出て、審判に止められた。そこから前には行かず、その場で言った。

「キルア！ 兄貴かなんか知らねーが、そんなバカヤローの言葉に聞く耳持つな！ ゴンやユースケと友達になりたいだど？ 馬鹿言え！ とっくにお前ら友達だろうが！！ 少なくともゴンとユースケはそう思ってるはずだぜ！！ なぁユースケ！！」

ギロツと俺に凶悪な視線を向けるレオリオ。お前、それは脅迫だぜ。

驚きに目を見張るキルア。だが、俺が言いてーことはそれだ。俺はキルアにニツと笑いかけた。

「おめーはくそ生意気だが、俺もダチだと思ってるぜ」

つーかかわいい弟分か。

「ユースケ」

キルアの顔がぱつと明るくなる。それは長くは続かなかった。

「ユースケは友達じゃなくて義姉になるわけだからまあいいけど」

「は？ あね？」

イルミの呟きに疑問符を浮かべるキルア。あの電波。キルアが反旗を翻す前に俺がしめようか。それが一番平和的解決な気がするぜ。

「ゴンはもう友達のつもりなのか。まいったな」

いやおめーの思考がまいったんだよ。

電波な宇宙人は、暗殺一家に染まった一言を放った。

「よし。ゴンを殺そう」

殺し屋に友達なんて邪魔なだけだから。そうやって針を構えた。
その針を審判に向ける。

「ゴンはどこ？」

「お答えできま」

ヒュ、と数本の針が審判の頭に刺さる。審判の頭が変形し、もがきながら「トナリのいむしつデス」と吐かされた。

アレやべえな。トライアングルトリック、こいつの針食らって吐かされたら消えちまうじゃねーか。要注意だな。

再認識している内に、イルミは部屋の外に向かい出す。

部屋の外に出るためのドアの前を、レオリオ、クラピカ、ハンター協会に雇われた審判たちが塞ぐ。もちろん俺も。

俺がいるなら、とゴンを気に入っているヒソカは傍観の態勢だ。

「困ったな。ユースケがいたんじゃゴンを殺せない。それにここで

殺したらオレが失格になってキルが合格になるか。なら、合格してからゴンに殺そう」

いいこと考えた、とでも言うようにイルミは言った。

「合格したあとにゴンを殺しても失格にはならないだろ？」

「ルール上はそうじゃな」

イルミの問い掛けにそう返すネテロ会長。息を飲むキルア。イルミは着々とキルアを追い詰めにかかる。

「オレを倒さないとゴンは殺される。でも、お前はオレを倒せない。倒せない敵からは逃げるようつくられたから、お前はゴンを見捨てて逃げるしかない。動くな」

後ろに後退りしたキルアに、静かながら鋭い制止の声かけられる。

「動いたら戦闘開始の合図と見做す。どうする、オレは倒せない。でもオレを倒さないとゴンは死ぬ」

キルアの顔面は蒼白。汗が滝のように流れた。レオリオが「そんな奴の言うことなんか聞くな！ ゴンならオレたちみんなが守る！」と叫ぶが、キルアの耳にや入っちゃいねーだろう。

ひでエ顔色のまま俯き、震える声でキルアは告げた。

「……まいった。オレの、負けだ」

だな。まだイルミへの反抗はおめーにや早かったな。

キルアの降参宣言に、イルミは目が笑わない笑いを浮かべる。

「あーよかった。これで戦闘解除だね。ははは、ゴンを殺すなんて嘘だよ」

ダウト。キルアが頷かなきゃ、おめー、マジでゴン殺す気だった。っつーか、試験後に殺す気だろ。

キルアのことに関しちやキルアが自分で何とかしなきゃいけない問題だから口出ししねーが、ゴンに危害加えるなら容赦なくぶっ飛ばすぜ。

けど、とイルミがキルアの頭に手を置き、心に塗り込むように続けた。

「わかっただろ。お前に友達をつくる資格はない。必要もない。今まで通り親父やオレの言うことを聞いて、ただ仕事をこなしていけばいい。ハンターの資格も今はいらない」

最後まで釘を刺すのを忘れない。徹底した圧迫教育たあたいたもんだ。数年後、反撃ほぼ確定だけどな。

強くなれよ、キルア。

てめーでなんとかしなきゃいけないーことだから余計な手出しはしねエが、お前が望むならいくらでも協力してやつからよ。

キルアはもう何も言わず、聞こえず、見えてすらいらないように壁

に戻った。レオリオやクラピカが何を言っても無反応だ。

そんなキルアをそっちのけに、イルミが俺の隣にやってくる。もうギタラクルとしてキルアから隠れる必要がなくなったからだろう。イルミの手が自然に腰に。回される前にさっと避けた。

「何で避けるの？」

「何で避けねーと思うのかが疑問だ」

「ユースケは恥ずかしがり屋だもんね。かわいいなあ」

「どこをどう解釈したらそうなんだよこの宇宙人が」

俺とイルミの宇宙間通信的な会話に、周囲はざわめく。

ヒソカとアヤシイ関係なんじゃなかったのか？

あんな危ない奴らを手玉に取ってやがるのか。

すげエ。

パネエ。

さすが女王。

なあこれ主語俺か。なんだこれ。地味に心が折れそうだ。

そこに登場、A K Y、あえて空気読むわけがない男ヒソカ。

「ねえイルミ。ボクのユースケを勝手に口説かないでくれるかい」

「何それ。冗談は顔と服装と性格と存在だけにして」

つまり全部か。しかしそれに関しちやおめーもどっこいだ。たぶんおめーの弟も同意するぜ。

「オレとユースケは三次試験のとき、あの密室で愛を誓い合ったんだよ」

いやどんな妄想だ。トマト投げられた覚えしかねエよ。

「おやおや、時間のことを言うならボクなんて一次試験のときから求愛してたよ。ボクの愛をユースケは^{トランプ}しっかり全て受けとってくれたんだから」

飛んできた凶器をガードした記憶ならあるぜ。おめーは愛に殺気を混ぜんのか。とんだブレンドだなあおい。

「まったく、イルミの電波には困ったものだよ。ねえユースケ」

「変態にはしっかりと引導をくれてやって、ユースケ」

一触即発の状態で左右から俺に振る変態と宇宙人。俺の応えは一つだ。

「二人とも逝つとけ」

左右にワンパン。ぶっ飛ばした。すんげー飛んだ。

超すつきりだぜ！

が。

「ああ、ユースケの愛をビンビンに感じたよ……！」

変態が自身を抱きしめ悶えてる。キメエ。

「ユースケは見事なかかあ天下なんだね。何て言うんだっけ、猟奇的な奥さんとかモンスター妻、いやもつと大物だから魔王妻とか」

宇宙人がまばたきなしに電波受信中だ。関わるまい。

興味深そうなジジイの視線や、ドン引き真っ最中の周囲、高い壁を築きやがった友人なんかもう気にしねエ。

「ジロジロ見てんじゃねーぞゴルアツ！！」

凶悪と言われたガンつけで一喝した。中坊ンときに戻った気がした。

第八試合は先送りになっていたレオリオ対ボドロの試合だった。

試合が始まる前、壁に寄り掛かってしゃがんでいたキルアが立ち上がった。

ずいぶんと不穏な空気じゃねーか。

さりげなく様子を見ていることにした。

そして、試合開始の合図直後、キルアが動いた。

一直線にボドロに向かう。その動きはさすが暗殺一家の期待を背負っているだけはある速さと無駄のなさだ。あくまで人間の枠の中だが。

スツと先回りし、首根っこを掴み上げた。

「キルア、おめー何する気だ？」

片手で掴み上げたまま、静かに問い掛けた。

「……離せ」

力無い反論。強気な生意気坊主はどこ行っちゃったんだか。

他の受験生や審判たちのみならず、レオリオとボドロも何事かと戦いを中断してこちらを見た。

「離したらおめーボドロのオッサン殺すだろ」

「……ッ」

キルアの鋭い爪が俺の心臓を狙う。

だが、いくら鋭くても俺の服すら傷つくことはなかった。

すぐに足がとんでくる。

俺の頸椎に当たるが、わずかも動かない。念のこもってねー蹴りなど、ネコパンチと同じだ。

そこでようやく、俺には絶対に勝てないと認めたようだ。首根っこを掴まれたままになる。

ゴンならここで起死回生の一発を考え出す怖さがあるが、イルミに何やら操作されてるっぽいキルアはこれで抵抗はおしまいだろっ。

「おめー、あのオッサン殺してエの？」

「……殺さないと」

違エよ。

「俺は、キルアがあのおっサンを殺したいのかを聞いてんだ。殺してーのか？」

「殺したい、わけじゃない!-!」

キルアが叫んだ。内部ではものすごい葛藤が起きているらしい。

冷や汗すげーし、目の焦点が合っていない。

イルミ。おめーは弟の精神壊してーのかよ。

キルアの頭に刺さる針に念を送るイルミにため息をつく。

「イルミ、俺が話してんだ。邪魔すんな。ターゲット、俺とキルア」

外部からの全ての念を遮断する俺の念、過保護な愛情“モンスタ―ゲージ”を発動した。それにより、イルミからの念がキルアに届かなくなる。キルアの目の焦点が合ってきた。

「キルアよく聞け」

ゆっくりと、疲弊した様子のキルアが俺を見る。

「兄貴にはてめーで勝て。それは自分でやらなきゃ駄目だ。けどどな、そのための協力ならしてやる。やりたくねーことならはねつけるだけの力をつけな」

キルアが鼻で笑った。諦めたような、ガキがしてるのを見ると腹の立つ笑い方だ。

「協力、するって？ オレンち厄介だよ。兄貴はアレだし、親父はもつと強い。ゾルディックの名前は伊達じゃない」

「暗殺一家なんてこたあどうだっていいんだよ。ダチが困ってるから助ける。そんだけ」

「はっ、暗殺一家がどうでもいいわけないじゃん。今はそんなこと言ってるけどさ、実際会ったら絶対後悔するぜ。……オレみたいな闇の生き物が友達、なんてつくろうと思うなんてバカだった」

「確かにバカだな」

自嘲するキルアにバカを肯定してやると睨まれた。人にバカにされるのは許さんてか。プライドの高い奴だ。

「俺がさつきイルミぶん殴ったの見てないだろ」

え、とキョトンとした顔をするキルア。放心状態で気付いてなかったらしい。

ギャグみたいな展開だったが、確かに俺はイルミとヒソ力を殴り飛ばした。

ギャグみたいだったとはいえ、あの二人が真横からの単純な攻撃を避ける間もなく、本気で殴られたのだ。

「俺ア魔王だぜ。人間相手に負ける訳ねーんだよ。イルミやヒソカより俺のが強エぞ。なんならおめーの親父もおめーの前でぶっ飛ばしてやるつか」

につ、と笑うと啞然とした後、キルアも同じものを返した。

さっきの笑い方より、断然こっちのがいい。

「それいいね。親父がぶっ飛ばされてるところ見てみたいな」

「期待に応えましょう。で、てめーが闇の生き物になるかどうかはてめーで決めな。他人に決め付けられたモンに納得してんじゃねーぞ。嫌ならはねつけて、ケジメ付けて来い」

無茶言ってくれるよ、と苦笑するキルア。

「オレが闇人形だから友達がつくれないのか。それともただ弱いから友達がつくれないのか」

首根っこを掴んだままだったところ、離してと言われ手を離す。
もう大丈夫だろ。

キルアは俺の正面に立ち、宣言した。

「オレ、強くなるよ。強くならないと何もできない」

我を通せるくらい。我を、もてるくらい強くなる。

そう告げたキルアは、いい顔をしていた。

「おう。頑張れや」

「オレ、帰る。で、ケジメ、付けてくる。そうしたら」

友達になって。

声よりも、心が叫んでいた。

そんな声が無碍にできるわけがない。

「バアツカ。俺の方はもうダチなんだよ。ま、おめーがちゃんとダチだつて言えるまではダチ予備だな」

「何それ」

ククク、と顔を合わせて笑う。

「じゃ、バイバイ」

「またな」

モンスターゲージをさりげなく解除すると、キルアは堂々と前を向き、歩きだした。戦いに赴く意気軒昂な男の顔だ。

キルア選手、と審判に呼び止められるが、キルアはいつもの生意気な顔で応じた。

「オレ、棄権するから。そのオッサンたちの試合無駄だよ」

さっきまで死んだ魚よりもひでエ顔してやがったくせに。

同じことを思ったのだろうレオリオが、微妙ににやけながら怒った。

「くおらクソガキ！！ オレア19だッ！ オッサンじゃねえっつの！」

ひらひらと手を振り、キルアは部屋を出て行った。

「まったく、クソガキめ」

そうレオリオはやくが、口調は柔らかかった。何はともあれ。

「それでは、試験終了じゃな」

ネテロ会長が宣言し、ハンター試験が終わった。

説明会（前書き）

Bがしな空気あり。 気になる方は見ないでください。

説明会

合格者に説明会が開かれた。教壇があり、学生みたいな机がある。こっぴどい空気、眠くなるんだよね。半分以上聞き流しながらその場にいた。

しかし。

広い部屋の中で、机は多数、聞く人数は少数。座る場所はいくらでもあるつーのに、両隣はヒソカとイルミだ。ここだけやたら人口密度が高い上に、何だか吸い込んだら5分で肺が腐りそうな障気が漂っている気がする。

そんな俺たちの周りにや人が来ねー来ねー。レオリオとクラピカも遠いぜ。お前らダチじゃねーのかよちくしょう。

嫌気がさす説明会の途中にゴンが来た。皆がゴンに注目する。

部屋のドアを思い切り開けて入室したゴンは、一点のみに視線を向け、ずんずん真っ直ぐ歩いて来る。俺の隣、イルミの真横でピタッと止まった。

ゴンの視線を受けながら、前に立つネテロ会長を我関せず見たまま動かないイルミ。瞬きもない。思っただが、宇宙人ってのは目がかわかねーんだろっか。

イルミを険しい顔で見ているゴン。こりゃ、遅かったな、とか隣に座れよ、とか軽口を叩く空気じゃねーな。俺は宇宙人や変態と違って空気の読める男だぜ。

黙って成り行きを見守っていると、ゴンが口を開いた。

「キルアにあやまれ」

どうやらイルミとキルアのやり取りを誰かから聞いてきたようだが無駄だぜ、ゴン。こいつはお前の考えが理解できない。宇宙人とは価値観が違い過ぎるからな。

案の定、ゴンに視線を向けたイルミは心底不思議そうに聞き返した。

「あやまる？ 何を？」

「そんなこともわからないの？」

「うん」

「もうあやまらなくていいよ。キルアのところ以案内してくれるだけいい」

イルミと自分との間に、越えられない価値観の壁があることに、ゴンは気付いたようだ。

「そしてどうする？」

「キルアに、オレたちはちゃんと友達だって言う」

「キルに友達はいらない」

「それを決めるのはお前じゃない！ キルアだ！ オレはキルアを連れ戻す。自分の意思をもてないところになんか、キルアをいさせられない」

「いさせられない、ね。あいつは自分の足でここを出て、自分の意思で帰っていったんだよ」

「でも自分の意思で行動を決められない。お前たちに操られているんだから監禁も同然だ」

そう。だからそれを打開するため、けじめをつけにキルアは帰った。

だが、兄貴でさえどうにもできないキルアが、兄貴以上らしい家族相手にどうにかできるとは思えぬ。だから、俺も後からキルアのそこには行くつもりだった。

初めから一緒に行くなんて過保護なこたあしね。それじゃあいつが一人で立てなくなっちまうから。

俺が行くのはキルアを連れ戻すためじゃない。あいつに協力するためだ。そのところは、ゴンとは少し意見が違う。

「もしも今まで望んでいないキルアに無理矢理人殺しをさせていたなら、オレはお前を許さない」

望んでいたかそうじゃないか。おそらくキルア自身、殺人をどうも思っていなかっただろう。それはキルアが知らなかったからだ。人を殺さない生き方を。

だが、キルアはゴンに会った。そして知った。明るい光が差す道を。

だから、ここから先があいつの望まない殺人になるのだろう。頭に刺さる、己を操作する念の針にキルアが逆らえるとは思えないかな。その際の葛藤で、あいつの精神がどうにかなっちまうんじゃないかってのが俺は心配だ。

「許さないか。で、どうする？」

「どうもしないさ。お前たちからキルアを連れ戻して、もう会わせないようにするだけだ」

ま、確かに一時的にはそれでいいかもしれねーが、それじゃ解決にならねーぞ。

さらにイルミを掴む手に力を込めるゴンに、イルミが手を伸ばす。悪意のふんだんに籠る、念針を持って。

俺が止める前に、ゴンは野生の勘でイルミから手を離し、背後に飛びのいた。いい判断だ。

「ゴン、座れよ」

こんなところでイルミと言い合っても不毛なだけだ。それがわかっていたからゴンを促した。それに、ゴンに対しても言ってるだけのことがある。

頬杖をついたまま、俺はゴンに視線を向けた。

「余所ンちには余所ンちのルールがある。おめーの価値観を押し付

けんな」

「っ……でも！」

「これはキルアの問題だ。てめーでケリつけなきゃいけねエんだよ。それをお前が邪魔すんのは筋が違エだろ」

ゴンが視線を落として唇を噛み締めた。自分にも当て嵌まるものがあったんだろう。頑固だけど素直だねエ。

だが、と続きを口にする。

「ダチが難解な問題にぶち当たってて、それを解決するのに協力するのは、ダチなら当たり前だと思わねエか？」

ゴンの顔が上がる。それにニッと笑いかける。

「キルアの話はまた後だ。見る。今は説明会の真っ最中だ。みんな待ってんだぜ」

合格者たち、試験官たち、ネテロ会長、皆の視線がこちらを見ていた。

「……あ。ご、ごめんなさい」

そうやって謝るあたりの素直さがいいよな。合格者たちも、笑って頷いていた。こうやって皆に受け入れられるあたりがゴンの人徳か。

ゴンは素早く空いている席に座った。

「さて、よろしいかな」

ネテロ会長の仕切りなおしに皆が頷く。

「それでは、説明会を再開します」

説明を始めたのは、ちっこい豆みたいな人間……でいいのか？
妖怪といわれた方が納得できる生き物だった。名前は姿のことく、
マーメンというらしい。

「皆さんにお渡ししたこのカードがハンターライセンス免許証です」

俺の手にもあるが、見た目は地味なカードだ。だが、このカード
には偽造できないようあらゆる最高技術が施されているらしい。硬
貨とかお札みたいなもんか。

「公的施設の95パーセントはタダで使用でき、銀行からの融資も
一流企業なみに受けられます」

公的施設ってどんなところだ。図書館しか浮かばねーな。でもあり
や元からタダだな。ん？つかあれは公共施設か。なんだかわけわ
かんなくなってきたぞ。

「売れば7回くらい人生遊んで過ごせますし、持っているだけでも
何不自由なく暮らせるはずです」

7回くらい遊んで過ごせる、ねえ。頭に浮かんだのはゾルディッ
クの年収だ。隣に座る宇宙人なら、ライセンス売ったところではし
た金とか言いそうだ。腹立たいい。

「それだけに紛失・盗難には十分気をつけてください。再発行はいたしません」

このハンターライセンス、統計じゃあ5人に一人は1年以内に何らかの形でカードを失っているらしい。

プロになった俺たちの最初の試練が、カードを守ることだと。うむ、腹巻ン中入れとか。確かパスポートとかそうやって聞いた。

「次にハンター協会の規約についてですが」

規約。なんだか小難しい話になりそうだ。そう思った途端にまぶたが落ち。

「……というわけで、説明を終わりたいと思います」

の言葉で目が覚めた。見事に中抜けだ。まったく聞いてなかった。ま、何とかなんだろう。

「あとはあなた方次第です。試練を乗り越えて、自身の力を信じて、夢に向かって前進してください。ここにいる8名を新しくハンターとして認定いたします！」

その宣言で説明会は終わった。

「ユースケ、ヒソカ、イルミ、ちとおいで」

説明会が終わったところでネテロのじーさんに呼ばれ、三人揃って別室に連れていかれた。そこは最終試験の面談が行われたネテロ

のじーさんの部屋で、俺たち三人は並んで座布団に座らされた。

じーさんもテーブルの向こう側にあぐらをかいて座る。

「じーさん、茶と茶菓子は？ この間くれるつつたじゃねーか」

「ほっほっほ、今回もすぐ終わる話ゆえ、茶も茶菓子もなしじゃ」

胸を張って約束破られた。このじじい。

「まあ冗談はさておき」

「俺ア本気だった」

「三人の共通点についての話じゃ」

無視しやがった。

共通点だア？ 宇宙人と変態と俺の共通点なんぞ、鼻と目と口と耳の数くらいしか浮かばねーわ。

ネテロのじーさんの言葉に、すぐ正答を弾き出したのはヒソカだった。

「念能力、だろ」

あ、なーる。確かに共通点だ。

ネテロのじーさんが頷いた。

「その通りじゃ。飴をやるう」

ヒソカの前にイチゴ飴が一つ、ぽんと置かれた。思いも寄らないガキ扱いに、差し出された飴を見て目を見開くヒソカ。おかしくて俺ア噴いたね。

「さて、なぜ念能力者のお前たちを呼んだと思う？」

衝撃から立ち直れないヒソカより早く、イルミが答えた。

「ハンター裏試験のことだろ。父さんから聞いた」

ハンター、裏試験？

疑問符が浮かぶ。

ネテロのじーさんはまた一つ頷いた。

「正解じゃ。飴をやるう」

イルミの前にもイチゴ飴が一つ、ぽんと置かれた。ヒソカの後で予想できていたからだろう。イルミはテーブルに置かれた飴を一瞥したただだった。

「では、ハンター裏試験とはなんだと思う？」

ネテロのじーさんの問い掛けに、じーさんの視線も、ヒソカの視線も、イルミの視線も、全て俺に向けられる。俺が答える番といつの間にか決まっていたらしい。

いや待て。始めにヒソカが答えたやつならまだわかるが、これはいくら考えてもわかんねーよ。

と思っっていたら、左右からヒントがくる。

「ボクたちの共通点はなんだっけ？」

「ハンターの仕事は何だと思う？」

念能力者、戦うことが仕事。戦う相手が念能力者の場合があるってことか。

それなのに、俺たち以外の受験生は念能力者じゃなかった。

このままじゃハンターとして危険だ。それはつまり。

「念能力を使えるようになることが裏ハンター試験ってことか？」

ヒソカが拍手をくれ、イルミは。相変わらずの宇宙人発言で俺を褒めた。

「正解じゃ。飴をやるっ」

俺の前にもイチゴ飴が置かれた。こりゃどうも。袋を破り、ポイツと口の中に放り込む。

「うむ。ユースケは念についてもう少し学んだ方がよさそうじゃのっ」

ネテロのじーさんが俺を見て呟く。

「まあとにかく、お前たちは既に念を使用できておる。というわけで、裏ハンター試験も合格じゃ。じゃがのう」

飴をカリッと噛んだ瞬間、飴から何らかの念が吹き出し、体に浸透した。

「おえッ 何だこれ！」

飴をぺつと吐き出す。テーブルに吐き出した飴から、念を感じた。さっきまで何も感じなかったのにどうということだ。

「このように、食べ物に念をこめる念能力者もある。見えるからといって、逆に見えないからといって油断はできんのじゃよ」

ウンウン、と頷くじーさんの目はにやけていた。

「してやったりなツラしてんじゃねエぞゴルア。てめ、何しやがった？」

じーさんの前に霞みのように移動し、テーブルの上から便所ポーズでガンつけた。本職、あるいは妖怪でさえビビる俺のガンつけに、じーさんは飄々と笑う。

「なに、たいしたものじゃない。ただ、今回合格した受験生に念を教えられないようにしていただけじゃ」

「どういうことだ？」

知らねーとマズイなら、教えなきゃ駄目だろうが。

「合格者には心源流の師をつける。そこで念について基礎からしっかり学んでもらう」

「つまり、プロの教師をつけるから、アマの偏った余計な知識を与えるなってことか？」

「そういうことじゃな」

「教えようとしたらどうなる？」

「昔からうるさい口達者な子供に言うセリフは決まっておる。お口にチャック、じゃ」

「言おうとしたら、口が開かなくなるのか」

じーさんがうむ、と頷いた。

「念の効力がある期間は半年、対象は同期の合格者であること、餉の念について正しい知識を伝えること。これがこの餉の制約じゃ」

じーさんは嘘をついていない。ま、そんならたいしたもんじゃないか。

再び座布団に座った。

それさ、と不機嫌に言ったのはヒソカだ。

「食べない。って言ったらどうするの？」

ま、確かに念が籠っていると知っていながら食つのも嫌だよな。特にヒソカは強制されるのは嫌そうだ。

「食わんでもいいぞ。ただ裏ハンター試験が合格にならず、ハンターライセンスがクズになるだけじゃからな」

ぶっ、ははは。食えないじーさんだ。内心笑う俺と違い、ヒソカはキレた。

「本当、殺したくなるじいさんだね」

ヒソカが絡み付くような濃厚な殺気を放つ。だが、じーさんは何事もないかのよいに受け流した。

柳に風のような手応えのなさにさらにぶちキレたヒソカは、凶悪なツラで言った。

「あんたがボクとやってくれるならいいよ」

そこにKS、空気知らないイルミが口を開いてしまった。

「聞いた、ユースケ。こういうのを節操なしっていうんだ。何だっけ、こういう奴って穴があればチクワでもいいんだよね。もうヒソカが何を言ってもまともに聞いたらいけないよ」

空間がひび割れた。

「……イルミ。ボク、さすがにチクワは無理だよ。ボクのピーの方がチクワの穴より大きいもの」

「ツツコミはそこでもいいのかお前」

精彩を欠いたどこかずれている反論をするヒソカに、堪えきれず突っ込む俺。

「萎えちゃったよ。もういいや。これ食べればいいんだろ」

ヒソカは袋を破り、飴を口に入れた。傍らではイルミがいつの間
に食べたのか、ガリガリ飴をかじっている。強制だとか、あんまり
こだわらないらしい。

飴を食べた俺たちに、ネテロのじーさんは言った。

「それから、わかっておると思うが、念は秘匿されるもの。一般
の者に念を向けたり、気付かれたりするようないことがあつてはなら
ぬぞ」

誰でも習得できるものじゃないからこそ、争いの起こる原因とな
る。

もつとも、既に一般人をトランプで殺したり、殺し屋やってたり
する奴にその忠告は意味ねーよな。ま、じーさんもわかってるだろ
うが。

「それでは三人とも、日毎精進せよ。己を過信することなかれ。未
知は警戒すれども恐るるべからず。さあ、行きなさい」

ネテロのじーさんの言葉が、幻海ばーさんの言葉と重なった。

自然と口元が緩む。

「じゃあな、じーさん！」

ネテロのじーさんが頷いたのを横目に、俺たちは部屋を出た。

部屋を出ると、ゴンたちとメルアドや名刺交換をしていたポックルやハンゾーがサアツと逃げていった。俺ではなく、俺の両隣にいる変態と宇宙人が怖かったんだろう。そう信じてる。

俺たちに気付いた gon は、イルミの正面に来て言った。

「キルアのいるところを教えて」

「聞いてどうする？」

「友達に会いに行くのに理由はいらないだろ」

ゴンの主張に、イルミは思ったより簡単に教えた。

「ククルーマウンテン。その頂上にオレたちは住んでいる」

驚いた。おめーンち、ちゃんとこの星にあったのか。けど山の頂上ならなるほど、宇宙に近いもんな。納得だ。

「殺し屋がそんなに簡単に自分の住み処を教えちゃっていいのかい？」

隣に立つヒソカが面白そうに突っ込んだ。

「構わない。地元じゃ有名だしね。それに、家に着くのは無理だろ

うし」

宇宙船使えってか。

イルミの言葉に、ゴンが噛み付いた。

「家に着くのが無理ってどういうことだ！」

「ユースケ、オレこの後仕事なんだ」

「お前、人の話を聞けよ！」

話の途中で急に俺に話し掛けだしたイルミにゴンが怒る。違うぜゴン。こいつは話を聞いてないんじゃない。自分の話を優先してるだけなんだ。

「イルミ、まずゴンに答えてやれや」

「だいたい一ヶ月くらいで戻れるから、家で待っててくれるだろ」

「何でてめーを待たなきゃなんねーんだよ。つか、ゴンを見る」

「さっき父さんたちには連絡しといたから大丈夫だよ」

「どこにも大丈夫の要素が見出だせねエ。何の話だ」

繰り出されるトマトボールに嫌な予感しか感じない。苛立ちを募らせたゴンが声を上げかけたとき。

「どうして家につけないか、行けばわかる。ユースケが家にいない

と準備できないだろ。オレとユースケの結婚式」

空気が凍った。

思考が凍ったまま、口だけ解凍したのはレオリオだった。

「おおおお、お、お、こけっ、け、け」

「落ち着けレオリオ、結婚式だ。それではニワトリだぞ。国によって鳴き声は違うのだが、コケコッコーと鳴くのはジャポン式らしい」

いや、お前も落ち着けクラピカ。

「え、おめでとうございま、す？ あれ、でもユースケはヒソカと？ え、じゃユースケはキルアのお兄さん？」

大混乱だなゴン。ついはまだヒソカのことと誤解してやがるのかよ。

これだけ周りが混乱してくれると、逆に冷静になれるもので。よし、ここは一発、言ってやるぜ。

「はつきり言うがな、俺アおめーと結婚するつもりはかけらも」

「じゃ、一ヶ月後に」

ない、と言う前に艶のある黒い長髪をなびかせ、宇宙人は立ち去った。ああ。急いでたのはわかったとも。だが。

「話を聞けッ！！」

俺の心からの叫びを、横にいたヒソカだけが爆笑する。八つ当たりでヒソカを蹴り飛ばしたら悦びやがった。

俺ア魔王のはず。なのに、なんでこうも思い通りにならねーんだ！
笑いながらヒソカが言う。

「ククク。うん、さすがイルミ。ちゃんと受け答えしていたと思えば、途中で言いたいことができるこそつち優先だからね」

「あのヤロー、会話中に宇宙から受信しやがるんだ。迷惑過ぎるだろ！」

「仕方ないよ、イルミだから」

「それで納得できちまうのが嫌だ」

去り行くイルミの姿を見ながら文句を言いまくる。ゴンたちは未だに恐々俺を見ている。なア。俺が一体何をした！？

フツフツはらわた煮え繰り返らせていると、ヒソカが話し掛けてきた。

「ところで、どうするんだい？ ゾルディックで一ヶ月待つのか？」

「待つわけねエだろ。キルアんとこ行って、一ヶ月たつ前に何とかして、後はトンスラだ」

「ふーん。イルミだけならまだしも、ゾルディック一家相手にどう

にもならなくなったらボクを呼びなよ。逃げるの手伝うからさ」

「人間相手にどうにもならなくなる状況が思い付かねーよ」

「それもそうか。キミ、魔王だもんね」

「おうよ」

胸を張ると、薄笑いを浮かべたヒソカが右手の手の平を俺に向けた。手の平が閉じ、再び開いたときには、そこに名刺が一枚あった。こいつ。名刺出すくらい普通に行動できねーのかよ。常に怪しすぎる。

「これ、ボクのメールアドレスね。携帯買ったらメールくれよ」

メールねエ。

手渡された名刺を見て、鼻を鳴らす。

「空メールでよければな」

「おや。キミはツンデレなの？」

「意味わかんねーよ。じゃなくて、俺ここの文字読み書きできねーもん」

「ああ、そういえばそうだったね。しばらくゴンたちと行動するんだろ。その間に読み書き覚えなよ。読み書きできないのは不便だよ」

まあその通りだな。タワーン中でもイルミに聞かなきゃわかんない

かつたし、イルミの指先に現れた念字もわからなくてヒソカに聞いたんだっけ。

つかイルミといるときに読めないのが厄介なんじゃねーか。イルミと一緒になきゃ問題ねーんじゃね？

いやいや、でも看板読めなきゃ飯も食べねえよな。いつまでいるかわからないとはいえ、読み書きはできるにこしたことはなさそうだ。

「そうだな。日常の読み書きくらいはできるようにならねーとな」

「うん。それじゃ、ボクも用事があるからこれで失礼するよ。携帯手に入れたら空メールでいいから送ってくれよ。じゃあね」

足どりも軽く、このまま立ち去ってくれりゃあいいものを。

思い出したように足を止め、キモい顔で戻ってきたのはゴンの前。肩をガシツと掴む。脂汗を流しながら、ゴンは何事かと真っすぐヒソカを見た。

目を細め、ニマアと笑うヒソカ。青ざめ、脂汗が滝のように流れるゴン。危険信号が点滅する。

ヒソカはゴンの鼻先でうっとり呟いた。

「よく成長するんだよ、ボクの青い果実」

瞬時にゴンを奪い取り、背後に隠す。

「なんだい、ユースケ。ボクがゴンに構ったからって嫉妬しなく」

「ゴンに近寄るなこの変質者が！ 通報すつぞゴルアツ！！」

両手を広げてゴンを背後に庇うと、クラピカとレオリオがすかさず駆け寄る。

「ゴン！ 無事か！？」

「いいか、ゴン！ 3秒ルールつーもんがあつてな、3秒以内ならなかったことになるんだ！ お前は今、触られてギリギリ3秒以内にユースケに助けられてたぜ！ だから大丈夫だ！」

「3秒ルールか。レオリオもたまには良いことを言うではないか。それには根拠がある。とある大学の教授が3秒以内と3秒以上につく細菌の数を調査し、そのルールが正しいと証明したらしい。だから安心したまえ」

「う、うん。ありがとう」

俺を盾にし、口々にゴンを励ますクラピカとレオリオ。3秒ルールを持ち出したレオリオより、さりげなくヒソカを細菌扱いするクラピカ。やっぱおめーが一番酷エわ。

「ククク。キミたちボクを何だと思ってるんだろうね。殺しちゃおうか」

殺害予告に、背後で硬直するレオリオたちの気配がした。

胡散臭い笑顔でトランプを出しかけるヒソカを「待て待て」と止

める。

「おめー用事あんだろ。もう行けよ」

「まあいいか。いつでも殺せるしね。じゃ」

大人しくトランプをしまい、すばやく身を翻した。そこまで本気じゃなかったらしい。というより、俺が止めなきゃマジでさくつと殺して行っただろうから、あいつの冗談と本気はいつでも紙一重だ。

ため息でヒソカを見送り、振り返る。そこには、まだ張り詰めたままの3人がいた。

「おら。固まってねーで行くんだろ。キルアんち」

すぐに我を取り戻したゴンが、頼もしく頷いた。

試しの門

クラピカが電腦ページつーので調べたところによると、ククルーマウンテンはパドキア共和国のデントラ地区つー所にある、富士山よりでっけ山らしい。そんな頂上に住んでんのか。さすが宇宙人だ。

飛行船で三日、そこから電車で山の麓まで来た。ちなみに俺の交通費はクラピカに払ってもらった。俺ア一文無しだからな。そして、返すつもりは鼻糞ほどもねエ。

本当は金ねーし、体動かしてーしでゴンたちが乗る飛行船追っかけて走って行くつつったんだが、クラピカにもレオリオにもやめてくれと言われた。まだ常識を失いたくないんだとか。

そんなわけで交通機関を使って麓についたところ、キルアんちまでは観光バスが出ていると露店のオバチャンが教えてくれた。観光バスって。あいつんちは世界遺産か。

観光客に混じってツアーバスに乗ること数時間。キルアんちの門に来た。巨大で威圧感があり、血しぶきがついていそうな門だ。

そんなまがましいところで、観光客は写真を撮っている。心霊写真が撮れそうだ。

ぼーっと見ていたらカップルに写真を頼まれたので、俺の顔を自分撮りしておいた。けっけっけ。喜べ、魔王のご尊顔じゃ。

「……ユースケ、子供ではないのだから」

クラピカに窘められ、俺の代わりにゴンが撮ってやっていた。できた弟分だ。

写真を撮り終わり、カメラをカップルに返したゴンがガイドに聞いた。

「中に入るにはどうしたらいいの？」

「んー？ ぼうやわたしの話を聞いてたかしら？ 中に入ったら二度と出てこれない、黄泉へのト・ビ・ラ、って言ったのよ？」

ガイドが青筋を立て、笑顔で答えた。

「うん。でも」

言い募るゴンの後ろから、ガタイのいい男が二人出てきた。

「そんなのハッターだろ」

「誰も見たことがない幻の暗殺一家。写真だけで一億ジェニーの懸賞金が懸かってるって話だ」

「ただ噂が独り歩きしてるだけで、実物はたいしたことねえってオチだな」

顔写真に一億ジェニー。写真撮ったときやよかった、と嘆くレオリオに激しく同意だ。今度一枚撮らせろってあの宇宙人に要求してみつか。よしそうしよう。

しかし、おめーらにあの宇宙人が倒せるかつつたらまあ無理だな。顔からしてモブだしな。

モブ顔の男たちは、門の横にある守衛室を襲撃し、中にいるオッサンから通用口らしき扉の鍵を強奪した。守衛のオッサンを放り投げ、モブたちが中に入る。

地面に倒れるオッサンにゴンが駆け寄り、声をかける。なんてい子なんだ。

「あたしは大丈夫だよ。ありがとうばうや。おーいミケ！ ご飯以外の肉を食べちゃ駄目だよ！ 太っちゃうよ！」

ゴンに礼を告げると、守衛のオッサンが門の内側に向かって叫ぶ。

ミケ？

円を広げると、内側にデカイ動物がいた。魔界にやごろごろいる大きさが、人間界にいたらM78からヒーローを呼びたくなる大きさだろう。

そのデカイのがモブたちに近づくと、モブたちの霊気が消えた。デカイ動物に食われた。

デカイのは門に近寄り、扉を少し開けるとガイコツを捨てた。さっきのモブだ。

門の外で、観光客が悲鳴を上げる。すぐさまツアーバスに逃げ込む観光客たち。

「おい！ あんたにも早くバスに乗って！」

動かない俺たち4人にも声かけられるが、ゴンがあっさり断った。

「オレたちここに残るんで、行つていいですよ」

俺もひら手を振ると、観光客たちは化け物を見る目で俺たちを見て、走り去った。

「ところで、君らはどうして残ったんだい？」

尻についた砂を払いながら、守衛のオッサンが立ち上がる。ゴンが答えた。

「オレたち、キルアの友達なんだ」

守衛のオッサンの目が丸くなる。

「キルアぼっちゃんの？」

「うん。会いに来たんだ」

まっすぐ見て告げるゴンに、オッサンがにっこり笑う。

「そうかい。じゃあこっちにおいで。お茶でも出そうかね」

モブ顔の襲撃により壊されたドアから、小さな守衛室の中に案内される。守衛のオッサンは俺たちに茶を煎れてくれた。

オッサンの話によると、さっきのモブみたいな奴らは始終来るが、友人が来るのは初めてのことにらしい。

やはりあの宇宙人にはダチがいなかったか。だからあんなに変になるんだよ。ダチはいた方がいいぜ。

初めて来た友人の俺たちにオッサンは喜んだ。だが、門の中には入れられないという。

「さつき君らも見たでしょう。でかい生き物の腕。あれはミケといってゾルディック家の番犬なんですがね、家族以外の命令は絶対にきかないしなつかない。侵入者は全員かみ殺せ。その命令を忠実に守っている。ぼっちゃんの大事な友達をミケに食い殺させるわけにはいかないから、あたしはあんた達の中には入れられないね」

オッサンの言葉に何を思ったのか、クラピカが口を挟んだ。

「守衛さん。あなたは中に入るんでしょう。中に入る必要がないのなら、鍵を持つ必要もないですからね」

オッサンが鍵を持つてるうちーことは、このオッサンは中に入ってるのに、ミケに食い殺されてないってことか。クラピカのこの冷静さが蔵馬つばいよな。くれぐれもぽい、で止まっとけ。腹黒の道に進むなよ。

オッサンは、半分は当たり、と口にした。

「中には入るが、鍵は使いません。これは侵入者用の鍵なんですよ」
侵入者はたいてい正面から乗り込んで来る。だが、扉が開けられ

ないと守衛のオッサンから鍵を奪い、脇の門から入り、ミケに食い殺される。オッサンは守衛じゃなく、ミケの掃除夫だと告げた。

「つまり、本当の門には鍵がかかっていない、ということか」

クラピカが突き止めたのはそんな解答だった。そしてそれは正解らしい。

レオリオがすぐさま門に向かい、門をぐっと押した。汗を垂れ流し、全力で押した。が、びくもしない。押しても引いても、左右にも開かない。

「くそっ 開かねーじゃねーか！」

「頑張つてレオリオ！ あ、もしかして上に上げるんだつたりして」
全力で押すレオリオと、それを励ますゴンに、守衛オッサンが教える。

「単純に力が足りないんですよ。まあごらんなさい。この門の正式名称は、試しの門。この門さえ開けられないような輩は、ゾルディック家に入る資格なしってことです」

オッサンは上着を脱ぐと門に向かう。体から出る靈気が膨れ上がり、そのままの状態で門を押した。重い門が音をたてて開く。

それを見せ付けると、オッサンは門から手を離れた。たちまち門が閉じる。汗を流すオッサンは、俺達を見て言った。

「ふう。ごらんの通り、扉は自動的に閉まるから、開いたらすぐ中

にはいることだね。ここから入れたらミケは問題ない。試しの門を開けて入ってきた者は攻撃するな。ミケはそう命令されてるんですよ。そうそう、1の扉は片方2トンあります」

「……1の扉は、だと？」

レオリオの疑問に、オッサンは頷いて門の上の方を指差した。そこには徐々に大きくなっていく扉が全部で7つあった。

「一つ数が増えるごとに重さが倍になるんですよ。力を入れれば、その力に応じて大きい扉が開く仕組みです。ちなみに、キルアぼっちゃんに戻ってきたときは3の扉まで開きましたよ」

ヒュウ。やるじゃねえか、キルア。2×3の二つ分で。

「12トン！」

先にゴンが答えてくれた。そうか12トン。へえ、そんなもんを開けたのか。

感心していたら後ろから呆れた声が聞こえた。

「……1の扉が2トンの2つ分で4トン。2の扉が2の2倍で4トン、その2つ分で8トン。3の扉は4トンの2倍で8トン、それが2つ分だから16トンだよ、ゴン」

クラピカが教えてくれた。先に言わなくてよかったぜ。

「おわかりかね。敷地に入るだけでこの調子なんだ。住む世界がまったく違うんですよ」

守衛のオッサンが、扉を開けた疲れを見せながらそう告げた。

まあ確かに面倒な家だな。人間界にある桑原ンちも蔵馬ンちも呼び鈴一個でオツケー、それが普通だ。よく遊びに行った蛭子ンちなんか、メシ屋だから来るもの拒まずの実にオープンな家だし。

それと比べたら住む世界が違うな。

でけ扉を見上げていると、ゴンの身体から怒りが沸き起こった。

「そんなの変だ」

「何が？」

ゴンの怒りがこもる主張に、俺は聞き返す。皆の視線がゴンに向けられた。

「友達を試すなんておかしい。それくらいなら、オレは侵入者でいい。おじさん、カギをちょうだい」

「ちょ、待てやゴン！」

守衛のオッサンに向かって手を差し出すゴンを、レオリオが焦って止める。

「もしカギをくれなくても同じことだよ。扉をよじ登るから。絶対にそんな門からは入らない」

ゴンの目は、こうと決めたらテコでも動かない頑固な目になっていた。こいつマジでおもしれーよなア。

意志の固いゴンに、守衛のオッサンは困ったように頭をかいた。

「困ったねえ。むざむざ坊ちゃんの友達をミケのエサにするわけにはいかないし。ちょっと待っててくださいね」

オッサンは守衛室に戻ると電話をかけはじめた。で、相手に怒られ、ペコペコしながら電話を切った。聞かなくてもわかる。失敗だ。

「屋敷に電話してくれたの？」

ゴンの質問に、オッサンは執事室にかけたのだと答えた。

「屋敷への連絡は全て執事室を通すんですよ。家族まで伝わることは滅多にありません」

そらまた徹底してんなア。

gon はオッサンから電話を受け取り、今度はゴン自ら受話器を持った。

執事にあしらわれて終わった。

ゴンがブチ切れた。

無言だが、ゴンの身体から、凄まじい怒りの靈気があふれる。そのまま門に向かい、釣竿を振った。

「待て待て待てゴンッ！」

慌ててレオリオが再びゴンを押さえる。

仕方ねーなア。

俺が声をかける前に、オッサンが決意を感じさせる声を放った。

「わかりました。侵入者用のカギをゴン君に渡します」

ゴンがぴたつと止まってオッサンを見た。ただし、とオッサンは続ける。

「あたしも一緒に侵入者用の扉から入ります。もしかしたらミケがあたしのおいを覚えていて止まってくれるかもしれない。まあ100パーセント殺されるでしょうがね。坊ちゃんの友達をただ殺されるよりはずっといい」

その言葉を聞いて、 gon は釣竿をおさめた。そして、ごめんなさい、と謝った。

「おじさんのこと、全然考えてなかった」

しゅんとするゴン。オッサンの死を覚悟した固い気配も和らいだ。

沈んだかわいいたガキの頭に、俺はポンと手を置いた。大きなどんぐり目が俺を見上げる。

「オッサンの立場もそうだが、おめーは侵入者の立場でいいのか？」

「え？」

「キルアは3の扉開けたんだろ。なのにおめーはその扉すらあけられねエで、それでちゃんとキルアのダチって胸張って言えんのか？」

ダチなら対等じゃなきゃいけねーんじゃないか、と俺は思っわけだ。

対等じゃなきゃダチになれねーんじゃないか、と思っわけだ。

試される云々じゃない。キルアとレベルが違っていいのか。そういうこと。

俺の言葉に、ゴンは首を横に振った。

「言えない。それじゃオレ、友達なんて名乗れない」

「だな。せめて1の扉くれエ開けねーとな」

うん、と頷くゴン。

状況が落ち着いたのを見取ったオッサンが、ゴンに声をかけてきた。

「それならあたしらの所で特訓していきませんか」

思わぬ提案に、オッサンへと視線が集まる。オッサンは朗らかな表情で説明した。

「試しの門から入って少しのところに、あたしら使用人の家があるんですよ」

何でも、その家は特訓に適した空間らしい。ゴンたちは躊躇うことなく頷いた。

話が決まったところで、クラピカがユースケ、と俺の名を呼んだ。なんだ、と目で促す。

「試しの門だが、レオリオが無理だったのだから、私にも開けるのは無理だろう。だが、君なら開けられるのではないか？」

そう言われて試しの門を見る。開くか開かないかで言ったら開くだろう。キルアでさえ3の扉だ。開かなかったら魔王の座は捨てた方がいい。

「開くと思っぜ」

どこまで開くかわからないが。

「本当、ユースケ!？」

「マジかよ!？ いやお前なら有り得そうだが」

ゴンが期待に満ちた眼差しを俺に向け、レオリオが化け物を見る態度で引いた。ためエ桑原2号、タコ殴るぞ。

「ねえ、ユースケやってみてよ！ お願い！」

俺が開けた門から入ろうというんじゃない、ただ純粹な好奇心だろう。おねだり上手な弟分におねだりされたら、そりゃやらざるをえないってもんだ。

「よっしゃ。7の扉までズドンと開けてやろうじゃねエか」

気合い十分に、拳を反対の手の平に打ち付ける。ガンバレー！と跳びはねて応援するゴンの前だ。いいとこ見せねエとな。

「兄さん、無茶しないでくださいよ。ああ、あんな細い身体で怪我しなきゃいいけど」

「ああ、いや。ユースケは大丈夫だ」

「たとえ扉が壊れてもユースケは無事でしよう」

心配そうにするオッサンの言葉に、レオリオとクラピカが太鼓判を押す。扉が壊れてもってクラピカ。おめーはどうしてそう一言多いんだ。さすがにただ押すだけじゃ壊さねーよ。

俺は試しの門の前に立ち、扉に手を置いた。シン、と静まり返る。

さすがに全力で念まで使ったら開くんじゃなく、門が粉々になっちまうような気がする。

念を使わず、力だけで押すならたぶん全部開けられるんじゃないかな。7までいくかはやってみねエとわからねーが。

手の平に集中し、俺はしばらく全力で扉を押した。

あんまり感覚がなかった。あれ、と疑問を感じたとき。

轟音が響き、砂埃が立ち。

門が吹っ飛んでいた。

門があつた場所には、何もなくなつた。

やべエ。やり過ぎた。

「ギャアアアアッ!!」

レオリオの絶叫がこだました。

「す、すごおおい!! ユースケすごいよッ!!」

ゴンが俺のシャツの裾を引っ張って歓声を上げる。

「ありえない。7の扉は256トン。それを吹き飛ばすことなど人間に可能なのか」

クラピカは何やらマジな顔でブツブツ言ってる。

オッサンに至っては目も口も開けたまま微動だにしない。

「ワリ。まさか飛ぶとは思わなかったぜ。ちょっと待ってる。直すから」

門があつたところから敷地に入り、飛んだ扉まで進む。ゴンは俺のシャツを掴んだまま引っ付いてきた。こういう弟、マジほしい。

扉に近寄ると、音もなく巨大な生き物が近づいてきた。犬を巨大化させたような、そんな生き物。たぶん、ミケ。

闇を映す感情のない虚無の目に、ゴンはヒツと声を上げた。

殺す。

それだけしかない機械みてエな生き物。でも、機械じゃない。機械ではなく生き物ならば、本能が必ずある。

虚無の目が、俺を見た。

それにニイ、と笑いかけた。

「食っちまうぞ」

一撃で首を落とし、むしって、焼いて、食う。

俺にかかってきたら、それがおめーの末路だ。明確な殺意を伝えた。

本能があれば、己の死は恐怖するもの。

脅しなどではない本気を、生き物はちゃんと読み取った。そして、恐怖したのだろう。

生き物はその場に伏せ、頭を垂れた。目はもう合わせようとしな
い。服従した。

コイツにはもう、俺を害そうとする意思は残っちゃいないだろう。
生き物に背を向け、倒れた扉に手をやる。そのまま持ち上げようと
してしゃがむと、シャツが引っ張られた。硬直したままのゴンだ。

「ゴン、危ねエからちよつと離れとけ」

「で、でもユースケ、あの生き物に背中向けるなんて」

「アイツは俺に完全服従した。獣は一度上下を決めたら従順だぜ」

生き物に視線をやったまま、ゴンは唾を飲んだ。じっくり生き物を観察する。

生き物からのプレッシャーに脂汗を流すゴンは、たぶん動物の生態に詳しいのだろう。生き物の状態を正確に読み取った。

「……本当だ。こいつ、ユースケを上だつて認めてる」

「だろ。俺の身内だつてわからせときゃ、襲われはしねーよ」

ゴンの硬直した手をシャツからはがし、俺は門を持ち上げ、肩にかついだ。

巨大な門を軽々と肩にかつぐ俺。

その姿を、啞然とした顔でレオリオたちが見る。その様子に、ふと数年前の暗黒武術会のことを思い出した。

そついや戸愚呂が破壊された闘技場の代わりに、隣の会場から闘技場を肩にかついで持って来てたつけ。

そうだよ。あの闘技場が何十トン、何百トンあったんだかわかんねエが、B級妖怪だった戸愚呂がアレを軽々持ったんだ。魔王の俺ならこのくらいの扉、少し力を込めたらそれだけで飛ばしちまうの

は当たり前だった。もう少し手加減するべきだったな。

扉をかついで元の場所に置き、元通りに嵌め込んだ。どうか倒れませんか。いや、試しの門って名前なくらいだ。根性で立て。

なんとか元に戻し、未だ静かなメンツを見る。ゴン以外全員、硬直していた。

俺が近寄ると、3人は顔を引き攣らせてブツブツ呟いた。

「有り得ねえ有り得ねえ有り得ねえ。そうかあの扉は木の板に代わっていたんだ。そうに違いねエ。よしオレの常識カムバック……！」

「おかしい。明らかに人類が持ち上げることのできる重さの限界を軽く超越している。そうか、そろそろ朝なのか。夢から覚める時間か。いつの間に私は寝ていたのだろう」

「ああそうか、夢だったか。そうだよねえ、坊ちゃんところに友達が遊びに来るなんてやっぱり夢だったんだ」

おい、帰ってこーい。

現実逃避する3人を余所に、ゴンだけが満面のキラキラした眼差いで俺を見た。

「ユースケすごい！ カッコイイ！」

ああ。やっぱりこういう弟ほしいな。

俺はゴンの頭を撫でて答えた。

「俺ア魔王だからな」

ニシシ、と笑うと、ゴンは真面目な顔で頷いた。

「魔王って本当にすごいね」

普通は冗談にされちまう俺の真実を、最初から真実であると理解したのは、そういうゴンだけだったな。ホント、将来が楽しみなガキだ。

「ンなマジな顔で言うなよ。照れちまうだろ」

「だって本当にすごいんだもん。オレじゃ試しの門も開けらんないし、あの生き物も怖いだけだった。ユースケだったら、ヒソカにも勝てそう」

そういやゴンの中で強いヤツつつつたらあの変態なんだっけか。なんだかハンター試験のときあったらしく、ヒソカにプレートを突き返したいようだ。

「ヒソカねエ」

ガチでやったら瞬殺だが、アイツの念能力を引き出してじっくり戦ったら厄介な気はするな。

俺とヒソカが勝負したときの結果より、ゴンが気になっているのは自分とヒソカの差だろう。微笑ましいねエ。その思いのまま、俺は言った。

「おめーなら、将来的にはヒソカにも勝てるぐらい強くなれるぜ」

「ホント!？」

パツと表情が輝く。クク。撫で練り回したくなるんだよなア、こいつ。

「ホント。ま、おめーがこれから努力すればの話だな」

あと、いい師に巡り会うのも大事だ。その辺は、ネテロのじーさんが念の師匠を付けるつつつてたからなんとかなんだろう。

「オレ、頑張るよ」

「おう」

決意のこもる真っ直ぐな眼差しに、頷きで応えた。

にしても。

こないない場面だつちゅーのに、なぜクラピカたちは未だ放心中なんだ。

仕方ねーなア。

フン、と鼻息を吐き、俺は3人に声をかけた。

執事室

ゴンたちは守衛のオッサンが寝泊まりする使用人の家で、特訓を始めた。

オッサンの家は、玄関の扉が200キロあり、食器も椅子みたいな動かして使う家具も、全てが重い。

おもしれーんだが、ここで特訓しても俺アなあ。試しの門壊しちゃった俺にこの特訓はいらねーだろ。

そんなわけで一足早く、俺はキルアと会いに行くことにした。

「キルアに、オレたちが会いに来てるって伝えてね」

屋敷へ向かおうとする俺に、ゴンがそう言った。かわいい弟分をお願いされたら答えは決まっている。

「任せろ。俺が戻って来る前に、お前らは試しの門から入れるようになっとけよ」

「うん！ がんばるよ！ ユースケいつてらっしゃい！」

笑顔で送り出された。

守衛のオッサンは屋敷まで行ったことがないらしく、この道を辿れば着くはず、と山奥へと続く道を指差した。

「ここア門だけで規格外の家だ。何があるかわからんから気をつけ

るよ」

そうレオリオが心配するのを、ため息混じりにクラピカが言葉を放つ。

「レオリオ。ユースケはその規格外の門を破壊した男だぞ。そんな規格を超越したユースケが危機に陥るなど考えられない」

確かに、と頷く面々。そうだなア、俺が危機つつたら、黄泉や飛影だとか魔界の深部に住まうS級妖怪以上の奴らの技をガチでくらうことくらいか。うむ。ククルーマウンテンくらいの山なら、更地にした上にえぐっちまうな。

「ま、心配はありがてエが、俺のことより自分らの心配しといった方がいいだろうな。じゃ、俺ア行くぜ」

3人と守衛のオッサン、ゼブロのオッサンに手を振り、俺は屋敷を目指した。

屋敷までの道のりは天気もよく、まるでハイキングでもしているかのようで、なかなか気持ちがいい。青空と風と緑が心地好くて、俺はゆっくり歩いて屋敷へと向かった。

数時間歩いた頃、石垣が見えてきた。一力所だけ通れるよう道がある。

そこに、カエルみてエなツラしたガキが立っていた。直立不動のそのガキは、スーツを着て、手には鈍器を持っている。凹凸のない体つきだが、髪形から女だろうと推測する。

少女は俺を見ると、無表情に行った。

「ここは私有地よ。ただちに立ち去りなさい」

「私有地なのは知ってんだよ。俺アキルアに用があつてね。呼んでくれっか？」

「そんな話は聞いていないわ。即刻立ち去りなさい。さもないと」

少女は無表情なまま、鈍器を俺に向けた。

「強制的に排除するわ」

強制的に排除、ねえ。

見たところ、実力的にはゴンのちょい上、くらいか。うむ、ドングリの背くらべ過ぎてわかんねーな。まあ、その鈍器で殴られたところで俺にゃノーダメージな上、鈍器が折れるだろう。

「ガキをいじめる趣味はねーんだわ。キルアを呼んでくるか、通してくんねーかな」

笑いながら念で圧力をかけてみた。途端に少女はガタガタ震える。震える額からツー、と汗が流れた。

すぐに念を引っ込める。少女は尻餅をつき、その体勢でじりじりとあとずさった。顔面蒼白で、ものすごい冷汗だ。声も出ないらしい。

あちゃ。いじめ過ぎたか。

近寄って目の前にしゃがみ込み、少女と目を合わせた。少女の口から、ヒツ、と鋭く悲鳴が上がる。

「なあ。俺アよ、ここを通ろうと思えば通れるんだわ。わかっただろ」

俺の確認に、少女はガクガク震えながら、首を縦に何度も振る。

「だが、おめえにも役目があんだろっから、おめえが何らかの行動をするくらいは待ってやる。俺をこのまま通すなり、キルアを呼びに行くなり、それはおめえに任せる。だが、おめえが何の行動も取らず、まだ通さねえっつーんだったら、俺はおめえを無視して通るぜ」

さて、どうする。

問い掛けると、少女は震える声で、必死に言葉を紡いだ。

「しっ、執事ちょ、長につ、聞いて来ますっ」

「了解。ここで待ってっから、浦飯幽助がキルアに会いに来たって伝えてくれよ」

少女は再び首を縦に振ると、不自然な動きで立ち上がり、歩いて行く。あの動き、なんか芸人がやってた気がすんだよな。何だっけか。生まれたばかりの子馬か子鹿だったか。ちよつとばかり、怖がらせ過ぎちまったかな。ま、いいべ。

待つこと数分、黒服の男たちが一列にやって来て、ずらりと石垣

の前に並んだ。

長身の中に一人だけ小さいのがいると思えばさきほどの少女だった。女は少女だけらしい。

黒服の中から一人、眼鏡をかけた男が柔和な表情で前に出る。

「ユースケ・ウラメシ様とお伺いしました」

「おう。あんたは？」

「当家の執事をまとめております、ゴトーと申します」

ゴトーという男が恭しくお辞儀すると、他の執事も寸分の狂いなく一斉に頭を下げた。

「ゴトーさんね。よろしく」

「ゴトーとお呼びください。イルミ様よりもてなすよう、おおせ付けしました。客人として、我ら一同、ユースケ様をおもてなし致します」

イルミ様から、ねエ。嫌な感じだ。イルミの野郎が俺のことを連絡していたらしいが、あのイルミだ。どんな連絡をしたのか、もののすごい不安しか覚えななんだが。

まあとりあえずこの先に進めるようだし、金持ちのオモテナシつづのに興味も感じるしで、俺はゴトーに案内されるままに着いて行った。

案内された場所は屋敷ではなく執事室で、俺は首を傾げた。まあ人間界にあるウチと比べりゃ、執事室でも十分屋敷っちゃ屋敷だ。天井やけに高エし。トランポリンできんじゃなかるうか。

「ここでオモテナシか？」

「いいえ。正式な場所は屋敷なのですが、そちらは現在準備中のため、申し訳ございませんが、もう少しこちらでお待ちください」

ゴトーが貼り付けたような柔和な表情で答えた。

準備中、ねエ。一体なんの準備してんだか。

高そうなソファに腰を下ろすと、すぐにお茶が運ばれてきた。もちろん茶請けつき。

お茶が入ってるこのカップも、茶請けがのってるこの皿も、もしや人間界でいう有馬やウェッジなんとかみてエな有名な食器なんだろうか。だからといって躊躇するような繊細さの持ち合わせはないが。

むんずと掴んで飲食する前に、以前ネテロのじーさんに出された飴を思い出した。

この茶と茶請けに念が込められている可能性はあるか？

……。

面倒臭エ。いちいち出されるモンに警戒するなんてやってらんねーよ。念入りならそんでいいや。

紅茶っぽい色とにおいのお茶をズズツとする。茶請けのクッキーをバリバリ貪って、ごっくん。またお茶をすすり、口直しをする。

お茶もクッキーもなんつーか金持ちの舌用なのか、あんまし俺の口には合わないような気がするぜ。人間界で食ってたヤツと、味が違う。こっちは俺が今まで食ったことのないモンが、一味加わってるような。

考えながら貪り続けていると、正面に立つゴトー、その他同じ部屋にいる執事数人、皆の視線が俺に集まっていた。一様に啞然とした顔をしている。なんだこいつら。

もももことたぶん超高級クッキーを食い続ける俺に、ゴトーが柔和な表情は変えずに、目だけマジに言った。

「さすがイルミ様のお選びになった方ですね。その紅茶にも、クッキーにも、超大型の獣でさえ一滴で致死量の猛毒が含まれています」

ブツ

俺の口から、唾液混じりのクッキーの粉が跳び散った。

すかさず二人の執事が拭き取ってくれたが、その顔面にはガスマスクのようなものをつけ、拭う手には金属繊維の手袋が嵌められている。拭き取った手ぬぐいはポリ袋に入れられ、金属製のダストボックスに手袋ごと廃棄された。

その後、スプレーで何らかの液体を吹き掛けると、執事たちは俺に一礼し、下がった。

ちょ待てや。

「……毒？」

「はい。イルミ様から、ご自身がご帰宅されるまで、ユースケ様を家に留めておいてほしいと望まれました。ユースケ様は恥ずかしがり屋なので、何もせずにいると逃げてしまったため、昏倒させておくように、とのご指示です。また、通常の毒では効かなそうなので、屋敷で最も強い毒を盛るようにとも」

あんの宇宙人め。

頭が痛いのは毒のせいじゃないと思いたい。

「それで俺が死んだらどーすっ気だよ」

呆れて突っ込むと、ゴトーはにっこり笑った。

「死体処理には定評がございますのでご安心ください」

なかったことにされるらしい。

やっぱあの宇宙人の家だよ。ろくなもんじゃねーわゾルディック。

「ま、人間に効果のある毒じゃたぶん死なねエけどな」

何せ魔界の空気が既に猛毒だ。それに慣れきった体が、人間の毒ごときでどうにかなると思わねー。

「そのようですね。今度はより強毒を手配しておりますので、少々

お待ちください。ああそうだ。屋敷の方の準備がまだ整っておりませんので、もうしばらくの間、ゲームはいかがですか」

ゲーム、と口にしたゴトーが出したのは、1枚のコインだった。パドキア共和国に来るまでに使ったからわかる。1ジェニーコインだ。

ゴトーは俺の返事など聞かず、コイントスをする则高速で両手を動かし、片方の手の中にコインを隠した。なかなかのテクニツクだが、あくまで人間の速さ。

「さて、どちらの手に入っているでしょうか」

俺の目には、動きがスローモーションのように見えていた。迷わず左だと答える。

「正解です」

ゴトーが左手を広げると、すっかり1ジェニーがあつた。

「では、レベルをあげますよ」

「ちよい待ち。それ、俺にもやらせろよ」

手を差し出す俺。ゴトーは一瞬止まったが、すぐに俺の手にコインをのせた。

「よく見てろよ」

そう忠告し、俺はコインを高く投げた。

高く。

高く高く。

トランポリンができそうなくらい高い天井へ。

ゴトーの目だけではなく、他の全ての執事たちの視線が天井へ向かうコインに集まる。

その隙に部屋を出た。

飯に毒を混ぜるような奴らのオモテナシの準備なんか待てつかよ。さっさとキルアんとこに行くべ。

突然消えた俺の姿に、執事たちが騒ぎ出すのはもう少し後。

カルト（前書き）

猟奇的な表現あり。

ゾルディックの兄弟や家族について、設定や性格に捏造あり。

以上の違和感に納得できない方は読まないでください。

カルト

執事室から出ると、さらに奥に城が見えた。あれがキルアんちだろつ。

道に沿って城に向かって行くと、叢に人間の気配がした。脇道だが、ちよつくら見てみつか。

叢をかきわけて中に入っていくと、小さな姿がしゃがんでいるのが見えた。黒いオカッパ頭に黒い着物を着た、小学校低学年くらいの少女だ。

何してんだ、としゃがみ込む少女の背後から見下ろすと、少女の手元が真っ赤に染まっているのが見えた。

少女の血ではない。その小さな手に、猫みてエな動物がグチャグチャになっているから、血はその小動物のものだろう。

切り刻まれ、耳が取れ、内臓がはみ出しながらも、小動物はまだピクピクと反応していた。心臓の音もする。まだ生きている。

その首を、少女は握りしめ、とどめをさした。愉快そうな気配。そうか。この小動物をここまで痛め付けたのはこのガキか。

「うへえ。イイ趣味してンな」

上から声をかけると、少女はその場を飛びのいた。猫みたいな目が驚愕の眼差しで俺を見上げる。

「誰！？　なぜここにいる！？」

この目。このオーラ。少女が誰か、なんとなくわかつちまったぜ。

「俺ア、幽助だ。おめーの兄貴、キルアのダチみてエなもんかな」

「キル兄様の？」

訝しげに目を細める少女が言ったのは、キル兄様。やっぱ兄弟だったか。当たりだ。オーラが似通ってるもんな。

「どうやってここまで来たの？　試しの門は？　ミケは？　執事たちはどうしたの？」

口速に質問を繰り出す少女に、俺は答えた。

「ちゃんと試しの門開けて入ったぜ。ミケは大人しく通してくれたし、執事たちも快く送り出してくれたな」

門は開けたつつか壊して入り、ミケは脅し、執事たちは騙した。なんて言わない。

「そんな細い体であの門開けたんだ。見た目よりやるんだね」

「まあな。俺ア魔王だからな」

「ふーん。電波系？」

そりやおめーの一番上、かわからんが、トマトキャッチボールが得意の兄貴に言えや。

とりあえず、このガキはやっぱりあいつらの兄弟だぜ。失礼なあたりに残念な遺伝を感じる。

「おめーの名前は？」

「僕はカルト。カルト・ゾルディックだよ」

僕。

僕？

「あ。ありや何だ？」

空を指差すと、カルトは指差された空を見た。その隙にさっとチエックした。

股間にふくらみ。手に慣れた感触。

おオ。

コイツ男か。

空を確認して何の異変もなかったことを知り、視線を再び俺に戻す少女、もとい、女装少年。

「何？ 何もないよ？」

「あー。おかしいな。なんか円盤みてエなモンが見えたんだが気のせいだったか」

「本当に電波なんだね」

冷たい眼差しながら、俺の行動には一切気付いちゃいない。ふふ。気付かれるヘマはしないぜ。

「で。カルトはなんでそいつ殺したんだ？」

握りしめている手を指差すと、カルトはそれを放り棄てた。

「コレ？ 飽きたから。だって弱いんだもん。何？ 説教？ 僕のペットをどう扱おうと僕の自由でしょ」

この腹立たしい物言い。さすがあの兄弟だ。

弱いから気まぐれに蹴り殺した。そういうことか。

ニイ、と唇の両端を上げると、俺はカルトに向けて小さく殺気を放った。

「……ッ」

俺の殺気を受けた小さな体がガタガタ震える。顔面は蒼白で、脂汗が流れた。

「弱エなア。飽きちまった。殺そっか」

冷めた口調で言っていると、カルトは腰が抜けたように、ペタリと地面にしゃがみ込んだ。それに立ったまま視線を合わせ、告げる。

「弱エから殺すンなら、自分が弱かったら殺されてもいいってこつたな。快樂で生き物殺すンなら、快樂で自分が殺される覚悟しろよ」

そのまま放置して去ろうとしたら、異臭とジヨー、という音。あ、もしかして。

「……つく、えくつ、も、もれちゃった……っ」

嗚咽とともに自己申告どうも。

水音がしていたから近くに川があるのはわかっていた。

泣きじゃくるガキを放っておくわけにはいかず、俺は仕方なく川に連れて行き、ガキを川に突っ込んだ。丸洗いじゃ。

「ほれ、着物脱げ」

「……ヒクッ……シヨタコン？」

「沈めっぞ」

カルトは素早く着物を脱いだ。そんなややこしい着物をちゃんと自分で脱げるんだからたいしたもんだ。脱げねーつつたら代官脱ぎさせてやるが。お代官様あーねーって帯引っ張って回転させるアレだ。

脱いだ着物を受け取り、濡れたまま木の枝にかける。

ここまでやってやりやもういいだろう。

「家、近くだろ。どうせおめーんちの敷地内だ。そのまま家帰れんだろ」

「野外露出プレイ？」

「誰だ、それ教えたの」

「ひつ　み、ミル兄様でしゅ！」

ミル兄様？　どっかで聞いたような。……イルミが言ってたヤツか。たしかミルキ。イルミに無駄知識を教えた死刑野郎か。

「いいか、カルト。その単語は忘れる。いらねえ知識だ」

「あい！　わしゅれまちた！」

恐怖で舌が回ってねーし。さっきのクソガキと同一人物だと思うとおもしれーな。

俺は着ていたシャツを脱ぐと、素っ裸のカルトに着せた。

これ、元はクラピカのシャツなんだが、裾も袖もやはりカルトには大きかったよいで、裾はスカート丈だし、袖は手が出ない。

シャツを身に纏ったカルトが眉をしかめて呟いた。

「……汗くさい」

「文句言っなら返せ」

「ごめんなさい。ありがとうございます」

「よし」

クラピカに借りてから一切洗ってねーしな。まあ臭いだろう。だが、借りる立場のくせにそりや言わせねエ。

「送ってってやるから案内しろよ」

「はい！」

いい返事だ。キルアに続き、ゾルディック家二人目の調教完了。

一番厄介な宇宙人野郎こそ調教してやりてエが、アレは無理だ。諦めた。関わらねエのが一番だ。

カチンコチンの状態でカルトは俺の僅か前に立ち、案内し始めた。思ったら石に躓いてこけそうになる。どじっ子かよ。首ねっこを掴んで助けてやった。しょうがねエな。

「ほれ、手出せ」

「切り落としましゅか！？」

「こけたくらいでんなことすつか。どうなってんだよゾルディック。手、つなぐんだよ。こけねーように」

猫目をキョトンとさせたカルトの小さな手を、呆然としている内に握る。

「ほら。案内」

「……はい」

やけに神妙に、カルトは歩き始めた。

しばらく無言で歩く。微妙な空気だ。なんか会話すつか。

質問を考えたら、知りたいことが出てきた。

「なあカルト」

「ひゃいッ！」

いや怯えすぎだろう。

「お前らって何人兄弟なんだ？」

「はい！ 一番上がイル兄様で、二番目がミル兄様、三番目がキル兄様、四番目がアルカ、五番目が僕です！」

おでれエた。あの宇宙人が長男かよ。兄弟多い家の長男ってもんは、もっとしっかりしてて常識あるヤツだと思ってたぜ。

「イルミ、ミルキ、キルア、アルカ、でおめーがカルトね。なるほど。しりとるか。で、5人兄弟でみんな男か？ むさ苦しいねエ」

「はい！ むさ苦しいです！」

はきはきとしたおうむ返しに即答に思わず吹き出しちゃった。かわいいいじゃねーの。

「まあ、キルアやカルトみてエのならそんなむさ苦しくはねーか」

黒髪のおカツパを、繋いでいない方の手でぐりぐりと撫で回す。

「え、あ、あの」

目を白黒させているカルト。小動物鬨り殺すようなクソガキだが、こんなところはまだかわいげがある。

「おめーの兄ちゃんたちって、おめーから見たらどんなん？」

「兄様たちですか。イル兄様は、……ちょっと変わった人？」

「ちょっとで済むのかアレ」

俺が今まで出会った中でトップの宇宙人だぞ、おめーの兄ちゃん。

「ミル兄様はブタで」

「どう突っ込んだらいいんだそれは」

「キル兄様はおもしろいから好き」

「そっか」

弟に好かれてるなんて良かったじゃねーの。微笑ましいねエ。

「アルカは人間なのかすらよくわからない」

「待て待て待て」

どうなってんだよゾルディック。人間なのかわからないのが他にもいるのか。ちなみにイルミは人間じゃない。

「あんま突っ込むとドツボにはまる気がする。なら父ちゃんと母ちゃんはどうなんだ？」

「母様はヒステリーで、父様は強くてかっこいい」

ヒステリーって。確かキルアに刺されて喜んだ母ちゃんだよな。さすが宇宙人の母ちゃん。一癖も二癖もありそうだな。

「へえ。親父をカッコいいって言えるのはいいな。俺の親父はロクデナシばかりだからなア」

俺の言葉に、カルトはキョトンと俺を見上げて聞き返してきた。

「ユースケ様には父親がたくさんいるんですか」

様ア！？

気持ちの悪い敬称に、ブツと吹き出した。その呼ばれ方は気持ち悪い。

「様はいらねー。幽助でいいぜ」

「じゃあユースケ」

「ん。俺の親父は二人いたんだが、一人は女子供殴るカスで、一人

は。そうだな、とんでもねエ大馬鹿野郎だ」

何せ「腹減った」が最期の言葉だ。本当に馬鹿な親父だった。

「大馬鹿野郎なのに、ユースケはその人が好きなの？」

カルトの黒い猫目が、不思議そうに俺を見上げていた。俺ア大馬鹿野郎って罵ったはずなんだが、なぜ好きなんてことになったんだ？

そう聞いたら、カルトは答えた。

「だってユースケ、なんだか優しい顔だったから」

どんな顔してたんだ俺。俺がアイツを好きだって？

「さアてね。ま、ああいう大馬鹿野郎は嫌いじゃねーな」

「難しい。嫌いじゃないなら好きなんじゃないの？　好きって言えばいいんじゃないの？」

「そうだな。そういうスパツと二択ってのは大好きなんだが、気持ち一つのは二択じゃねーらしいんだわ。俺にもよくわからん」

「ふうん。あ、……二択じゃないっていうの、わかるかも」

カルトはちらりと俺を見た。

「僕、ユースケが怖い。怖いって嫌いの方でしょ。でも、服を貸してくれて、こうやって手をつないで、頭撫でてくれて、話を聞ってくれるユースケは好きだと思うんだ。怖いけど、好き」

なんだか絶叫系とかホラー映画を好きかと聞かれたヤツの返事みたいだな。怖いけど好き。そりやお前、怖いのが好きなんだろ。

「そうか。俺も、小動物嬲り殺しやがるとんでもねークソガキだと思ってたが、こうやって怖がりながら一生懸命話すおめーはかわいげがあつてけっこう好きだぜ」

そう言つてやったら、カルトがうれしそうに頬を赤らめて笑つた。かわいいねえ。こういう弟も悪かない。いや、やっぱ小動物嬲る弟はいらんな。

カルトは会話をしている内に緊張を緩めたらしい。口調が崩れ、表情も和らいだ。

「キル兄様は、今ミル兄様のお部屋にいるんだよ。ミル兄様が刺された仕返しに拷問してるところ」

それをさらつというのか。どうなってんだよゾルディック。

「んじゃあ、そこに連れて行ってくれよ」

「うん。いいよ」

軽く応じたカルトは、俺の手をぎゅっと握つて前に進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6806v/>

魔王の壁越え

2012年1月5日21時46分発行